

大阪市天王寺区

細工谷遺跡発掘調査報告 Ⅱ

筆ヶ崎町における細工谷遺跡発掘調査報告書

2007.12

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市天王寺区

細工谷遺跡発掘調査報告

Ⅱ

筆ヶ崎町における細工谷遺跡発掘調査報告書

2007.12

財団法人 大阪市文化財協会



調査地遠望(北東から)

大阪市天王寺区

細工谷遺跡発掘調査報告

Ⅱ

筆ヶ崎町における細工谷遺跡発掘調査報告書

2007.12

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

本書は2006年度に行った細工谷遺跡発掘調査の成果をまとめたものであり、同遺跡に係わる本格的な報告書としては第2冊となる。

今回の調査地は、かつて和同開珎の枝銭や「百済尼寺」の存在を示す墨書土器が出土した地点のすぐ北側にあたる。また、難波京の中心大路とされる朱雀大路推定地にも接している。これらは国際都市大阪の発端にも位置づけられる遺跡であり、その歴史的景観を復元することは、大阪が成立する過程を明らかにすることに直結する。今回の成果がそうした作業の一助となれば幸甚である。

最後に、発掘調査ならびに報告書刊行に当ってご尽力を賜った関係各社・機関、ならびに周辺住民の皆様に心より感謝の意を表したい。

2007年12月

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会が2006～2007年度に実施した、筆ヶ崎町における細工谷遺跡発掘調査(東調査区；SD06－2、西調査区；SD06－3)の報告書である。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会文化財研究部次長兼調査担当課長南秀雄の指揮のもと、同部技術管理担当課長代理趙哲済(現同部兼難波宮調査事務所長)・同部普及担当係長櫻井久之・同部調査課難波宮調査事務所長代理高橋工が行った。調査の面積・期間などは第Ⅰ章第2節表1に示した。本書の編集は南および趙の指導のもと、高橋が行った。執筆はおもに高橋・櫻井が行い、各文末に文責を示した。また、英文目次・要旨の作成は大阪歴史博物館学芸員宮本康治が行った。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、近鉄不動産株式会社と大阪府営筆ヶ崎住宅民活プロジェクト竹中・浅沼特定建設工事共同企業体代表株式会社竹中工務店大阪本店が負担した。
- 一、本調査の基準点測量は株式会社かんこう、写真測量及び図化はアジア航測株式会社(東調査区)・株式会社かんこう(西調査区)に委託した。
- 一、遺構写真は調査担当者が撮影した。遺物写真の撮影は寿福滋氏に委託した。
- 一、発掘調査で得られた遺物・図面・写真などの資料はすべて大阪市文化財協会が保管している。
- 一、遺跡調査中、大阪赤十字病院には写真撮影について便宜を賜った。記して深謝します。

凡 例

1. 本書で用いた層序学・堆積学的用語の中で、遺跡に係る特殊な用語については[趙哲済1995]に準じる。
2. 本書における遺構名の表記には、柵はSA、建物SB、溝SD、井戸SE、土壇SK、柱穴SPその他のものはSXをそれぞれ冠している。遺構番号は遺構の種別に関係のない通し番号とし、2～3桁の数字で表している。
1～70番は東調査区、71番以降は西調査区の遺構である。
3. 遺物には原則として本書での通し番号を順に付している。
4. 水準点はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文中では「TP+○m」と記した。また、座標値は「測地成果2000」に基づく。
5. 本書で用いた地層の土色は[小山正忠・竹原秀雄1967]に従った。
6. 本書で用いた土器編年と器種名については次の文献に拠った。本文中では煩雑を避けるため、これら引用文献をその都度提示することは割愛している。古墳時代の須恵器：[田辺昭三1981]、飛鳥・奈良時代の土器：[古代の土器研究会1992]。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査および報告書作成の経過	3
1) 調査の経過	3
i) 東調査区	
ii) 西調査区	
2) 報告書作成の経過	4
第Ⅱ章 遺跡の立地と周辺における既往の調査	5
第1節 細工谷遺跡の立地	5
第2節 細工谷遺跡と周辺における既往の調査	6
第Ⅲ章 調査の結果	9
第1節 層序	9
1) 東調査区の層序	10
2) 西調査区の層序	12
第2節 東調査区の遺構と遺物	16
1) 古墳時代以前の遺構と遺物	16
i) 五合谷支谷	
ii) 盛土	
iii) 溝	
2) 飛鳥時代の遺構と遺物	20
i) 溝	
ii) 掘立柱建物	
iii) その他の遺構	
3) 江戸時代以降の遺構と遺物	22
4) 各地層出土の遺物	27
5) 近世遺構出土の古代以前の遺物	28
i) 古墳時代の遺物	
ii) 飛鳥・奈良時代の遺物	

第3節	西調査区の遺構と遺物	30
1)	古墳時代の遺構と遺物	30
	i) 溝	
	ii) その他の遺構	
2)	飛鳥時代の遺構と遺物	31
	i) 溝・土壇	
3)	奈良時代の遺構と遺物	35
	i) 土壇	
	ii) 溝	
4)	平安時代の遺構と遺物	47
	i) 第6a層下面および第6b層上面	
	ii) 第5b層上面、第6a層上面および層内	
5)	鎌倉・室町時代の遺構と遺物	49
	i) 第4b-2層上面、第4b-3層上面および下面	
	ii) 第4b-1層上面および下面	
	iii) 第4a-4層上面、第4a-5層上面および下面	
6)	江戸時代の遺構と遺物	52
	i) 第3a層下面、第3b層上面、第3c層下面、第4a-1層上面、地山層上面	
	ii) 第2層下面および上面	
7)	各地層出土の遺物	55
第IV章	まとめ	59
1)	五合谷	59
2)	古墳時代	59
3)	飛鳥時代	59
4)	奈良時代	59
5)	平安～江戸時代	60
第V章	調査成果の検討	61
	細工谷遺跡周辺の古代における谷の開発について	61
1)	埋没谷の復元	61
2)	谷の開発とその時期	64
3)	難波京朱雀大路の問題	65
4)	「百済尼寺」所在地の問題	67
引用・参考文献		69
あとがき・索引		
英文目次・要旨		

原色図版目次

東・西調査区出土の遺物

上：東調査区出土の古墳時代の土器

下：西調査区出土の飛鳥時代の土器

図版目次

- | | |
|--------------------|-----------------------|
| 1 東調査区 層序 | 下：調査地と細工谷遺跡(北東から) |
| 上：東壁地層断面(谷南部) | |
| 中：東壁地層断面(谷北部) | 10 西調査区 五合谷内の地層 |
| 下：南壁地層断面(谷頭付近) | 上：谷部南北地層断面(東から) |
| 2 東調査区 五合谷支谷 | 中：谷部東西地層断面西部(南から) |
| 上：五合谷支谷遠景(北から) | 下：谷部東西地層断面東部(南から) |
| 中：五合谷支谷近景(北から) | 11 西調査区 古墳・飛鳥時代の遺構(一) |
| 下：支谷内土器出土状況(南東から) | 上：SD73・75完掘状況(北東から) |
| 3 東調査区 古墳・飛鳥時代の遺構 | 下：SD73・75完掘状況(西から) |
| 上：溝群(北東から) | 12 西調査区 古墳・飛鳥時代の遺構(二) |
| 中：谷頭盛土(北東から) | 上：SD71・73断面(東から) |
| 下：SD56・63(北東から) | 中：SD73遺物出土状況(南西から) |
| 4 東調査区 古墳時代の遺構(一) | 下：SX72(北東から) |
| 上：SD56(北東から) | 13 西調査区 飛鳥・奈良時代の遺構(一) |
| 中：SD56(西から) | 上：SD75完掘状況(北東から) |
| 下：SD56(南西から) | 下：SD80完掘状況(北東から) |
| 5 東調査区 古墳時代の遺構(二) | 14 西調査区 飛鳥・奈良時代の遺構(二) |
| 上：SD56(西から) | 上：SD75・80断面①(東から) |
| 中：SD56(東から) | 中：SD75・80断面②(東から) |
| 下：SD56(西から) | 下：SK77～79(南西から) |
| 6 東調査区 飛鳥時代の遺構 | 15 西調査区 平安時代の遺構 |
| 上：五合谷支谷遠景(北から) | 上：SD83完掘状況(北東から) |
| 中：SA54(北東から) | 中：SD83断面(東から) |
| 下：五合谷支谷地層断面(北東から) | 下：SK84・85(北東から) |
| 7 東調査区 近世の遺構(一) | 16 西調査区 平安時代～室町の遺構 |
| 上：SE01(東から) | 上：SK86・87(北東から) |
| 中：SK48(南から) | 中：第4b-3層下面の遺構(北東から) |
| 下：SK41遺物出土状況(南東から) | 下：第4b-3層下面の遺構(東から) |
| 8 東調査区 近世の遺構(二) | 17 西調査区 鎌倉・室町時代の遺構(一) |
| 上：SK35(北から) | 上：第4b-2層下面の遺構(北東から) |
| 中：SK35断面(北から) | 中：第4b-2層下面の遺構(東から) |
| 下：SK28など(南東から) | 下：SK92(東から) |
| 9 東調査区 近世の遺構と細工谷遺跡 | 18 西調査区 鎌倉・室町時代の遺構(二) |
| 上：土取穴など(西から) | 上：第4a-5層下面の遺構(北東から) |
| 中：東調査区と細工谷遺跡(北から) | 中：第4a-5層下面の遺構(東から) |
| | 下：SK97(南から) |

- 19 西調査区 江戸時代の遺構
上：第3層の遺構(北東から)
中：SK119(北から)
下：SD114周辺(西から)
- 20 西調査区 江戸時代以降の遺構(一)
上：調査区全景(北東から)
中：調査区東部(北から)
下：調査区南辺(東から)
- 21 西調査区 江戸時代以降の遺構(二)
上：調査区西部(東から)
中：第2層下面溝群(北東から)
下：第2層上面の池(北から)
- 22 東調査区 古墳時代の遺物(一)
- 23 東調査区 古墳時代の遺物(二)
- 24 東調査区 古墳・飛鳥時代の遺物
- 25 東調査区 飛鳥・奈良時代の遺物
- 26 西調査区 古墳時代の遺物
- 27 西調査区 古墳・飛鳥時代の遺物(一)
- 28 西調査区 古墳・飛鳥時代の遺物(二)
- 29 西調査区 飛鳥・奈良時代の遺物(一)
- 30 西調査区 飛鳥・奈良時代の遺物(二)
- 31 西調査区 飛鳥・奈良時代の遺物(三)
- 32 西調査区 飛鳥・奈良時代の遺物(四)
- 33 西調査区 古代の瓦・各地層出土の遺物
- 34 西調査区 動物骨

挿 図 目 次

図1	細工谷遺跡の位置	1	図28	西調査区SD71・SX72・SD73	
図2	調査地位置図	1		・土器集中部出土土器	33
図3	調査地の地区割	3	図29	西調査区飛鳥時代の遺構平面図	35
図4	上町台地東縁部の地形と遺跡	5	図30	西調査区SD75出土土器	36
図5	細工谷遺跡周辺の主要な調査地	7	図31	西調査区SK78出土土器	37
図6	東調査区東・南壁地層断面図(1)	10	図32	西調査区奈良時代の遺構平面図	38
図7	東調査区東・南壁地層断面図(2)	11	図33	西調査区SD73・75・80および北斜面断面図	39
図8	西調査区五合谷南北地層断面図	13	図34	西調査区SD75・80・83、SK77～79断面図	40
図9	西調査区五合谷東西地層断面図	14	図35	西調査区SD80出土土師器	42
図10	東調査区地山上面検出遺構	16	図36	西調査区SD80出土須恵器	43
図11	東調査区第12層上面出土遺物	16	図37	西調査区SD80出土土師器・須恵器ほか	44
図12	東調査区谷平面図(古墳～飛鳥時代)	17	図38	西調査区SD80出土瓦	45
図13	東調査区SD56遺物出土状態	18	図39	西調査区墨書のある瓦・土器	45
図14	東調査区SD56出土遺物(1)	19	図40	西調査区SD80出土の古墳時代の土器	46
図15	東調査区SD56出土遺物(2)	20	図41	西調査区平安時代の遺構平面図(1)	48
図16	東調査区谷平面図(飛鳥時代)	21	図42	西調査区平安時代の遺構平面図(2)	49
図17	東調査区SA54平面・断面図	21	図43	西調査区鎌倉・室町時代の遺構平面図(1)	49
図18	東調査区飛鳥時代の遺構出土遺物	22	図44	西調査区鎌倉・室町時代の遺構平面図(2)	50
図19	東調査区江戸時代以降の遺構平面図	23	図45	西調査区鎌倉・室町時代の遺構平面図(3)	50
図20	東調査区近世の遺構断面図(1)	25	図46	西調査区平安～江戸時代の遺構断面図	51
図21	東調査区近世の遺構断面図(2)	26	図47	西調査区古代～近世の遺構出土遺物	52
図22	東調査区近世の遺構出土遺物実測図	26	図48	西調査区江戸時代の遺構平面図(1)	53
図23	東調査区各地層出土の遺物実測図	27	図49	西調査区江戸時代の遺構断面図	54
図24	東調査区近世遺構出土の 古代以前の遺物実測図	29	図50	西調査区江戸時代の遺構平面図(2)	55
図25	西調査区古墳～飛鳥時代の遺構平面図	30	図51	西調査区各地層出土の遺物	56
図26	西調査区SD71・73遺物出土状態平面図	31	図52	西調査区江戸時代以降の遺構平面図	57
図27	西調査区古墳～平安時代の遺構	32	図53	五合谷復原図	60
			図54	上町台地東縁の谷	61
			図55	細工谷遺跡付近の埋没谷	63

表 目 次

表 1	各調査の概要	3	表 3	東・西調査区層序対比表	9
表 2	細工谷遺跡周辺の主要な調査	6	表 4	東調査区近世の遺構一覧	24

写 真 目 次

写真 1	東調査区SE10の遺物出土状態	20	写真 3	段裾に掘られた水溜	52
写真 2	西調査区SD80出土の和同開珎	47			

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

細工谷遺跡は大阪市天王寺区のはば中央に位置し、周辺は多くの学校や病院が点在する市街地で、近畿日本鉄道上本町駅の南東に当る(図1・2)。遺跡の発見は1996年にさかのぼり、聖バルナバ病院南側の周知の遺跡である難波京朱雀大路跡の東に接する地域で、計画道路難波片江線の整備工事に伴って行われた試掘調査でその存在が知られた。試掘調査では、現地表下0.9mで奈良～平安時代の遺物包含層が発見された。大阪市教育委員会文化財保護課は難波京朱雀大路跡とは別の遺跡と判断し、文化庁に遺跡発見の通知を行った。遺跡名は地名をとって細工谷遺跡とされた。

この試掘調査を受けた発掘調査は1996年10月から2年度にわたって実施された(SD96-1・97-1次調査地)。この調査では、全国で初めて和同開珎の枝銭が出土し、ほかにも富本銭や「百済尼寺」の存在を示す墨書土器・木簡などが出土し、細工谷遺跡の名が広く知られるようになった。

今回の調査地は聖バルナバ病院の北側に当り、旧大阪府営筆ヶ崎住宅の敷地に相当する。住宅が老朽化したため、これを解体し、集合住宅が建設されることとなった。これら集合住宅の計画立案に先立ち、大阪府は用地内における遺跡の遺存状況を確認するため、財団法人大

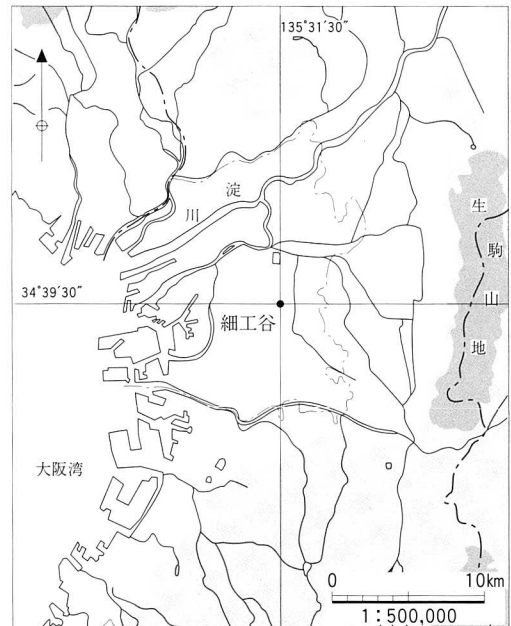


図1 細工谷遺跡の位置



図2 調査地位置図

阪市文化財協会に試掘調査を委託し、2004年8月に試掘調査(SD04－2次)が行われた[大阪市文化財協会2005c]。その結果、敷地南半部では現地表下1 m強で、上面を削平されてはいるものの地山層が遺存し、北半部では古代以前と想定される谷が埋没していることが判明した。

2006年は確定した建設計画に基づき、敷地東半部は近鉄不動産株式会社と、西半部は建設共同企業体を代表して株式会社竹中工務店大阪本店と、それぞれについて大阪市文化財協会が委託契約を締結して発掘調査を行うこととなった。

第2節 調査および報告書作成の経過

1)調査の経過

調査の実施に際しては、用地全体に関する仮設工事・機械掘削および残土整理などの付帯工事・現場管理については施主側が行うこととし、人力掘削および記録の作成に関しては大阪市文化財協会で行うこととした。住宅の建設予定地が2箇所であることから、それぞれに対応して東区(SD06-2次調査地)、西区(SD06-3次調査地)を設定した(図3)。各々の調査期間・調査面積などについては表1に示した。また、両調査区に共通して、世界測地系の正方位にのった地区割を行い、測量・遺物の取上げなどの作業に供した。地区名は10m四方の区画の中で、北東の杭の番号をもって代表させた。

i)東調査区

2006年12月4日、竹中工務店と作業進行についての打合せの後に機械掘削を開始した。機械掘削は現代の盛土層までとし、同時に人力による掘削も開始した。機械掘削は同年12月18日に終了し、以後、適宜に写真・図面による記録作成を行いながら調査を進めたが、途中、第8層上部と第11層の一部について、機械掘削を行い、省力化に努めた。また、検出された近世の遺構のうち井戸と推定されたものは深度が深いものが多く、地山が砂を主体とする海成層であることもあって、崩落の危険を回避して底まで完掘しなかったものがある。掘削が終了した2007年3月15日には平面図図化のための空中写真撮影を行った。翌16日に撤収まですべての作業を終了した。

ii)西調査区

2006年12月4日、竹中工務店と作業進行についての打合せを行い、準備工事を開始した。機械掘

表1 各調査の概要

調査区	調査回数	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
東	SD06-2	天王寺区筆ヶ崎町	2006年12月4日～2007年3月16日	1190㎡	趙哲済・高橋工
西	SD06-3	天王寺区筆ヶ崎町	2006年12月4日～2007年4月28日	2670㎡	南秀雄・櫻井久之

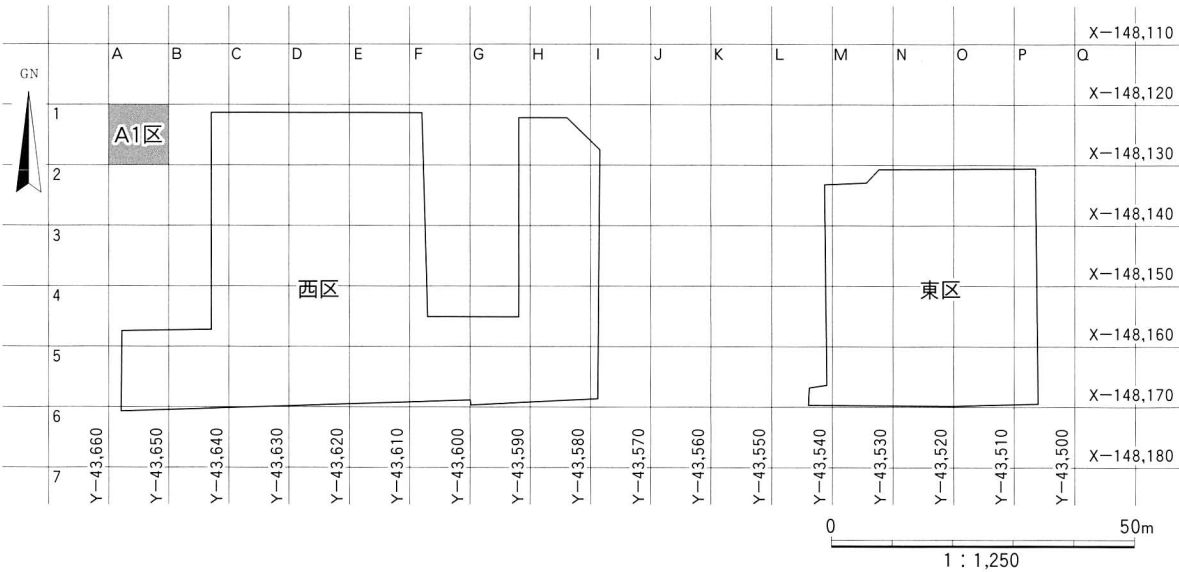


図3 調査地の地区割

削は現代の盛土とみられる層までとし、同時に人力による掘削も開始した。機械掘削は同年12月4日に開始し、2007年1月10日に終了した。人力掘削は、地山が浅い深度で検出された地区(ほぼ3ライン以南)を先行して終了させ、次いで谷部分の掘削を行った。平行して、適宜に写真・図面による記録作成を行った。平面図図化のための空中写真撮影も同様に2回に分け、南側は2月8日に、北側の谷相当部分は4月26日に行った。4月28日には撤収まですべての作業を終了した。

2) 報告書作成の経過

両調査区とも、発掘調査が終了し次第、出土品・記録関係を大阪市文化財協会難波宮調査事務所に持ち帰り整理作業を開始した。出土遺物の洗浄・註記については2007年6月までにおおむね終了し、同作業と一部平行しながら、必要なものについて実測を行った。実測は、両調査区で合計で約300点を図化した。遺物の写真撮影は2007年10月23・24日に行った。また、出土遺物の一部は、成果公開の一環として、2007年11月7日～12月27日の間、大阪歴史博物館特集展示「なにわの考古学2007」で一般市民向けに展示を行った。

報告書刊行のための製図・執筆編集作業は2007年9～11月にかけて行い、同年12月に印刷・製本作業を行った。

第2節 細工谷遺跡と周辺における既往の調査

細工谷遺跡と周辺遺跡の概観およびその歴史的環境については、先行報告書[大阪市文化財協会1999]に詳しいのでそちらに譲り、ここではおもに調査地周辺における既往の調査成果について述べる(表2、図5)。

難波京朱雀大路跡関連調査 調査地の周辺では1985年以来6件の調査が行われている。そのうち、NW85-1・85-37次調査では古代の遺構・遺物が発見されている。NW85-1次調査は、推定朱雀大路跡の東に隣接し、南に下がる落込みと、7世紀後半の柵、9世紀に廃絶した井戸、江戸時代の建物跡などを検出した。落込みは8世紀代に埋められたとされており、今回の調査で五合谷の北肩部であることが確認されている。NW85-37次調査は、朱雀大路跡の西に接し、層厚約50cmの盛土層と、その上下で溝や落込みなどの遺構が検出された。溝には正方位をとるものがあり、盛土層・遺構ともに8世紀(平城宮土器Ⅲ)に属する。また、その下にも層厚100cmを越える遺物包含層が存在したが、これについても盛土層である可能性が高い。このほかのNW85-28・87-28・NS04-1・2次調査については近世以降の土壌や井戸・土取穴が検出されている。また、いずれの調査でも難波京朱

表2 細工谷遺跡周辺の主要な調査

※試掘調査を除く

関連遺跡	調査回数	面積㎡	調査地番	主な遺構	主な遺物	引用文献
難波京朱雀大路跡	NW85-1	280	天王寺区筆ヶ崎	7世紀後半の柵、五合谷の北肩(8世紀に埋立て)、9世紀に廃絶する井戸、江戸時代の建物	5・7～9世紀の土器、重文軒瓦、蓮華文軒瓦	[大市教・大文協1987]
〃	NW85-28	164	天王寺区石ヶ辻6-33-2	近世の土取穴	近世の陶磁器	[大文協1986b]
〃	NW85-37	40	天王寺区北山27-57	北山谷の北肩、8世紀の整地層、8世紀の溝・落込み	5・7・8世紀の土器、フイゴ羽口	[大文協1986a]
〃	NW87-28	28	天王寺区北山1	近世後半の井戸・土取穴	近世の陶器・瓦	[大文協1988b]
〃	NS04-1	375	天王寺区小橋18-20	近世後半～近代の土取穴	古代の須恵器、近世陶磁器	[大市教・大文協2005e]
〃	NS04-2	96	天王寺区小橋16-8	近世の井戸・落込み	古代の土師器・須恵器、近世陶磁器	[大市教・大文協2005f]
細工谷遺跡	SD96-1・SD97-1	2097	天王寺区細工谷1	古墳時代の溝・土壌、飛鳥時代の井戸・溝・柱穴、奈良時代の井戸・溝・柱穴、平安時代の土壌・建物	弥生～平安時代の土器、富本銭・和同開珎の枝銭・「百済尼寺」関連木簡・墨書土器・帯金具・金工工具・板葺屋根材	[大文協1999]
〃	SD97-2	70	天王寺区細工谷1	奈良時代の溝	奈良時代の土器・銅製品・瓦	[大文協1998]
〃	SD01-3・4	170	天王寺区筆ヶ崎	平安時代後期の溝	古代・中世の土器	[大文協2003a]
〃	SD02-1	435	天王寺区細工谷1・堂ヶ芝2	細工谷支谷の肩、古代?の井戸	古代～近世の土器	[大文協2003b]
〃	SD03-1	446	天王寺区堂ヶ芝1・生野区桃谷1	古代～近世の作土層	古代～近世の土器	[大文協2004a]
〃	SD05-1・SD06-1	798	天王寺区堂ヶ芝2	細工谷北斜面、7～8世紀の整地層掘立柱建物群、木樋暗渠	弥生～平安時代の土器、奈良時代の墨書土器	[大文協2007a]
〃	SD06-2・SD06-3	3860	天王寺区筆ヶ崎	本書第三章参照	本書第三章参照	本書
堂ヶ芝廃寺	NW80-21	330	天王寺区堂ヶ芝185	近代の石垣	古代の土器・瓦微量	[大文協1981]
〃	DS87-3	78	天王寺区堂ヶ芝31・41・42	時期不明の溝	白鳳・奈良時代の瓦多量	[大文協1988a]
〃	DS88-1	160	天王寺区堂ヶ芝1-5	江戸時代の遺物包含層のみ	白鳳・奈良時代の瓦多量	[大文協1989]
〃	DS89-1	290	天王寺区堂ヶ芝189	近世の建物・井戸	瓦少量	[大文協1990]
〃	DS01-1	250	天王寺区堂ヶ芝2	真法院谷の東肩、近世の土取穴?	古代・中世の土器・瓦微量	[大市教・大文協2003]
〃	DS04-1	40	天王寺区堂ヶ芝1-42-1	近世の土壌・溝	古代瓦大量	[大市教・大文協2005a]

大市教=大阪市教育委員会
大文協=大阪市文化財協会

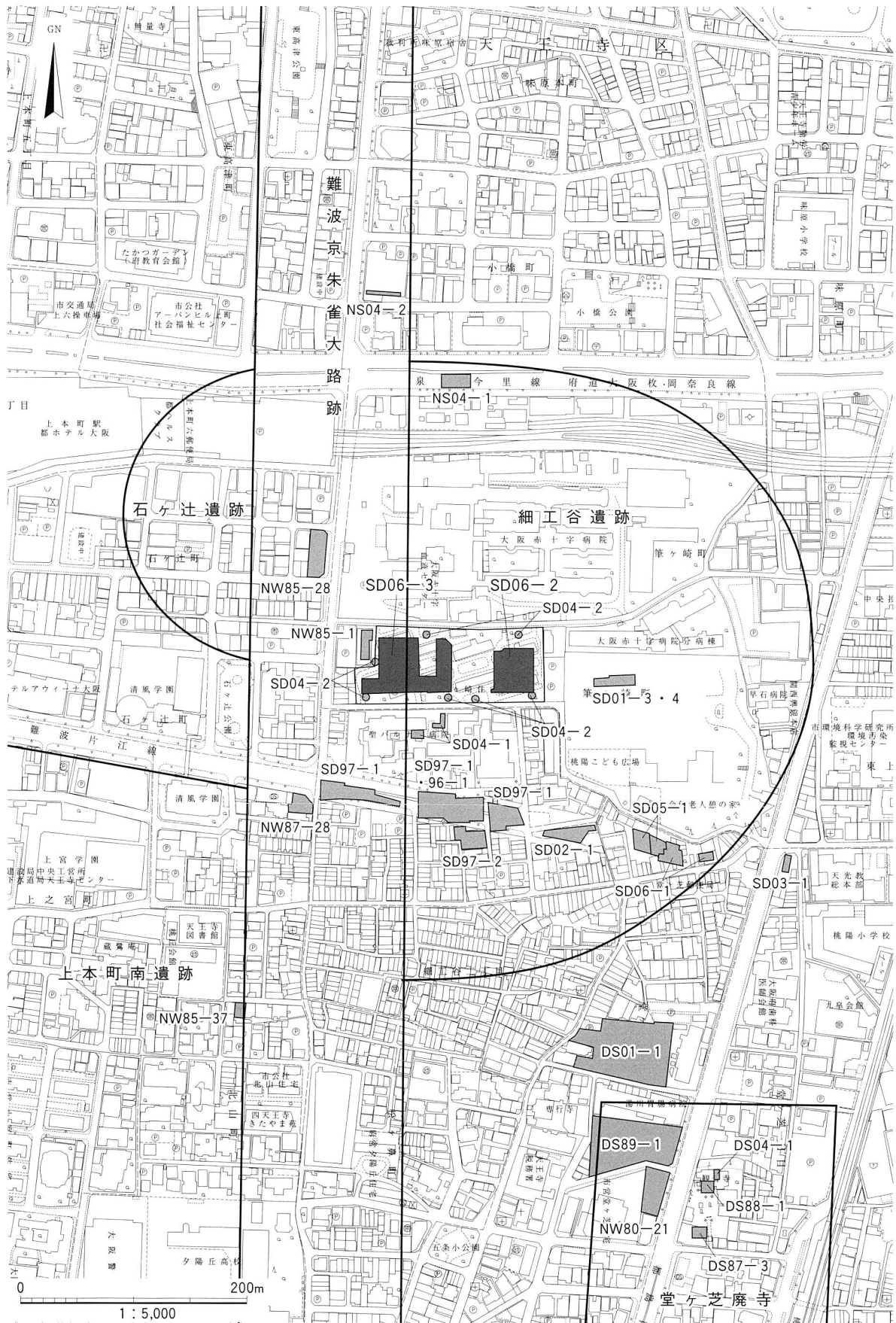


図5 細工谷遺跡周辺の主要な調査地

雀大路に係わる側溝などは発見されていない。

細工谷遺跡関連調査 聖バルナバ病院・旧桃山市民病院の南のSD96-1・97-1・02-1・03-1・05-1・06-1次調査は都市計画道路難波片江線の整備に伴う調査で、ほぼ細工谷の北斜面に当り、SD03-1次調査地より東は沖積地に当る。SD96-1・97-1次調査では、古墳時代の遺物や飛鳥～平安時代の建物・井戸・溝などが検出され、「百済尼寺」の存在を示す木簡や墨書土器、和同開珎の枝銭など鑄造や金工関連の遺物、富本銭などが出土している。先行報告書[大阪市文化財協会1999]では、「百済尼寺」の有力な候補地として本調査地周辺があげられている。SD05-1・06-1次調査では、弥生～古墳時代の遺物が出土したほか、7世紀後半～8世紀にかけて整地を繰返しながら掘立柱建物群が営まれていた状況が明らかになり、8世紀後半、北河内の枚方・交野に拠点を移す前に百済郡を拠点とした百済王氏との関連が指摘されている[松本啓子2006・2007]。筆ヶ崎の尾根上のSD01-3次調査では、古代の遺物は少なからず出土したものの、地山は著しく削平を受けており、平安時代後期の溝を検出したにとどまった。

堂ヶ芝廃寺関連調査 百済王氏の百済寺に比定される遺跡である。古くから白鳳～平安期の瓦が出土し[石田茂作1936・藤澤一夫1941]、かつては方形柱座を彫り込んだ巨大な塔心礎が残っていたと伝えられる。直接に寺院に係わる遺構は発見されていないが、やはり瓦の出土は顕著である。瓦は、DS87-3・88-1・04-1次調査など現豊川閣観音寺の周辺で出土量が多く、玉造筋西側のDS89-1・01-1次などで少ない。このことから、寺院の中心は観音寺の周辺にあったと考えられる。

(高橋)

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 層序

調査地の地形は、近世以降に削平を受けており、基本的に現代の盛土層を除去すると地山(第13層)が検出された。地山は主に礫・砂からなる上町層の一部であり、生痕化石が顕著に見られた。両調査区ともに埋没地形である五合谷とその支谷が検出され、谷内部には近世以下の地層が遺存していた。

表3 東・西調査区層序対比表

東 調 査 区						西 調 査 区		
備 考	遺 物	遺 構	層名	時代	層名	遺 構	遺 物	備 考
			1	近・現代	1			
	関西系陶器	土取穴・井戸など↑	2	江戸	2	↑池、SD121 ↓溝群 ←土取穴		
					3a	↑SK119、SD120		
					3b	↑SE118	肥前磁器・青花	
					3c	↓SD116・117、段差⑤		
			室 町		4a-1	↑SK104・105、SE106・107		
					4a-2			水成層
					4a-3			
					4a-4	↑SK101~103	瓦質土器羽釜・中国製青磁	
					4a-5	↑SK99・100 ↓段差④	東播系播鉢	
					4b-1	↑SK95~98 ↓段差③	瓦質土器鉢	
					4b-2	↑SK93、SD94	瓦器	
					4b-3	↑SK90~92 ↓SD88、SP89、段差②	中国製青磁	
					5a		須恵器鉢	
					5b	↑SK86・87		
					6a	↑SD83・SK84・85		
					6b	↑SK81・落込み82 ←段差①		
盛土層	8世紀		7	奈良	7a-1		和同開珎・重園文軒丸瓦	↑
					7a-2		平城宮Ⅲ	↓
					7a-3		墨書土器	水成層
					7a-4	↑SD80	平城宮Ⅱ	
盛土層	飛鳥Ⅱ		8上	飛 鳥	7b	↑SK77~79	飛鳥Ⅲ	水成層
					8a	↑SD75・76		古土壤
古土壤	飛鳥Ⅱ	SA54・SD61~65→	8下		8b		飛鳥Ⅱ・墨書瓦	水成層
					9a	↑SD73、SK74		古土壤
				古 墳	9b			水成層
	TK208↓		10		10	↑SD71 ←SX72		
盛土層	勾玉・船橋O-Ⅱ	SD56↑	11		11			
水成層			12		12			
地山層			13		13			地山層

(↑：上面遺構、↓：下面遺構、←：層中遺構)

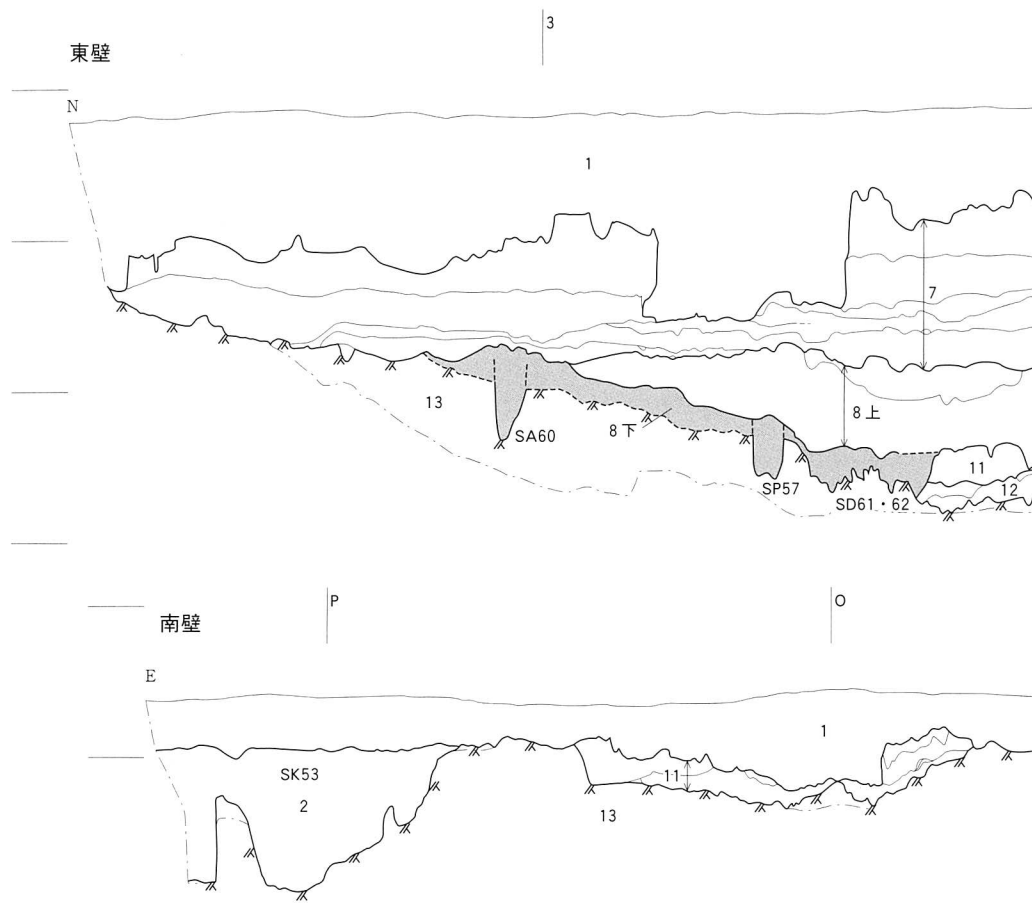


図6 東調査区東・南壁地層断面図(1)

西調査区では江戸時代から古墳時代までの各時代の地層が遺存し、近・現代の地層も含め、第1～第10層に大別できた。一方、東調査区では第2層のほか、第10層以下で2層(第11・12層)が存在した。これらをまとめたのが表3で、これを基準層序として東・西調査区別に記述を行う。

1) 東調査区の層序(図6・7、図版1)

東調査区では地山上面で近世の遺構と五合谷が検出された。また、O3区では現代の盛土(第1層)と地山の間に第2層がごく小範囲ながら面的に遺存していた。その他の地区の近世の遺構の埋土は第2層に相当する。谷内部の堆積層は上から第7層、第8層、第10～12層に区分した。

第1層：現代の盛土である。上面の標高は南西に高く、TP+12.6mに達する。北東部はもっとも低く、同11.8mである。層厚は20～120cmである。

第2層：オリブ灰色中粒砂からなる作土層である。O3区にのみ部分的に遺存し、層厚は8cmであった。ほかに遺構の埋土として遺存していたものは、こげ茶～黄褐色細粒～粗粒砂からなり、地山や起源不明の黒色シルト・灰色シルトなどが偽礫を混っていた。関西系陶器などを含むことから、年代は江戸時代後半である(図23)。

第7層：にぶい黄褐色粗粒砂混りシルト～細粒砂からなり、偽礫を含む盛土である。谷の上半部を

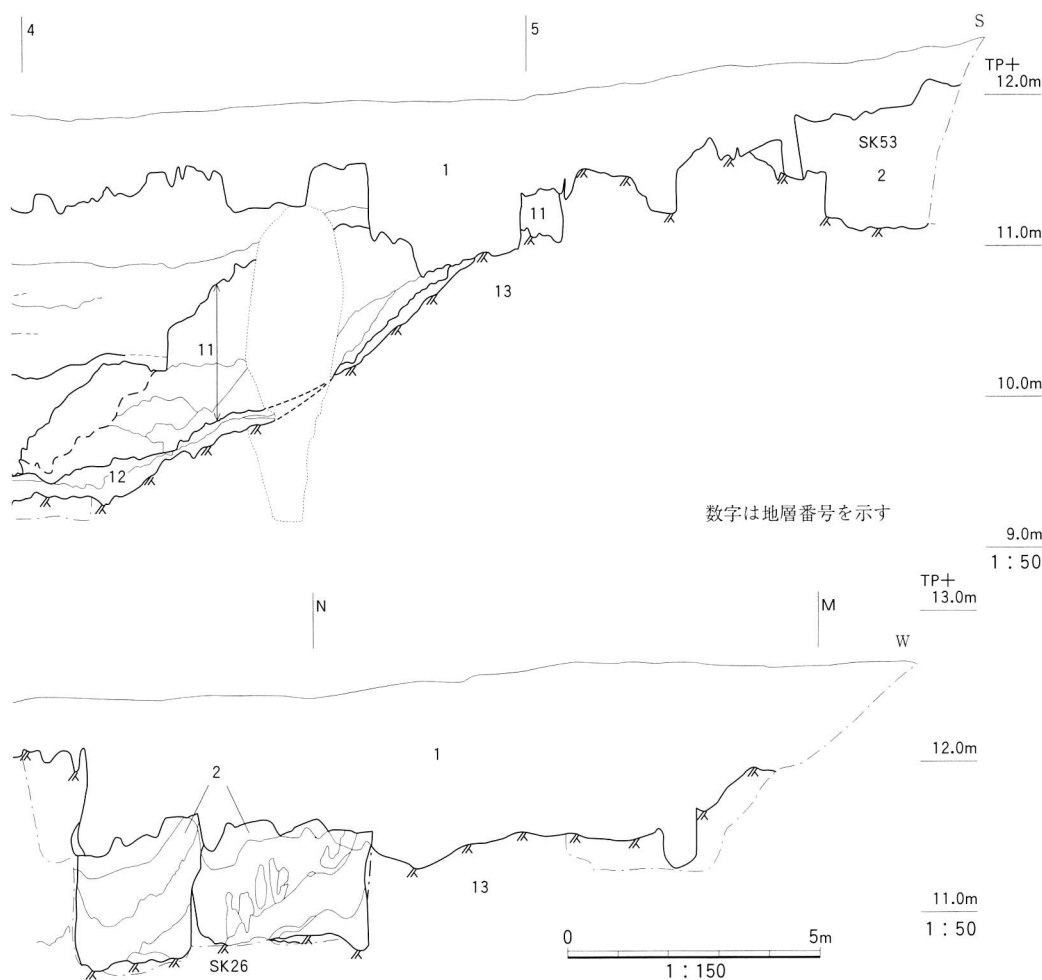


図7 東調査区東・南壁地層断面図(2)

埋めており、層厚は最大で160cmであった。出土遺物(図23)からみて、年代は奈良時代である。

第8層：谷の下半部を埋めており、上部(盛土層)と下部(古土壌)に分層できた。

第8層上部は暗灰黄色粗粒砂混り極細粒～細粒砂からなり、地山・灰色シルトの偽礫が混っていた。層厚は最大で75cmであった。

第8層下部はにぶい黄褐色粗粒砂混りシルト～細粒砂からなり、層厚は最大で35cmであった。下位層(地山)の風化部分との層界が不明瞭であった。本層中で飛鳥時代の掘立柱建物や溝が検出された。第8層の年代は、出土遺物(図23)からみて、上部・下部とも飛鳥時代である。

第10層：にぶい黄褐色細粒～粗粒砂からなる水成層でSD56の埋土として遺存していた。ラミナが観察できた。SD56出土遺物から年代は古墳時代中期である。

第11層：谷頭付近を埋めていた盛土層で、地山・灰色シルト・黒色シルトの偽礫からなっていた。後2者は削平されて遺存しない本来の堆積層に由来するものであろう。層厚は最大で120cmであった。出土遺物(図23)から、年代は古墳時代中期である。本層の上面でSD56が検出された。

第12層：谷内で、第10層の下位に遺存した自然堆積層である。暗灰黄～黄灰色極細粒～中粒砂からなり、ラミナが観察できた。層厚は最大で30cmであった。雨水などによって、周囲の地山などが侵食されて谷内部に堆積したものとみられる。本層上面に古墳時代中期の土師器(図11、図版2)が

置かれており、本層の年代は古墳時代中期以前である。

第13層：黄橙～黄灰色シルト～中粒砂からなる地山層である。垂直方向に延びて下方で短くL字形に屈曲する、海棲小動物の巣穴化石が多く観察された。(高橋)

2) 西調査区の層序(図8・9、図版10)

調査地は上町台地の東側斜面に当るため、現在の地表面も西から東に向って緩やかに下がっている。標高は調査区西端でTP+13.3m、東端でTP+12.3mである。1885年の『大阪実測図』や調査区北西で行われたNW85-1次調査から予測されたとおり、調査区の北辺には大規模な埋没谷が存在した。この谷を字名から「五合谷」と呼称している。旧地形はこの五合谷方向にも緩やかに下り、谷の範囲内ではさらに急激に下がっている。今回の調査では、谷の南肩から谷底周辺までを捉え、TP+11.5mにある肩部からTP+7.3mの底まで、深さ4.2mに達する埋没谷内部の地層の状況を観察できた。

第1層：近・現代の盛土および五合谷内に造られた池の埋戻し土である。調査区北西で検出された池は『大阪実測図』にも記録されている。

第2層：主にオリブ褐色砂質シルトからなり、五合谷内ではこの層の下面に畠の畝間とみられる溝群がある。ほかの個所では本層内の遺構として土取穴が広く分布していた。土取穴内の陶磁器から19世紀前半の地層といえる。

第3層：遺構の埋土を除いて、本層以下は五合谷内に存在する。a～cの3層に細分され、いずれも作土層である。

第3a層は灰白色極粗粒砂～細礫混り砂質シルトからなり、層厚は15cmである。上面に大型の水溜SK119や水路SD120が検出された。

第3b層は灰オリブ色粗粒砂混り粘土質シルトからなり、層厚は20cmで、上面にSE118を確認した。本層からは17世紀代の青花小杯(図版33-269)が出土している。

第3c層は灰～黄褐色粗粒砂～細礫混り砂質シルトからなり、主に遺構の埋土として存在する。下面には小溝SD116・117や谷内を雛壇状の造成をした時の段差⑤がある。17～18世紀の地層である。

第4層：8層に細分され、その大半が作土である。造成による段差④が造られた前後でa・bの2群に呼び分け、さらにa群が5層に、b群が3層に分かれる。

第4a-1層は灰黄褐色粗粒砂混り粘土質シルトからなり、層厚は25cmである。本層上面にSK104・105、SE106・107を検出し、五合谷南肩以南の地山層上面でSK108～110・112、SE113、SD114・115を確認した。これらは出土遺物から第3層に関連する江戸時代の遺構である。

第4a-2層は灰黄褐色細粒～粗粒砂からなり、層厚5cmほどの水成層である。

第4a-3層は褐灰色粗粒砂混り粘土質シルト～砂質シルトからなり、層厚は10～15cmである。

第4a-4層は灰黄褐色粗粒砂混りシルトからなり、層厚は0～25cmで、マンガンの沈着が著しい。本層の上面にSK101～103があった。

第4a-5層は灰黄色シルト混り細粒砂からなり、層厚は10～15cmである。下層との境界に地山層起源の黄橙色シルトの偽礫(細～中礫大)が分布する。本層の上面にSK99・100、下面に段差④が造ら

れている。

第4a層内からは瓦質土器羽釜267、東播系須恵器擂鉢270、中国製青・白磁264・265・271・272(図版33)などが出土している。室町時代の地層といえる。

第4b-1層は暗灰黄色粗粒砂混り粘土質シルトからなり、層厚は10~20cmである。下層との境界面に地山層起源の偽礫が拡がる。本層の上面にSK95~98が検出され、下面に段差③が造られている。

第4b-2層はにぶい黄色粗粒砂混りシルトからなり、層厚は10~20cmである。本層上面にはSK93・94が確認された。

第4b-3層は暗灰黄色粗粒砂~中礫混りシルトからなり、層厚は最大30cmである。上面にSK90~92、下面にSD88、SP89に加え段差②を検出した。

第4b層内からは瓦器椀、瓦質土器鉢268、外面に鎬蓮弁の明瞭な中国製青磁碗266(図版33)が出土しており、本層は鎌倉時代頃の地層である。

第5層：以下の2層に分かれる。

第5a層は灰黄褐色粗粒砂~細礫混り粘土質シルトからなり、層厚30cm前後と厚く、下方ほど砂礫が多く混る。

第5b層は灰黄褐色極粗粒砂~細礫混り細粒砂からなり、下層の第6a層上面を覆っていたとみられる水成層を母材とする。層厚は30cm前後である。本層の上面にSK86・87が検出された。これらの遺構や層内から須恵器杯B246・鉢252が出土しており、平安時代の地層である。

第6層：以下の2層に分かれる。

第6a層はにぶい黄色極粗粒砂混り砂質シルトからなり、層厚10~20cmの作土層である。上面でSD83、SK84・85、層内に段差①、下面に小溝群がある。

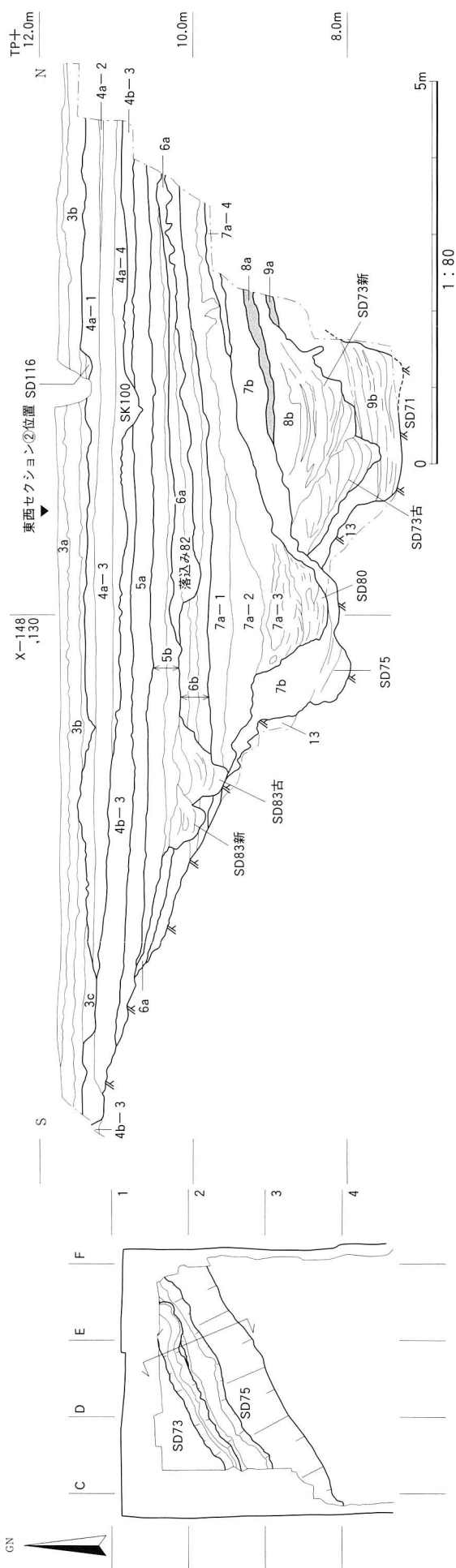
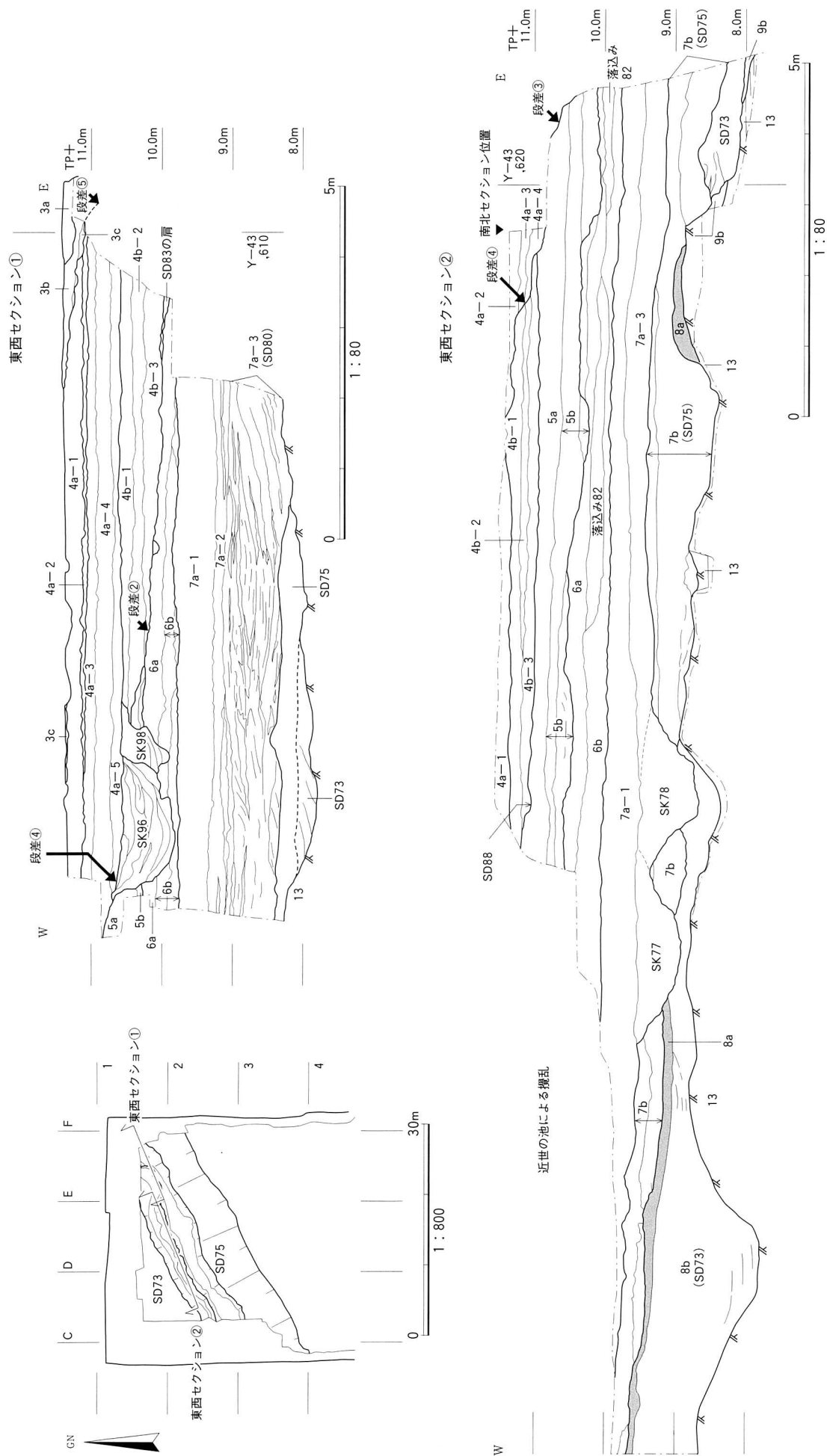


図8 西調査区五合南北地層断面図



第6b層は灰黄褐色極粗粒砂混り粘土質シルトからなり、固く締まっている。層厚は10～20cmである。上面にSK81、落込み82があった。第6層は遺構の遺物などから平安時代前半の地層である。

第7層：五合谷の谷筋にあるSD80・75に関する地層である。第7a-4層がSD80の斜面部分にある古土壌で、第7a-1～7a-3層がこの溝内の埋土である。そして第7b層はSD80の下位にあるSD75の埋土に当る。

第7a-1層は暗灰黄色粗粒砂混りシルトからなり、層厚は20～30cmである。

第7a-2層は主として灰～にぶい黄色粗粒砂混りシルト質粘土からなり、溝の中心付近では細粒～粗粒砂層がラミナをなしている。

第7a-3層は、溝中心付近で黄灰色極細粒砂または浅黄色細粒～極粗粒砂、周辺では灰黄褐色粗粒砂混り粘土質シルトからなる。これらの地層には須恵器・土師器・瓦が多数含まれ、その遺物量の多さは第6層以上とは格段の差があった。和同開珎239や重圀文軒丸瓦231が見られ、地層の形成時期は奈良時代に当る。

第7a-4層は灰黄褐色粗粒砂混りシルトからなり、層厚は10～15cmである。

第7b層はSD75の中心付近で灰色極細粒砂または灰オリーブ色細粒砂～中礫、その周辺では黄褐色極細粒～細粒砂からなる。この地層の上面でSK77～79が見つかった。

第8層：SD75・73に係わる地層で、SD75の斜面部分にある古土壌の第8a層、SD73の埋土を中心とする第8b層に分かれる。

第8a層は黄灰～灰黄褐色粗粒砂混り砂質シルトからなり、層厚は10cm程度である。

第8b層は黄灰色極細粒砂または暗黄灰色細粒砂～中礫からなり、明瞭なトラフ型のラミナを見せる。SD73は切合い関係から新・古2時期に分かれ、その古い溝の底から土師器大鍋115や須恵器平瓶116～119などがまとまって出土し、新しい方の埋土上方から丸瓦263が見つかった。これらから飛鳥時代の地層であることがわかる。

第9層：SD73・71に関係する地層で、SD73の斜面部の古土壌が第9a層、SD71の埋土となっているのが第9b層である。

第9a層はにぶい黄褐色粘土質シルトからなり、層厚は10～15cmである。

第9b層は灰～にぶい黄色極細粒砂または灰色細粒～極粗粒砂からなり、ラミナをなす。溝底より古墳時代後期の土師器壺108が完形で出土しており、この地層の時期を知る手掛かりとなる。

第10層：SD71が掘削された時の古土壌に当る。調査区内に設けた各セクションでは明確に捉えられていない。古墳時代後期の須恵器甕120を埋納したSX72が谷の北斜面部に見つかり、この遺構の検出面から地山層までを第10層とする。岩相は暗灰黄色粗粒砂混りシルトである。

第13層：地山層である。TP+12.0～11.2mは灰黄色粗粒～極粗粒砂混り細粒砂からなり、巢穴の化石が多数存在する。それ以下、TP+8.5mまでは黄褐色細粒～極粗粒砂で、部分的にシルト～シルト質粘土のラミナが見られる。さらにTP+7.3mまでは明オリーブ色極細粒砂となる。

(櫻井)

第2節 東調査区の遺構と遺物

1) 古墳時代以前の遺構と遺物

i) 五合谷支谷(図10、図版2)

調査区の東部、ほぼOライン以東で谷を検出した。自然地形ではあるがここで遺構として報告する。谷の主軸は座標北より約30°東に振っている。谷底は北に向かって深くなり、もっとも深い東壁4ライン付近で、検出面から約2.2mの深さである。一方、南壁Oライン付近では約0.5mともっとも浅くなり、この地点が谷頭にほど近いことがわかる。谷の幅は両肩が検出されたもっとも広い部分で約10.5mで、北に向かって幅を増している。谷の最下部には、約20cmの厚さで第12層が堆積していた。調査区内が谷頭に近いことから、古い時代の地層が流出した結果であろう。この谷は、西区で検出され、現地地形や地図などからも復元される五合谷の支谷で、北側の調査区外で同谷と合流するものとみられる。

O5区で、第12層堆積後の同層上面には土師器1が正置された状態で出土し(図10、図版2)、付近からは勾玉2が出土した。後に述べるように、この谷頭付近は古墳時代中期に盛土して埋められるが、その作業に先立つ祭祀に関わるものとみられる。

土師器壺1は体部外面をタテハケの後に横方向のハケを加え、口縁部外面はヨコナデで調整する(図11、図版24)。体部下半に外面からの刺突による穿孔がある。須恵器出現期の船橋O-Ⅱ期[原口正



図10 東調査区地山上面検出遺構

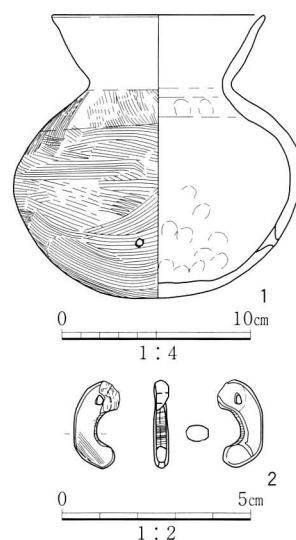


図11 東調査区
第12層上面出土遺物

三ほか1962]に属する。勾玉2は滑石製で、断面形は楕円形であるが成形時の擦痕を残し、粗製である。穿孔は両面から行っている。

ii) 盛土(図12、図版3)

4・5ラインの中間より南の谷頭に近い部分には、第11層による盛土が見られた。もっとも厚い部分では約1.1mが遺存しており、北端部は約15°の傾斜をもつ斜面をなしていた。北端部は谷の主軸方向に対して直角ではなく、斜め方向に終わっており、東側に多く盛土が行われている。この結果、O4区の西に扁って盛土を行った後の新たな谷頭が形成されている。盛土は谷頭部を平地に造成することを目的になされたと考えられるが、谷の上面は後世に削平されているので谷のどこまでが埋められていたのかは厳密には判断できない。盛土は第12層上面に置かれた土師器1を埋めており、土師器1の時期をもって盛土を行った時期としてよい。

iii) 溝(図12・13、図版3～5)

谷頭に盛土が行われた後の段階で、谷底に溝群が発見された。そのうち出土遺物と埋積状況から古墳時代の遺構と判断されるものについて本項で報告し、飛鳥時代の溝については次項で報告する。

SD56 O4区で検出した溝で、幅0.75～1.50mで、深さ0.03～0.48mである。底が深く落ち込む個所が所々あった。西南部の攪乱の中で検出さ

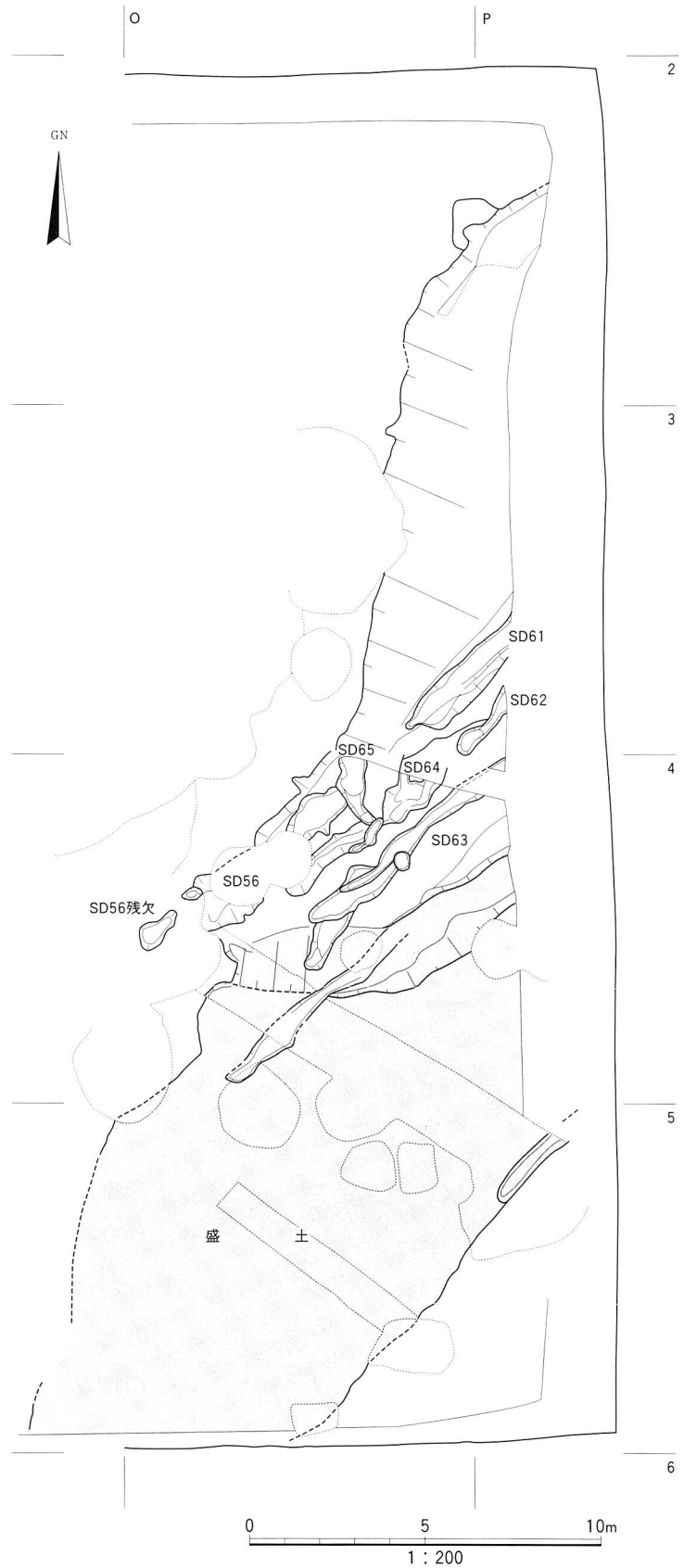


図12 東調査区谷平面図(古墳～飛鳥時代)

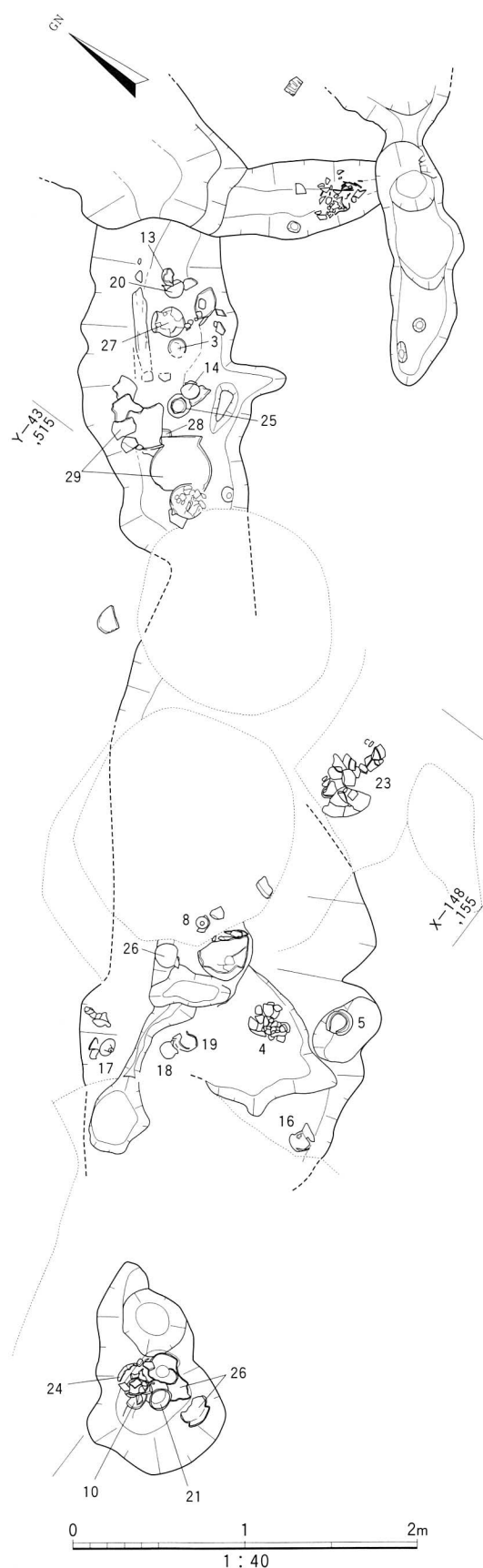


図13 東調査区SD56遺物出土状態

れた竪穴状に落ち込む部分も、本遺構の上部が削平されて底の深い部分のみが残ったものである。埋土は2層に大別でき、下部はにぶい黄褐色細粒～粗粒砂からなる第10層で、ラミナが観察できたことから流水によって堆積したものである。上部は地山偽礫を含む灰色中粒砂で人為的に埋められていた。埋土からは土師器・須恵器が出土したが、主に遺物が含まれていたのは上層である。平面形態の幅や深さが一様でないことや、埋土の状況から考えて、盛土によってできた谷頭から流れ込んだ流水が谷底を下刻して形成されたものとみられた。出土土器は完形のものを多く含み、祭祀が行われたものと考えられる。

出土した遺物(図14・15、図版22・23)は、3～14が須恵器、15～29が土師器である。なお、7・9・11は近世のSE10から出土したが(写真1)、SE10がSD56を切っており、古墳時代の完形の土器を含むことから、本来SD56に帰属したものと考え、同遺構出土遺物として報告する。杯蓋3・杯身4～7は口縁端部が水平に近い平坦面をなしている。高杯8～10は8・9が小型で、10は大型で把手が付く。8は脚部にスカシ孔がなく、9は外面にカキメを加えた後、3方向に円形のスカシ孔を穿つ。10は台形の大きなスカシ孔を3方向に開けている。12～14は甕で、12は口縁部、13・14は体部である。15は小型の椀で、口縁端部をやや外方に折り曲げる。16・17は高杯で、16は内側からの打撃による穿孔が見られる。18～22・24～27は甕で、22・24は口縁端部内面をわずかに肥厚させ、22は体部内面にケズリを加える。壺23は二重口縁をもち、体部内面に横方向のケズリを施す。大型の甕28・29は長胴傾向が見られ、29は体部内面下方にケズリ調整を加えている。遺構の時期は、須恵器杯3～7がその形態からみてTK208型式であり、その他の遺物も同時期とみてよく、古墳時代中期中頃である。

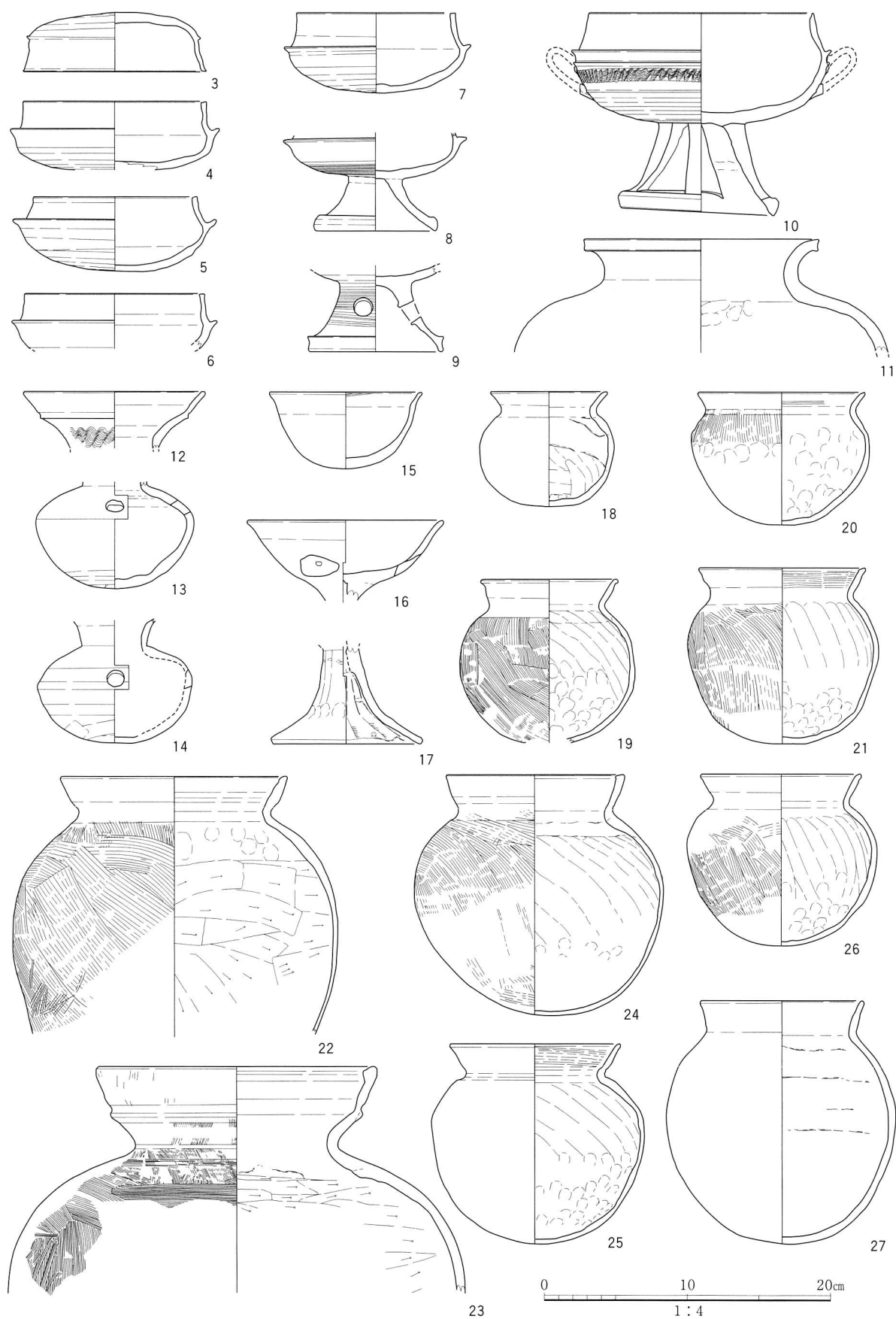


図14 東調査区SD56出土遺物(1)
(7・9・11はSE10出土)

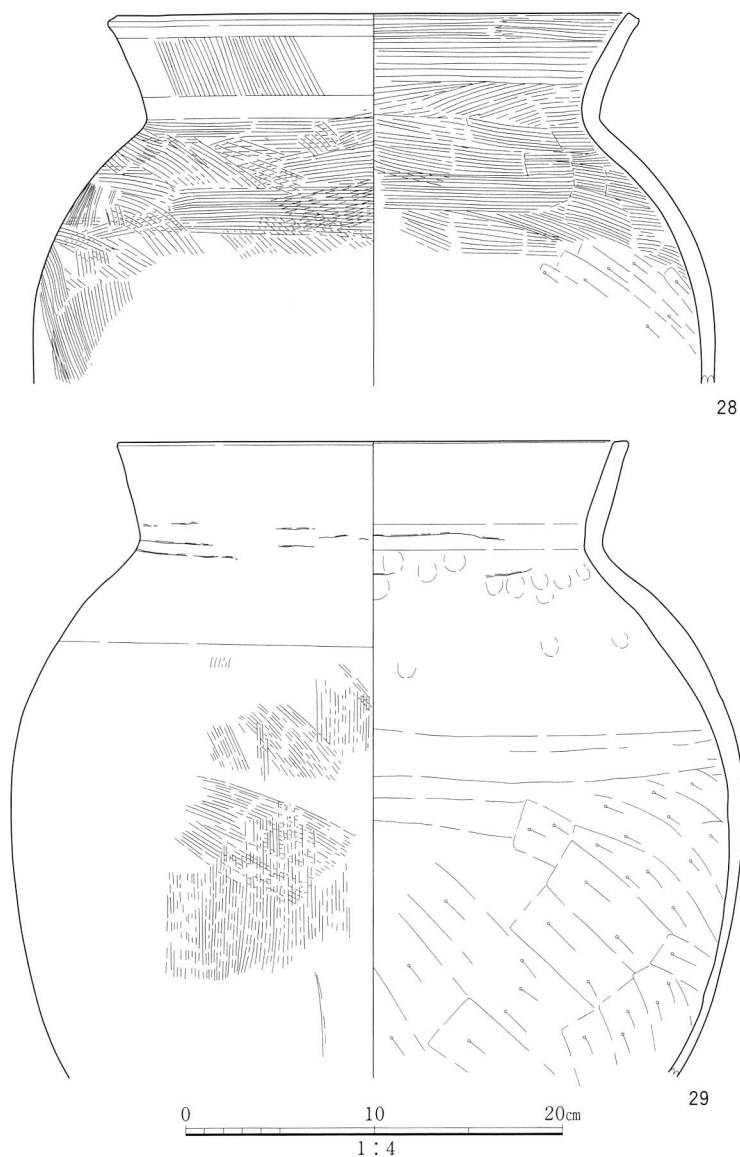


図15 東調査区SD56出土遺物(2)



写真1 東調査区SE10の遺物出土状態

SD65 幅0.85m、深さ0.24mで、SD56を切る。埋土は灰色粗粒砂混り粘土質シルトであった。土師器甕が出土した。

2) 飛鳥時代の遺構と遺物

i) 溝(図12、図版3)

古墳時代のSD56と同様に検出された溝群であるが、飛鳥時代のものである。SD56は埋土に流水による堆積構造が見られたが、飛鳥時代のものは第8層下部の水漬き暗褐色粘土質シルトを主体とする堆積層であった。

SD61 幅1.15m、深さ0.25m、埋土は暗褐色粗粒砂混り粘土質シルト～細粒砂であった。土師器・須恵器が出土し、須恵器には図化できない細片であったが、TK209型式の杯身があり、遺構の年代は7世紀前葉である。

SD62 幅0.48m、深さ0.08m、埋土は灰色中粒砂混り粘土質シルトであった。須恵器・土師器が出土した。

SD63 幅0.78m、深さ0.19m、埋土は暗灰色粗粒砂混り粘土質シルトであった。土師器・須恵器が

出土した。須恵器杯H蓋35(図18、図版24)は口径12.8cmである。TK209型式に属するので、遺構の年代は7世紀前葉である。

SD64 幅1.05m、深さ0.25m、二股に分岐し、北側では輪郭が不明瞭となる。埋土は灰色粗粒砂混り粘土質シルトであった。土師器・須恵器が出土した。土師器杯C31は口径12.2cmを測り、風化のため調整の詳細は不明であるが、口縁端部内面に強いナデを加えている。飛鳥IないしIIに属し、遺構の年代は飛鳥時代である。

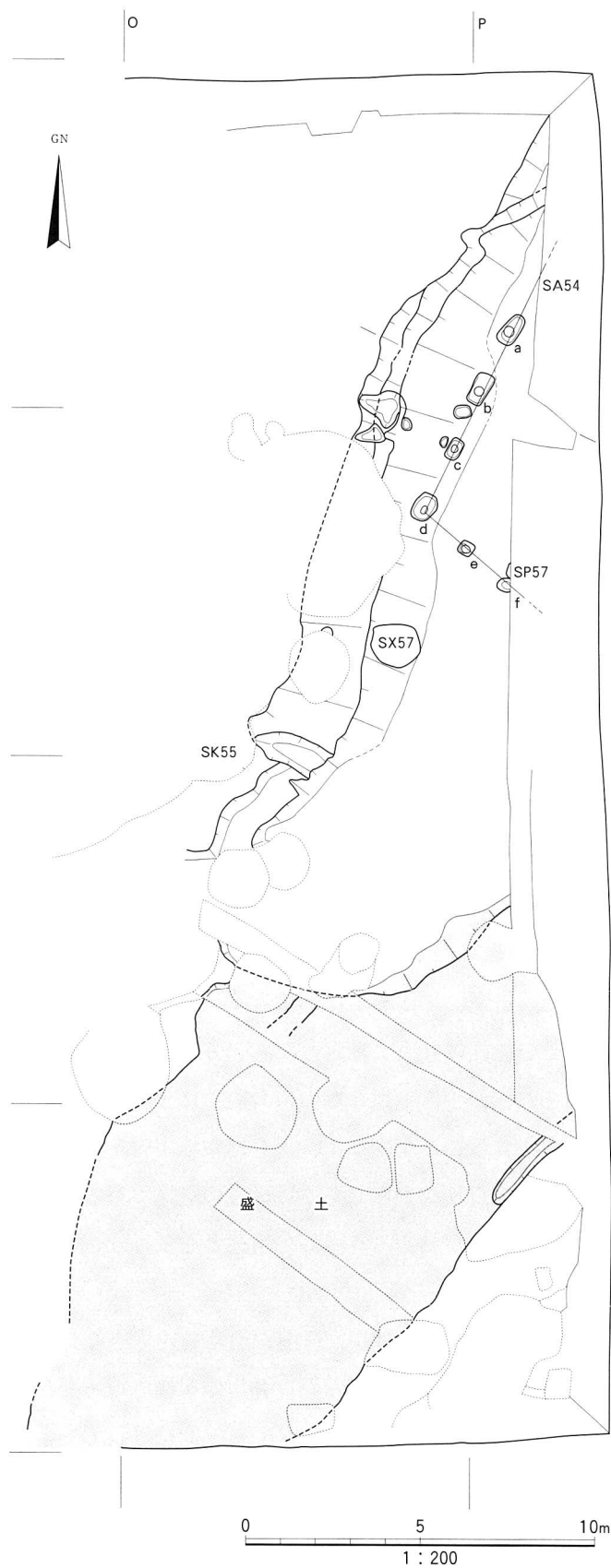


図16 東調査区谷平面図(飛鳥時代)

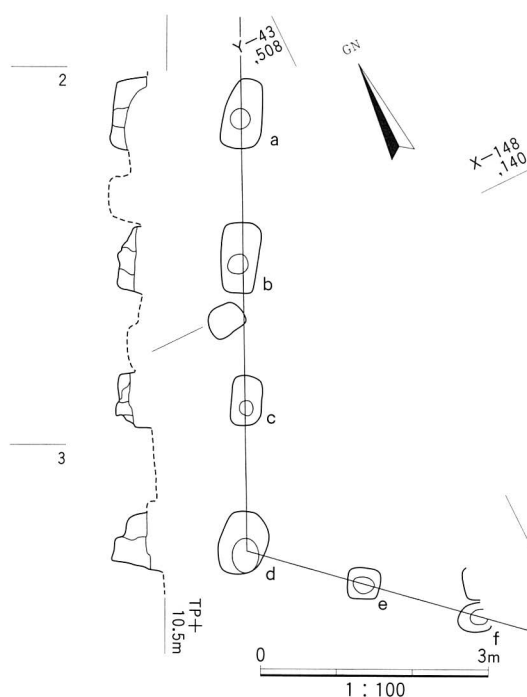


図17 東調査区SA54平面・断面図

ii) 掘立柱建物(図16・17、図版6)

SA54 谷内の北部で検出した掘立柱建物で、柱穴6基を検出した。第8層下部の層中から掘込まれており、前述の飛鳥時代溝群と層位的に同じである。方位は柱穴a～dで座標北より25°東に振っており、谷の主軸方位にほぼ等しい。柱穴d～fの方向は同a～dに対して106°と鈍角を示すことから柵に復元した。柱穴の平面形は隅丸長方形で、長辺は0.4～0.9mである。柱痕跡の直径は0.2～0.3m、柱間の間隔は、柱穴a～d間で平均1.94m、柱穴d～f間で1.60mである。柱穴bの掘形部分から須恵器杯H32が出土した(図18)。32は口径11.7cmで、TK209型式である。溝群出土のものと型式差はなく、下層遺物の混入の可能性もあるが、建物の上限年代を示すものとして揭示した。

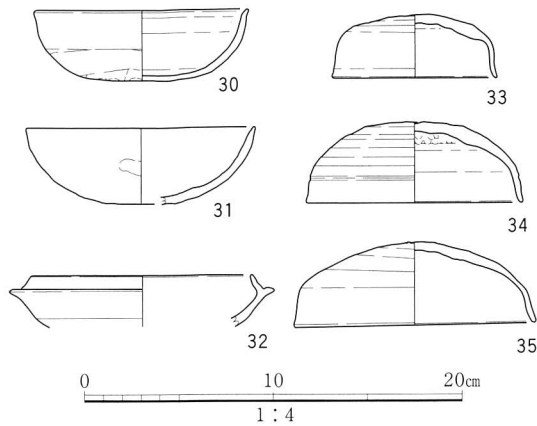


図18 東調査区飛鳥時代の遺構出土遺物
SD63(35)、SD64(31)、SA54(32)、SX57(30・33・34)

IIに属する。33は口径8.7cm、34は口径11.5cmである。これらの土器の年代観より、本遺構は飛鳥時代である(図18、図版24)。

iii) その他の遺構(図16)

SX57 O3区で、**SA54**の南側、谷肩斜面で検出した浅い落込みである。平面形は、南北1.20m、東西1.53mのほぼ円形で、深さは0.05mである。埋土は黄褐色細粒砂で若干の炭が混っていた。底には、口縁を下にして伏せた状態で須恵器短頸壺蓋33・杯H蓋34が置かれていた。ほかに土師器も出土している。土師器杯C30は口径11.3cmで、底部外面をケズリで、口縁部外面をナデで調整している。内面の調整は風化のため不明である。飛鳥

3) 江戸時代以降の遺構と遺物(図19～22、表4、図版7～9)

調査区の全域で各種の遺構を検出した。各遺構の概要は表4にまとめた。これらの遺構に共通することは、粗粒砂や小礫など、古代の遺構に比べて粗粒な堆積物を含むことである。切合いからこちらの一群が新しいことは明らかで、出土遺物からみても関西系陶器や瀬戸美濃焼、五弁花を描く肥前系磁器など、18世紀後半をさかのぼらない(図22)。また、こうした遺構は、出土する遺物が古代以前のものばかりで、江戸時代の前半や豊臣期、中世の遺物はほとんど出土しなかった。古代以前の遺物は混入品とみられ、これら一群の遺構を江戸時代後半以降のものとして一括して報告する。

遺構は平面形や底の状況から大きく2大別された。まず、平面形が円形に近く、埋土を約1m以上掘削しても遺構底が検出されないものについてはその機能は井戸と推定した。一方、平面形は溝状・楕円形・不整形などで、遺構底が比較的浅く検出され、かつ、平坦なものについては土取穴と推定した。後者の埋土には、前者と比べて地山の偽礫が含まれることが少なく、調査地の地山層を構成する海成の砂を採掘し、地山以外の土で埋戻したものと考えられたからである。後者の遺構で谷の埋土の上から掘込んでいるものがほとんどないのはそのことの証左であろう。砂の用途としては建造物の壁土などが考えられる。以下、主要な遺構のみを報告する。

SE01 井戸と推定した。北側の遺構壁はオーバーハングしており、地山が崩落した大きな偽礫が見られた。遺構断面の南側では埋土の分層線が垂直に見える部分があった。井戸側を抜き取った痕跡かもしれない。17世紀代の焼塩壺36のほかに瀬戸美濃焼磁器が出土しており、19世紀以降である。

SK18～20 土取穴と推定した。3基ともほぼ深さが同じで、遺構底は平坦である。遺構の境目を壁状に掘残しているが、同時に埋戻したとみられた。

SK26 土取穴と推定した。平面形は不整形で、遺構底はほぼ平らに検出された。遺構底近くまで掘削すると地山が壁状に掘残された部分があった。

SK28 土取穴と推定した。平面形は不整形な溝状である。肥前系磁器青磁染付蓋39や筒形碗44な

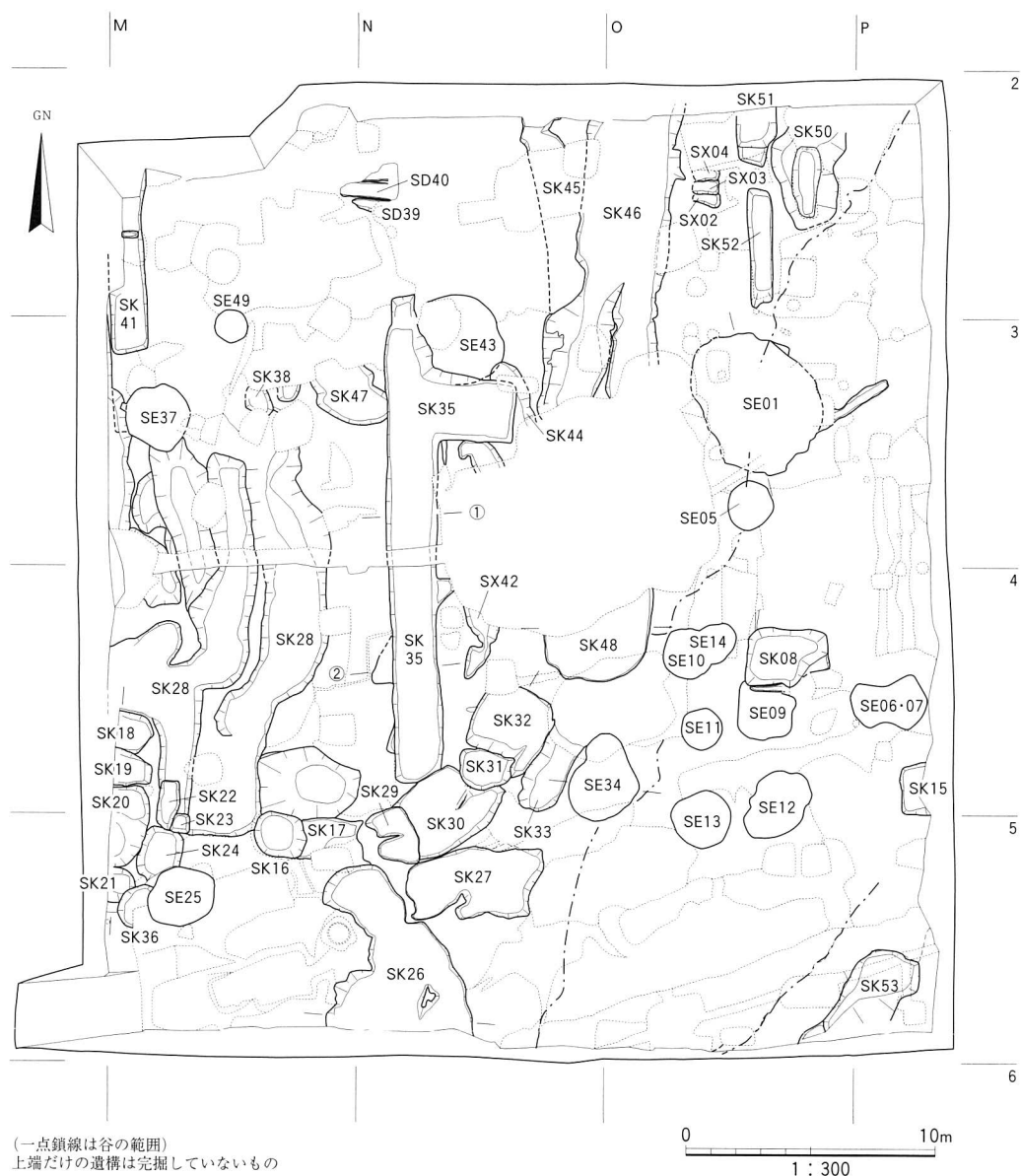


図19 東調査区江戸時代以降の遺構平面図

どが出土した。18世紀後半以降の遺構である。

SK31・32 土取穴と推定した。切合い関係があるが、遺構底はほぼ同じ深さで、平坦である。

SE34 井戸と推定した。遺構の断面では地山の大きな偽礫が観察される。関西系陶器が出土しており、18世紀後半以降の遺構である。

SK35 土取穴と推定した。平面形は整った長方形である。埋土は褐色細粒～中粒砂で埋戻しており、地山の偽礫をほとんど含まない。古代以前の遺物が大量に出土したが、軟質施釉陶器小皿46や色絵磁器の天神人形52など江戸時代後半の遺物が少量出土した。

SK41 土取穴と推定した。平面形は整った長方形である。遺構底付近で、萩焼小碗38・肥前系磁器染付筒形碗40・小杯42・京信楽系陶器灯明受皿47・48・土瓶蓋50・堺播鉢51などが一括して投棄された状態で出土した。40などからみて、18世紀後半でも新しい時期の遺構である。

表4 東調査区近世の遺構一覧

遺構番号	地 区	平 面 形	長辺 ・長径	短辺 ・短径	深 さ	主な掘込み層	推定される 機能	主 な 遺 物
SE01	O3	楕円形	5.90	4.62	(1.84)	第3層／地山	井戸	土師器、須恵器、瓦器、白磁、肥前系磁器、瀬戸美濃焼、 関西系陶器、巴文軒丸瓦、平瓦、焼塩壺
SX02	O2	溝状	1.05	0.30	0.14	地山	不明	関西系陶器
SX03	O2	溝状	1.02	0.56	0.10	地山	不明	なし
SX04	O2	溝状	1.08	0.40	0.05	地山	不明	なし
SE05	O3	円形	1.82	1.80	(1.06)	第7層／地山	井戸	土師器、須恵器、焼締陶器
SE06	P4	円形	1.50	1.22	(1.79)	第7層／地山	井戸	土師器、須恵器、肥前系磁器、木製品(数居か?)
SE07	P4	円形	2.00	1.46	(1.59)	第7層／地山	井戸	なし
SK08	O4	長方形	3.28	2.28	0.74	第7層	不明	土師器、須恵器(古墳時代中期)、平瓦
SE09	O4	隅丸方形	(2.42)	2.16	(1.23)	第7層／地山	井戸	土師器(飛鳥・奈良時代)、須恵器(奈良時代)、瀬戸美濃焼
SE10	O4	円形	2.10	2.10	(1.35)	第7層／地山	井戸	土師器(古墳時代中期)、須恵器(古墳時代中期)
SE11	O4	円形	1.62	1.62	(0.95)	第7層／地山	井戸	土師器、須恵器(古墳時代中期)、鉾津
SE12	O4・O5	楕円形	3.20	2.10	(1.47)	第7層／地山	井戸	土師器、須恵器(奈良時代)、肥前系磁器、肥前系陶器、 関西系陶器、平瓦
SE13	O4・O5	円形	2.32	2.28	(1.07)	第7層／地山	井戸	土師器、須恵器、肥前系陶器、焼塩壺、平瓦
SE14	O4	円形	1.46	1.36	(1.24)	第7層／地山	井戸	土師器、須恵器(古墳時代中期)
SK15	P4	方形	2.12	(1.10)	0.41	第7層／地山	土取穴	土師器、須恵器
SK16	M5	楕円形	2.10	2.04	0.37	地山	土取穴	土師器、須恵器
SK17	N5・M5	長方形	2.50	1.70	0.47	地山	土取穴	土師器、須恵器、瓦器、肥前系陶器
SK18	M4	不明	1.52	(1.44)	0.33	地山	土取穴	須恵器、丹波焼
SK19	M4	不明	1.70	1.38	0.34	地山	土取穴	土師器、須恵器
SK20	M4・M5	不明	3.30	(1.50)	0.47	地山	土取穴	土師器、須恵器、関西系陶器
SK21	M5	円形?	1.42	(1.00)	0.28	地山	土取穴	なし
SK22	M4・M5	長方形	1.98	0.86	0.37	地山	土取穴	土師器、須恵器、関西系陶器
SK23	M5	隅丸方形	0.76	0.70	0.26	地山	土取穴	なし
SK24	M5	隅丸方形	2.30	1.64	0.27	地山	土取穴	土師器、須恵器、平瓦
SE25	M5	円形	2.78	2.32	(0.95)	地山	井戸	土師器、須恵器(古墳時代中期)、瓦器、肥前系陶器、 肥前系磁器、軟質施釉陶器、平瓦
SK26	N5・M5	不整形	6.70	5.95	0.92	地山	土取穴	なし
SK27	N5	不整形	5.60	2.78	0.73	地山	土取穴	土師器、須恵器、肥前系磁器、青磁、平瓦、緑泥片岩
SK28	M3～M5	不整形	15.50	1.45	0.56	地山	土取穴	須恵器内面硯(奈良時代)・肥前系磁器
SK29	N4・N5	不整形	2.46	0.66	0.22	地山	土取穴	土師器(奈良時代)、須恵器(古墳時代中期・奈良時代)、瓦器、 肥前系陶器、肥前系磁器、関西系陶器
SK30	N4・N5	楕円形	4.38	3.00	0.38	地山	土取穴	土師器、須恵器(古墳時代中・奈良時代)、青磁、肥前系磁器、 関西系陶器、平瓦、砥石
SK31	N4	楕円形	2.20	1.62	0.24	地山	土取穴	土師器、須恵器(古墳時代中期・奈良時代)、肥前系磁器、 青磁染付、丹波焼
SK32	N4	隅丸方形	3.60	3.40	0.38	地山	土取穴	土師器、須恵器(古墳時代中期・奈良時代)、平瓦
SK33	N4	隅丸方形	3.12	1.38	0.38	地山	土取穴	土師器(古墳時代中期)、須恵器、平瓦
SE34	N4・O4	隅丸方形	3.58	2.34	(1.03)	第7層／地山	井戸	土師器、須恵器杯蓋(奈良時代)、肥前系陶器、肥前系磁器、 関西系陶器、丹波播鉢、軟質施釉陶器、平瓦
SK35	N3・N4	溝状	19.50	2.06	1.70	地山	土取穴	土師器(飛鳥・奈良時代)、須恵器(古墳時代中期～奈良時代)、 瓦器、肥前系磁器、瀬戸焼、軟質施釉陶器、人形(天神)、 蛸壺、平瓦、鉄釘
SK36	M5	円形	1.84	(1.20)	0.28	地山	土取穴	土師器、関西系陶器、軟質施釉陶器、平瓦
SE37	M3	円形	2.60	2.50	(0.97)	地山	井戸	土師器、須恵器、瓦器、関西系陶器、平瓦
SK38	M3	楕円形	1.24	1.00	0.34	地山	不明	なし
SD39	M2・N2	溝状	(1.54)	0.52	0.02	地山	不明	なし
SD40	M2・N2	溝状	(1.92)	0.64	0.09	地山	不明	京信楽系陶器
SK41	M2・M3	長方形	(7.40)	(1.60)	0.35	地山	土取穴	土師器(十能、羽釜、火もらい)、備前(火入)、肥前系磁器、 堺播鉢、萩焼、京信楽系陶器、鉄製品
SX42	N4	不整形	(3.00)	1.20	0.49	地山	不明	須恵器、土師器、関西系陶器
SE43	N2・N3	円形	3.88	(3.16)	(0.86)	地山	井戸	土師器、須恵器、肥前系磁器、関西系陶器、鉄釘
SK44	N3	楕円形?	(2.56)	(0.54)	0.16	地山	土取穴	なし
SK45	N2・N3	溝状	(8.00)	1.50	0.35	地山	土取穴	土師器、須恵器、青磁染付、関西系陶器、ミニチュア土製品
SK46	O2・O3	溝状	(12.10)	3.40	0.30	地山	土取穴	なし
SK47	M3・N3	不整形	(2.70)	2.00	0.18	地山	土取穴	土師器
SK48	N4・O4	楕円形	4.10	(4.00)	1.38	地山	土取穴	土師器、須恵器(古墳時代中期・奈良時代)、肥前系磁器、 関西系陶器、丸瓦
SE49	M2・M3	円形	1.36	1.34	(0.73)	地山	井戸	土師器、須恵器、瓦器、肥前系磁器、瀬戸焼、平瓦
SK50	O2	不整形	(3.90)	2.70	0.20	地山	土取穴	土師器、須恵器、肥前系磁器
SK51	O2	不整形	(2.30)	1.62	0.47	地山	土取穴	土師器、須恵器、平瓦
SK52	O2	長方形	4.52	0.90	0.57	地山	土取穴	土師器、須恵器、瓦器、関西系陶器、平瓦
SK53	O5・P5	楕円形?	(5.56)	2.43	0.76	地山	土取穴	なし

(計測値の単位はm／括弧内の数値は掘削できた最大値)／太字の遺物は実測図を掲載)

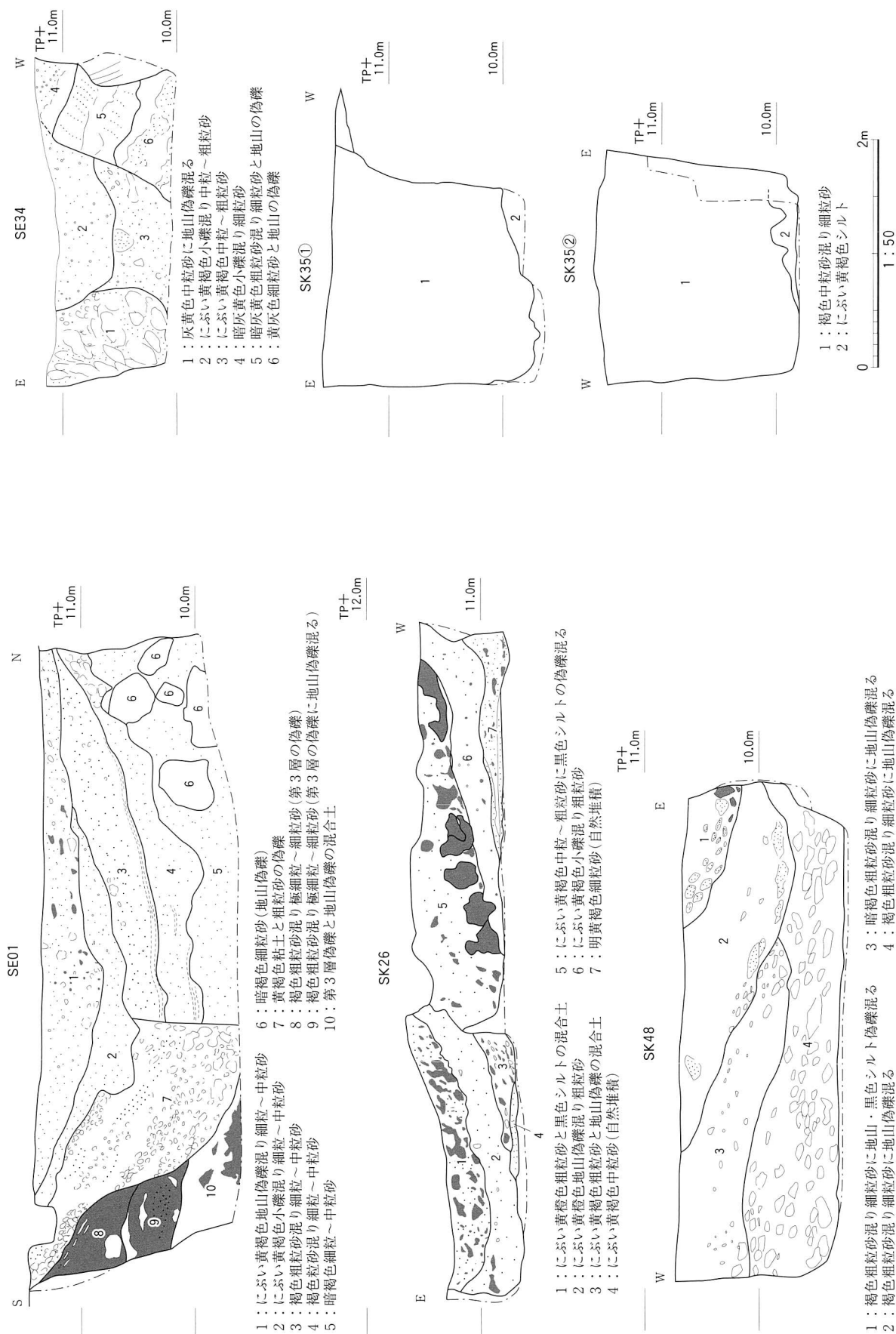


図20 東調査区近世の遺構断面図(1)

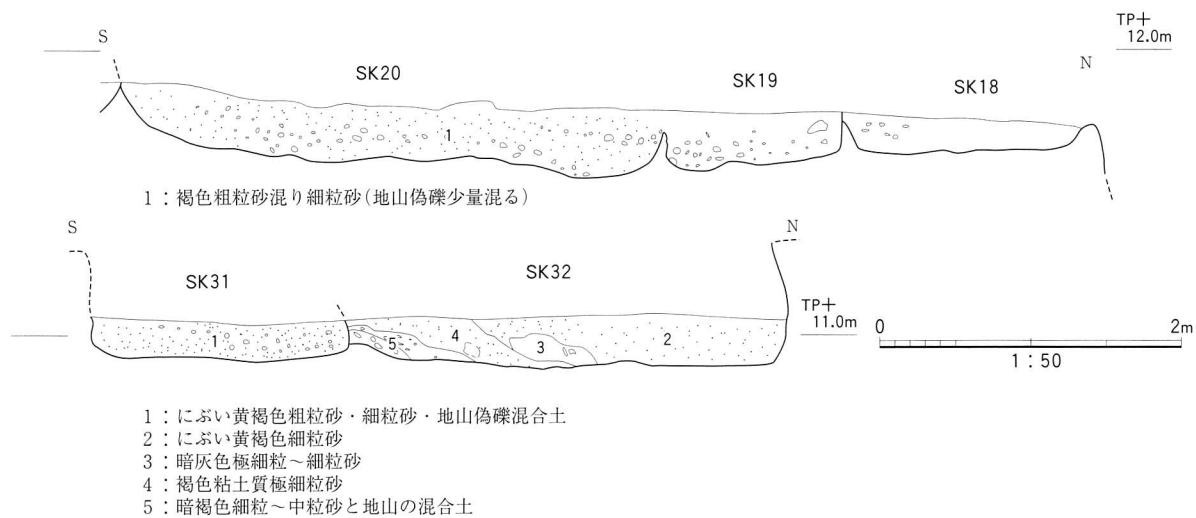


図21 東調査区近世の遺構断面図(2)

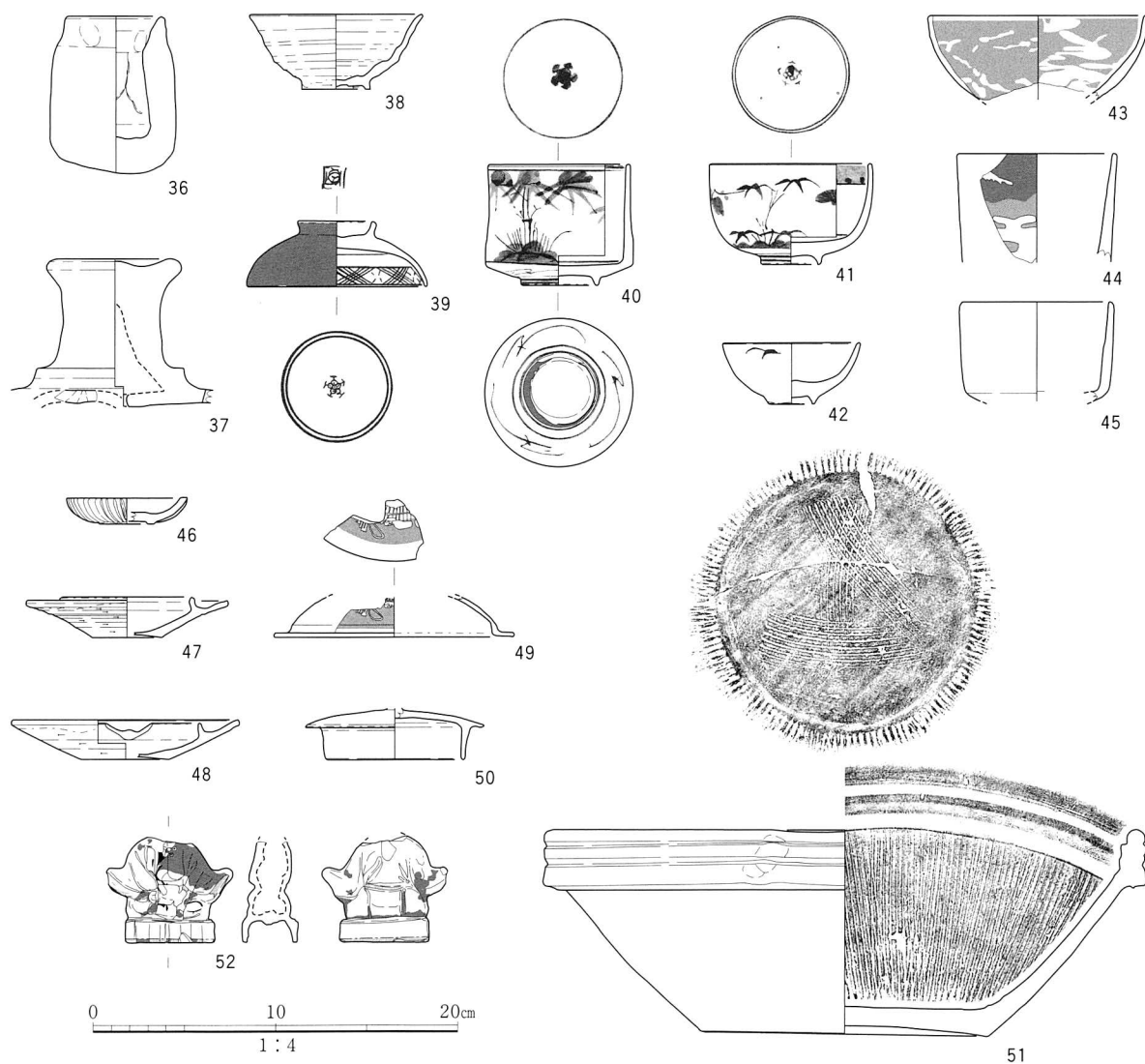


図22 東調査区近世の遺構出土遺物実測図

SE01(36)、SE25(43)、SK28(39・44)、SK30(45)、SK35(46・52)、SD40(49)、SK41(37・38・40・42・47・48・50・51)、SE43(41)

SK48 土取穴と推定した。平面形は楕円形であったが、検出面から1.38mで平坦な遺構底が検出された。関西系陶器が出土しており、18世紀後半以降の遺構である。

4) 各地層出土の遺物(図23、図版24・25)

第2層出土の遺物には京信楽系陶器行平鍋53がある。口径15.0cmで、口縁部を外方に折り返し、上方につまみ上げる。体部外面には線刻による施文があり、鉄釉がかけている。広島藩大坂蔵屋敷

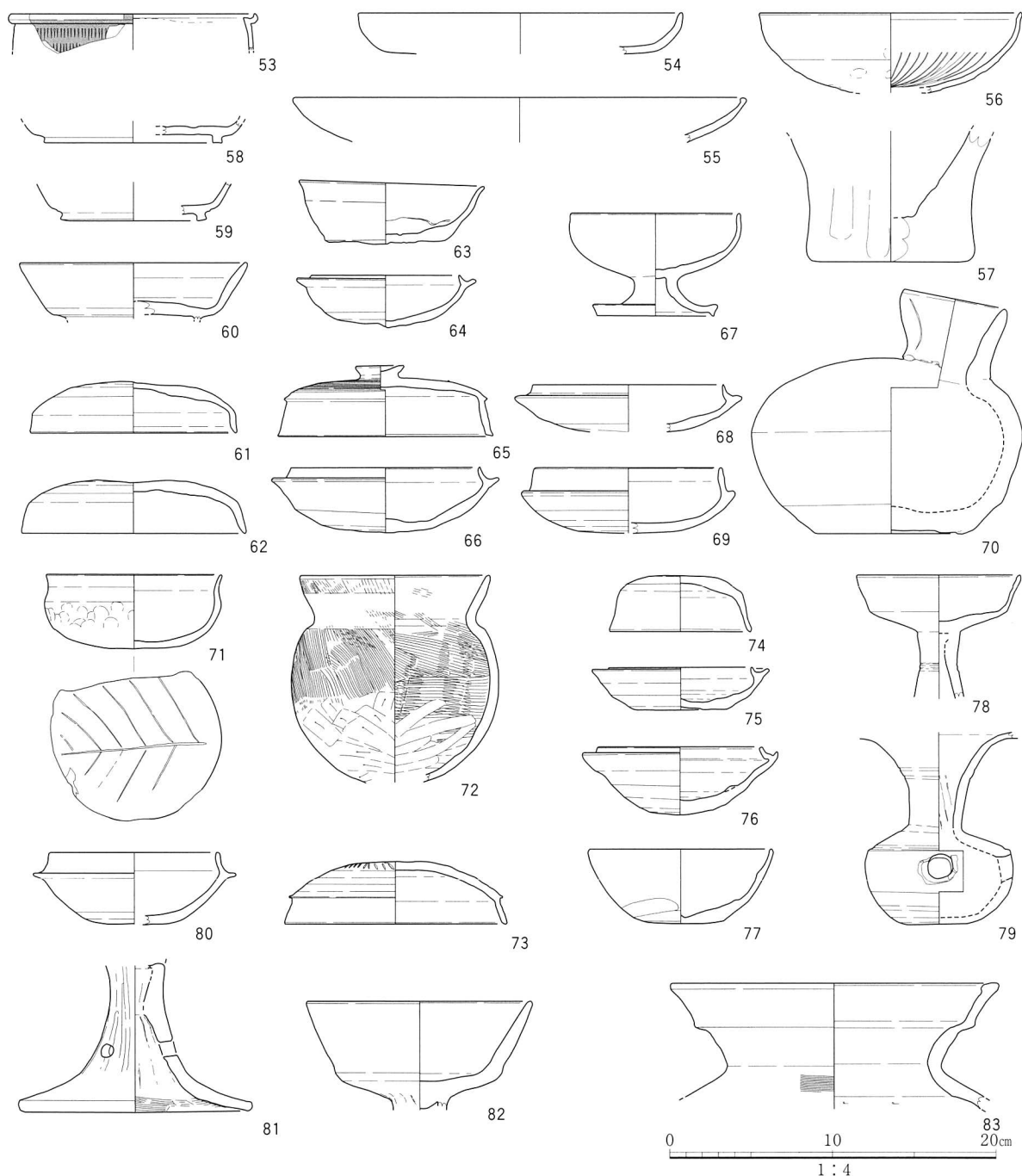


図23 東調査区各地層出土の遺物実測図

第2層(53)、第7層(54~70)、第8層上・下部(71~79)、第11層(80~83)

跡で18世紀後半から19世紀中葉とされる地層からの出土品に類例がある[大阪市文化財協会2004b]。本層の年代は53に代表される。

第7層出土の遺物には土師器54～57、須恵器58～70などがある。54・55は皿Aで、風化のため調整などの詳細は観察できないが、形態からみて奈良時代に属する。56は杯Cで内面に放射状暗文を施し、飛鳥Ⅱに属する。飛鳥時代、7世紀中葉頃のものである。57は鉢底部で、飛鳥時代に属する。58・59・60は杯Bで、奈良時代前半とみられる。63は杯G、64は杯H、67は低脚高杯で、ともにTK217型式、飛鳥Ⅱに属する。飛鳥時代、7世紀中葉頃のものである。61・62は杯H蓋で、口径はそれぞれ12.6cm、13.7cmである。TK209型式、飛鳥Ⅰに属し、7世紀前葉のものである。65は古墳時代中期の有蓋高杯蓋である。TK208型式に属し、5世紀中葉のものである。66・68は杯Hで、TK209型式、飛鳥Ⅰに属し、7世紀前葉のものである。69は古墳時代後期の杯身でTK10型式、6世紀中葉に属する。70は平瓶で飛鳥時代のものである。

これらの遺物からみて、古墳時代や飛鳥時代の遺物を多く含むものの、奈良時代の遺物が存在することから、本層の年代は奈良時代で、8世紀である。

第8層出土の遺物には土師器71・72、須恵器73～79などがある。71は杯で、底部外面に木葉の葉脈の圧痕が残る。長原遺跡12次調査出土品で類例があり[京嶋1993]、古墳時代末～飛鳥時代初頭のものであろうか。72は飛鳥時代の甕で、底部外面にケズリを加える。73は古墳時代中期の杯蓋で、天井部にヘラ状工具でキザミメをつけている。74は短頸壺蓋で、口径8.6cmである。75は杯H身で、口径は8.8cmである。75はTK217型式、飛鳥Ⅱに属し7世紀中葉のものである。76は杯H、77は杯Gである。飛鳥Ⅰ、7世紀前葉のものである。78は無蓋長脚高杯、79は甕である。いずれもTK217型式、飛鳥Ⅱに属し7世紀中葉のものである。

これらの遺物からみて、もっとも新しい遺物は飛鳥Ⅱのもので、本層の年代は飛鳥時代、7世紀中葉である。

第11層出土の遺物には土師器81～83、須恵器80などがある。80は須恵器杯身で、口径10.2cm、口縁端部は丸くおさめる。定型化以前のものである。81は高杯脚部、82は同杯部である。83は二重口縁の頸部をもつ壺で、体部内面にヘラケズリを施している。81～83は船橋O－Ⅱ段階のもので、本層の年代は古墳時代中期、5世紀前葉である。

5) 近世遺構出土の古代以前の遺物(図24、図版25)

近世の遺構からは、古代以前の遺物が出土した。特に、土取穴とみられる遺構からは大量に出土しており、穴を埋戻すために採掘目的の地山以外の地層を周辺から削りとった結果とみられた。これらの遺物は、本来、混入品であるが、調査地の歴史的環境や失われた地層を復元するために重要であると考え、ここに報告する。

i) 古墳時代の遺物

須恵器84～90などがある。84は有蓋高杯の蓋で、天井部が高くなり、口縁端部に内傾した面をもつ。TK23ないし47型式で、5世紀に属する。85・86は杯蓋、87は有蓋高杯の杯部である。85はTK

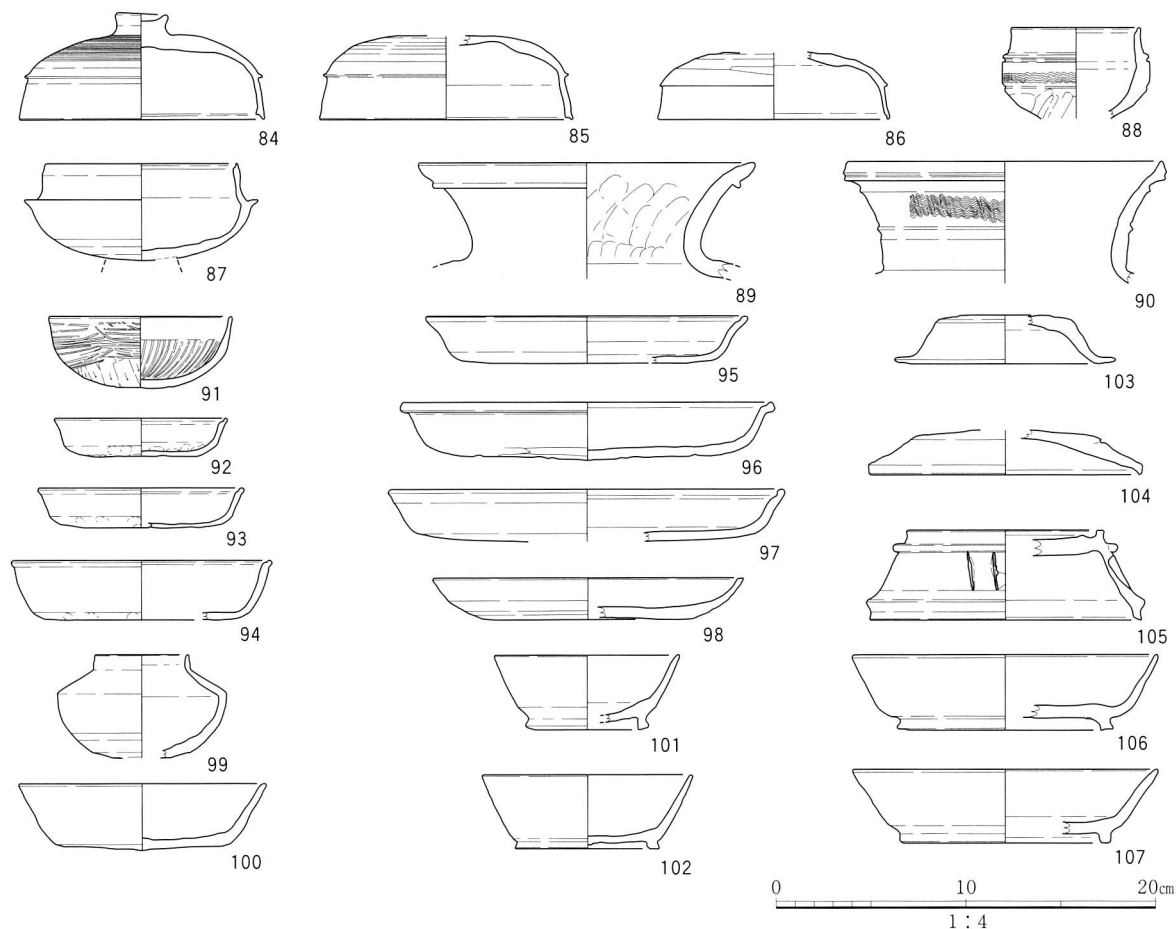


図24 東調査区近世遺構出土の古代以前の遺物実測図
SE09(91)、SE25(89)、SK28(105)、SK29(85・96・101・103)、SK31(90)、SK32(84・86・102・104)、
SK35(87・88・92～95・97～100・107)、SK48(106)

208型式、86はTK47型式、87はTK23型式で、ともに5世紀後半に属する。88は把手付碗で、これも同様な時期に属する。89・90は壺口縁部である。89は口縁端部外面のやや下ったところに突帯を巡らせる。90は波状文で加飾している。ともに古墳時代中期のものである。

ii) 飛鳥・奈良時代の遺物

土師器91～97、須恵器98～107などがある。91は杯Cで内面に放射状暗文、底部外面にケズリ、口縁部外面にヘラミガキを施す。飛鳥Ⅱに属し、7世紀中葉のものである。92～94は杯Aである。暗文がなく、小型のものがある点で奈良時代でもやや新しく位置づけられる。95～97は皿である。奈良時代に属する。98は須恵器の皿で飛鳥時代のものであろう。103は短頸壺の蓋である。104は杯Bの蓋で、奈良時代に属する。105は円面硯で、脚部の装飾が線刻のみになっており、奈良時代から平安時代の初頭に下る可能性がある。99は短頸壺で奈良時代に属する。100は杯A、101・102・107は杯Bで、奈良時代に属する。なかでも、102は高台の位置が底部外周に接近しており、新しく位置づけられる。8世紀後半に属する。

(高橋)

第3節 西調査区の遺構と遺物

1) 古墳時代の遺構と遺物

i) 溝(図25・26・28、図版12・27)

SD71 五合谷の谷筋に掘削された古墳時代後期の溝である。飛鳥時代の**SD73**と重なる位置にあり、谷内に設けた南北セクションの位置では、**SD73**よりも0.3m深く、底が1.8mの幅をもって平坦に造られている(図8)。第9b層を埋土とする。底から0.6mまでは明瞭にトラフ型のラミナが観察される。南北セクションより約2m東側の溝底より土師器壺**108**が出土した。

土師器壺**108**は器高14.3cm、口径9.8cmで、ほぼ完形である(図28)。球形の体部は底部が1.4cmと厚く、口縁部は斜め外方に直線的に伸びる。底部外面から口縁部内面にかけてヨコナデ調整されるが、体部内面には粘土紐の継ぎ目が残る。6世紀代に属する。

ii) その他の遺構(図25・27・28、図版12・28)

SX72 谷の北側斜面にある須恵器甕の埋納土壌である。南北0.75m、東西0.55m、深さ0.32mある。西側の肩部は19世紀の池によって破壊されている。須恵器甕**120**の口を南東方向に向け埋納する。甕の周囲は暗灰黄色粗粒～極粗粒砂混りシルトで埋められるが、甕内は2層に分かれ、上方が灰オリーブ色中礫混り砂質シルト、下方が暗灰黄色シルト質粘土となる。上方は甕の体部が割れ落ちた時に堆積したものである。本来は甕の口には蓋がされており、甕内には空洞があったであろう。埋葬施設であった可能性が高い。

須恵器甕**120**は横倒しに埋納されていたため、底の一部を除いて全体がわかる。口径21.7cm、残存

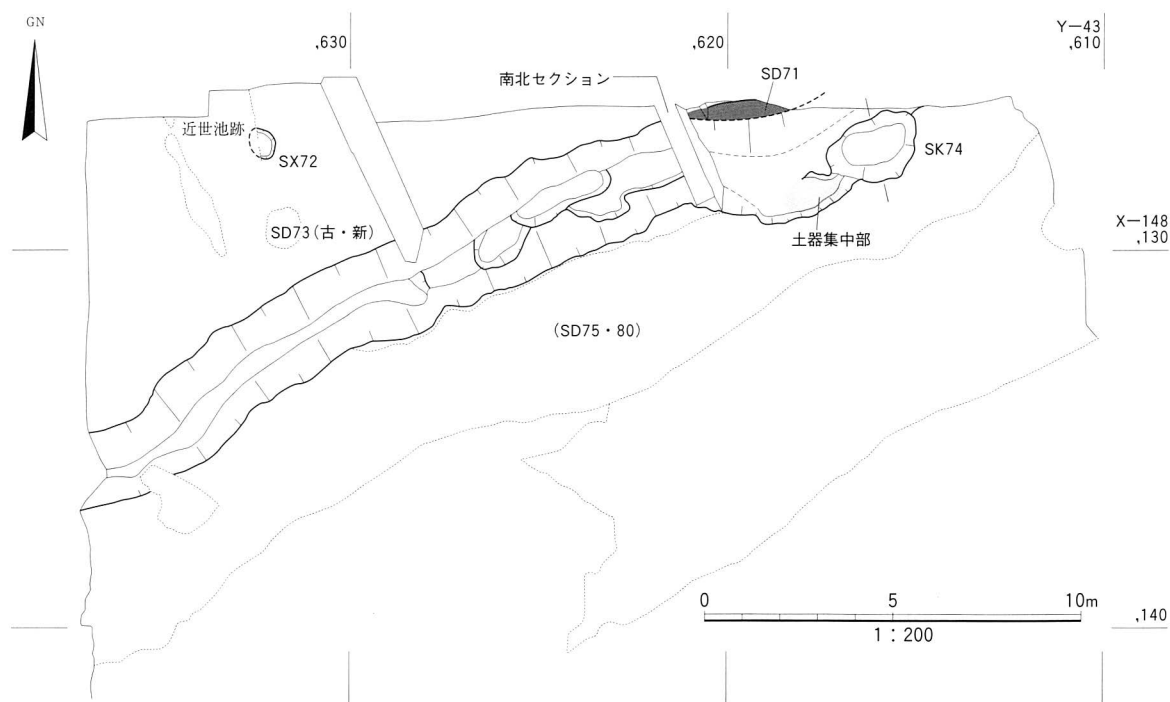


図25 西調査区古墳～飛鳥時代の遺構平面図

高37.6cm、体部径38.7cmあり、体部の最大径位置が中央より少し上位に作られている。頸～口縁部は緩やかなS字を描き、その端部に幅1.8cmの突帯が巡る。頸部には「二」を90度傾けた形のヘラ記号がある。体部内面には同心円文が明瞭に残るが、外面では擬格子タタキメがナデ消され、不明瞭である。6世紀後半に位置づけられよう。

2) 飛鳥時代の遺構と遺物

i) 溝・土壇(図25～30・33・34・39、図版11～13・27～29)

SD73・SK74 SD73はSD75の北側にあり、五合谷内の南北セクションではSD71の直上に新・古2時期あることがわかる(図8)。溝の北肩部には機能時の古土壌である第9a層があり、新段階の溝はその上面から1.8mの深さがある。新・古どちらの溝もSD71とは異なり、断面V字形に掘られる。第8b層を埋土とする。古段階の溝底に、水溜とみられるSK74があり、その脇に土器集中部があった。SK74は長軸2.45m、短軸1.57mのやや歪な楕円形で、検出面からの深さは0.70mある。10～20cm大の地山層起源の偽礫を含んだ灰～オリーブ灰色細粒砂～細礫で埋没する。

土器集中部は土師器大鍋115を中心に4点の須恵器平瓶などからなる。鍋は完形で正位置を保って出土した。鍋の西または南に花崗岩の円礫を集め、南東側に口縁部を欠く平瓶117を横倒しにして置いて、鍋の安定を図っていたようである。鍋から南に0.2mほど離れて頸部以上を欠いた平瓶119があり、その西側に体部下半のない土師器甕109、完形の平瓶116があった。さらに、鍋から東に0.5m離れて口縁部を欠く平瓶118が横倒しになって出土した。完形品やそれに近い土器が1.4mほどの範囲にまとまり、中には正位置に据えられているらしいものもあることから、これらの土器や花崗岩はなんらかの目的をもってほぼ同時期に集められたものと考えられる。水成の砂礫

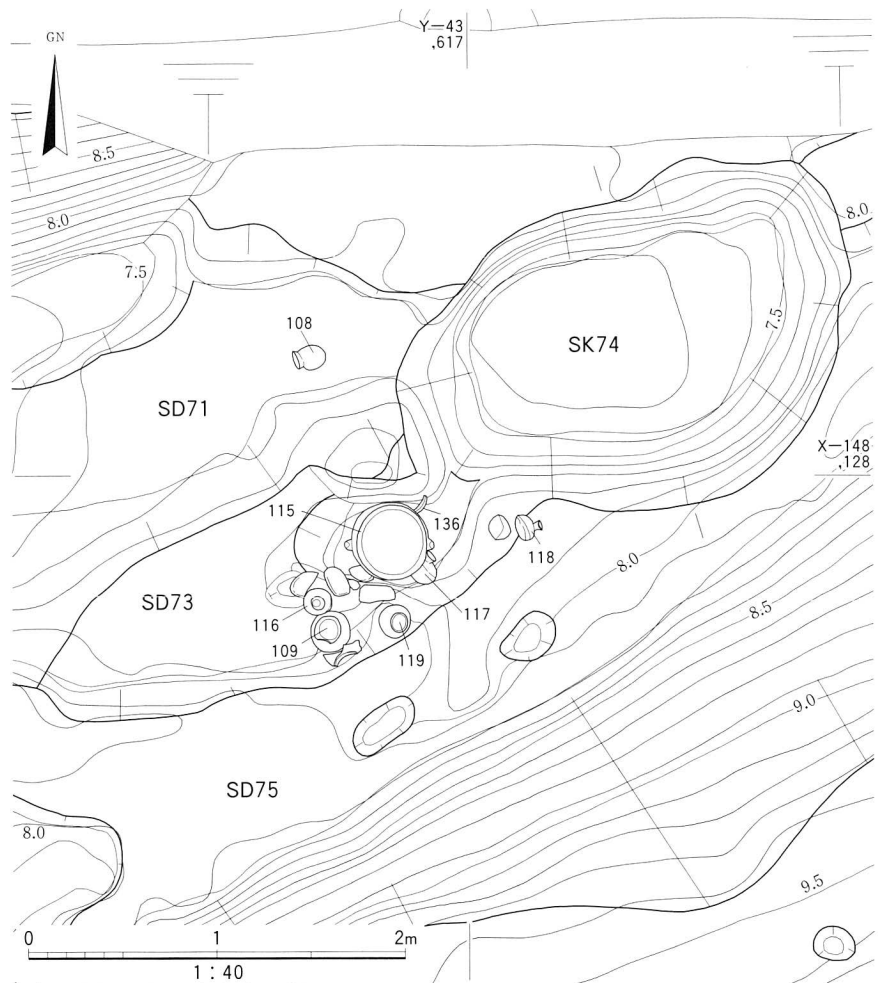


図26 西調査区SD71・73遺物出土状態平面図

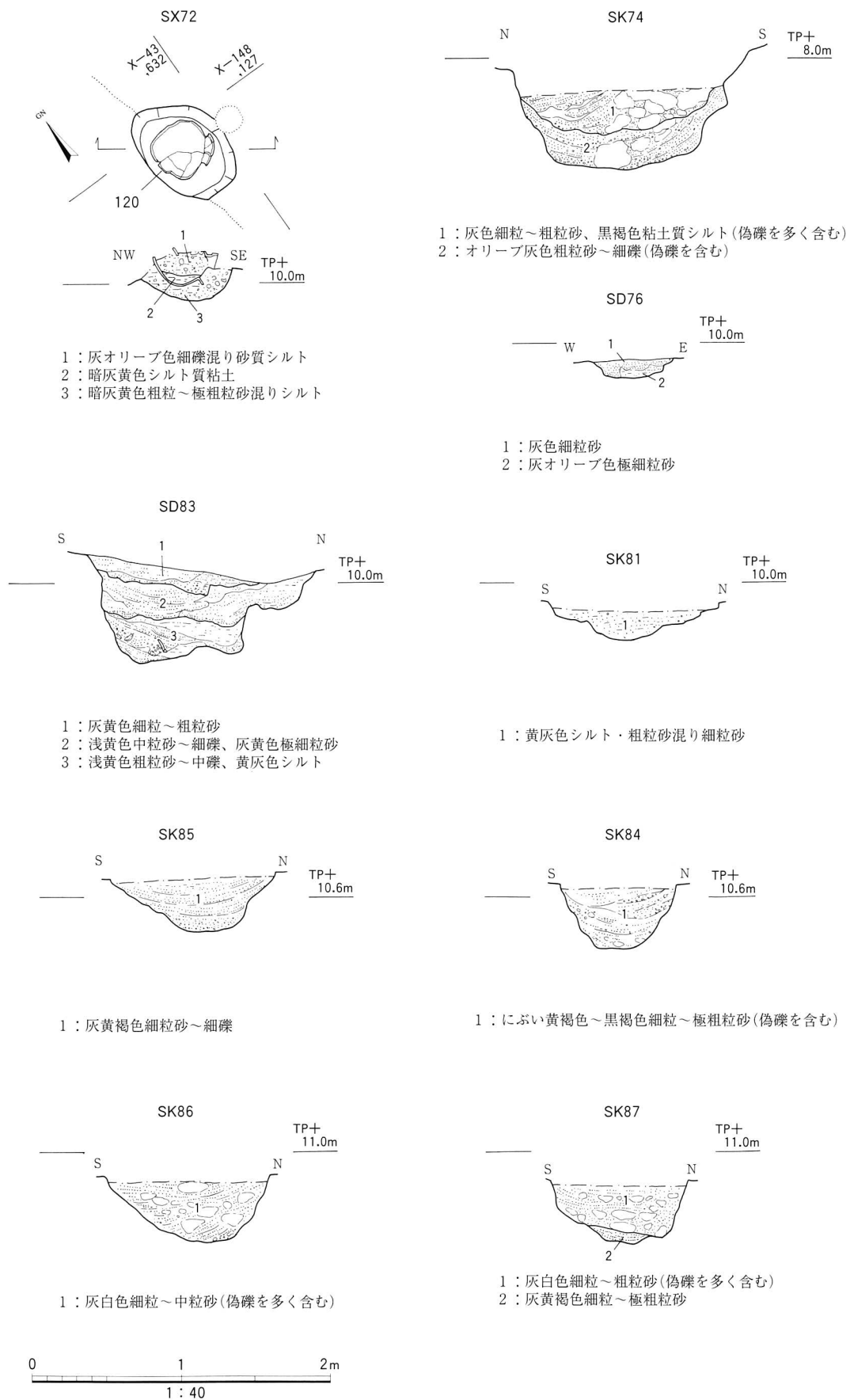


図27 西調査区古墳～平安時代の遺構

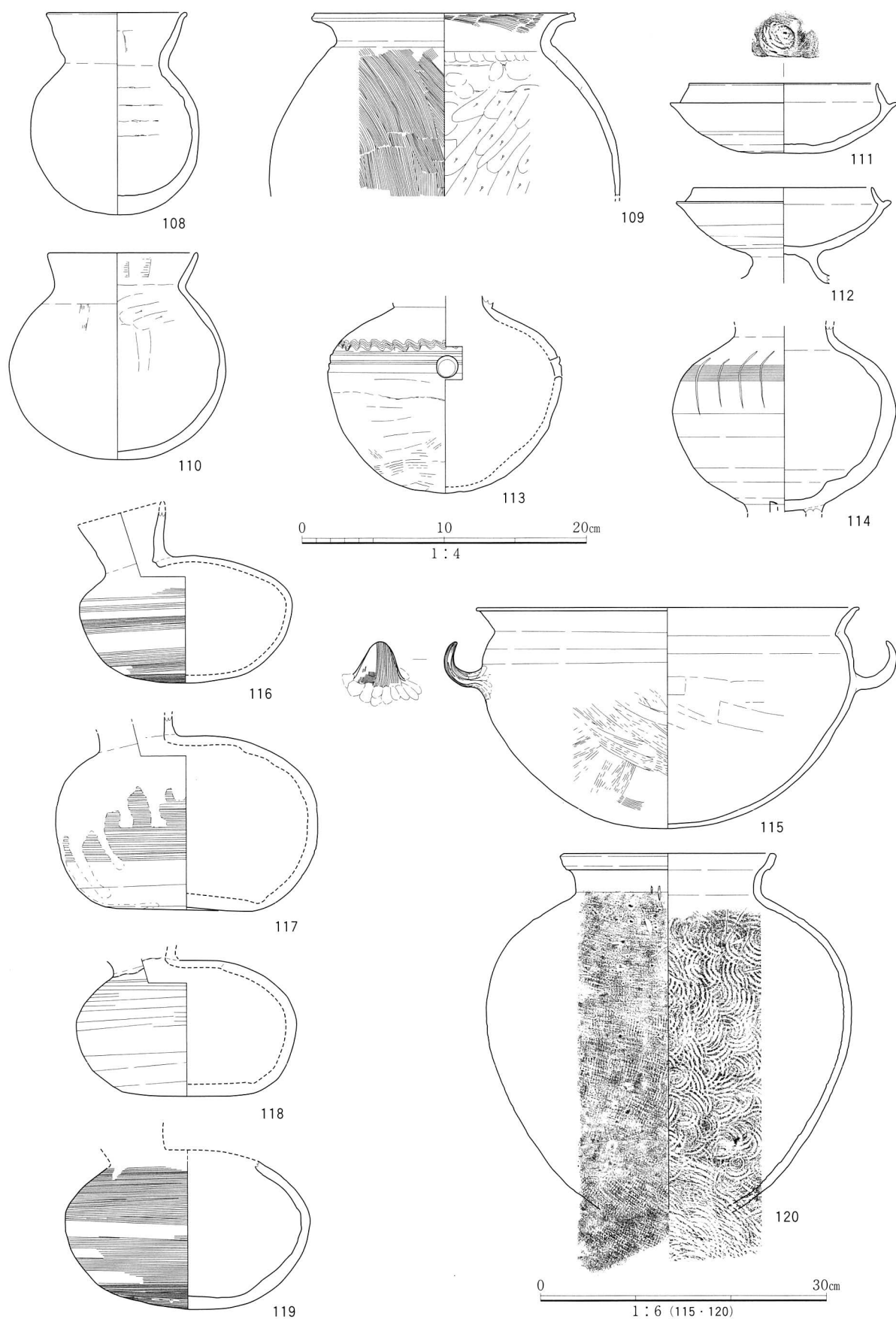


图28 西調査区SD71・SX72・SD73・土器集中部出土土器
SD71(108)、SX72(120)、SD73(110・112~114)、土器集中部(109・111・115~119)

層内に見つかったものであるが、土器や花崗岩が接して置かれていたため、元の位置に近い状況が残ったものと考えられる。

SD73(古)の底からまとまって出土したのは土師器甕109・大鍋115、須恵器杯H111・平瓶116～119で(原色図版下)、これらを掘出す過程で墨書のある平瓦片233が採集されている。これらの下限は飛鳥Ⅱに属す。

土師器甕109は口径18.2cm、体部最大径24.7cmと、口径に比べて体部側がかなり大きく、古墳時代の甕の特徴を残している。体部外面は細かなハケ、内面はヘラケズリ調整されている。大鍋115は完形品で、口径39.6cm、器高23.2cmある。体部の最大径位置にC字状に湾曲する把手を左右に付けている。ヨコナデされる口縁部付近を除いて、外面には細かなハケメ、内面には板状工具によるナデが緻密に施されている。大きさのわりに器厚も薄く、ていねいな作りである。須恵器杯H111は口径が13.2cmあり、TK43型式といえよう。見込み部に同心円文のスタンプがある。116～119の平瓶はいずれも体部に膨らみがあり、天井部との境界もあまり明瞭でない。また116・119の外面は底部までカキメ調整され、底部に丸味をもっている。

墨書のある平瓦233(図39)は掌大の破片で、須恵質に焼成され灰白色をしている。凸面は板状工具による横方向のナデ、側面と凹面は縦方向にヘラケズリされている。墨書はその各面に認められる。凸面には「道」「乃」のほか立心偏風のものなどが数行にわたって書かれている。側面には一行に4～5文字分が確認できるが、判読できない。凹面には2～3文字が散在し、「馬」と読めるものがある。平瓦の異なる3面を使っているが、記された文字の向きはほぼ一方向のようである。その一方で、文字の大きさにばらつきがあり、意味も通らない。習書した跡であろうか。

SD73(古)から出土したそのほかの土器には、土師器壺110、有蓋高杯112、須恵器甕113、須恵器台付壺114がある。5世紀中葉の甕113以外は、6世紀後半のものである。SD73(新)埋土の8b層からは飛鳥時代後半の丸瓦262が出土している。遺構が完全に埋没したのはこの時期であろう。

SD75・76 SD75はSD73が埋没したのち、その南側に掘削された溝である。溝の北側斜面にはその機能時にあった旧地表である第8a層が見られ、その上面から溝底までは1.1mほどの深さがある(図8)。溝底には起伏もあるが、横断面はおおむね逆台形に掘られている。第7b層を埋土とする。

SD75から出土遺物した遺物には、土師器に杯C121～125、高杯126・127、羽釜147、須恵器に杯G蓋128～135、杯G136・137、杯H139、杯B138、壺144、平瓶145・146があり、そのほかに古墳時代の土器も含むものの、飛鳥Ⅲの資料を下限としている。

土師器杯C121・122の内面には1段の放射状暗文が残る。口径が19.0cmあり大型の125の内面に暗文はなく、ハケメが見られる。土師器高杯126には杯部と脚部の接合時にできたシボリメが脚部内外面に明瞭である。一方、127ではその部分の外面に縦方向のヘラケズリやハケ調整が行われている。土師器羽釜147は口縁部内外面をハケ調整するとともに、齔から下の体部に膨らみをもつ特徴がある。須恵器杯G蓋には口径7.3～9.6cmのものがある。壺144は若干外方に開いた短い口縁部をもつ。その外面および底部にカキメが付いている。平瓶146の体部下方は膨らみをもち、この器形の古い特徴を残している。天井部と体部の境には、「二」を重ね書きしたようなヘラ記号がある。

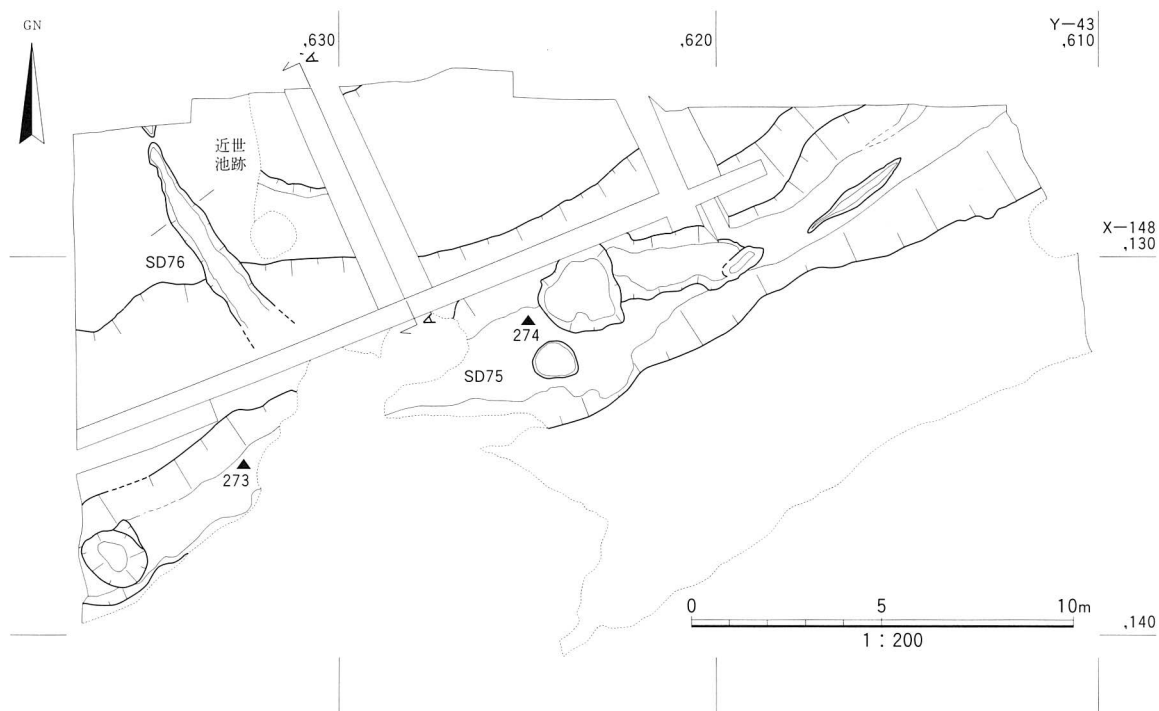


図29 西調査区飛鳥時代の遺構平面図

古墳時代にさかのぼる資料はみな須恵器で、140は杯H、141・142は高杯、143は甕である(図26)。これらは5世紀中葉(140～142)、6世紀後半(143)のものに分かれる。141の杯部には幅広の受部が作られている。142の脚部の裾には断面三角形の突帯が巡り、円形スカシ孔が三方にある。

動物骨273は溝底付近より出土したウマの下顎骨、274はウマの頭蓋骨である(図版34)。274は上下逆向きの状態で見つかった。このほかにもウマ・ウシの歯が出土している。

SD76はSD75に北側から取付く幅0.6mほどの溝である。近世の池底に掘残されていたものであるため本来の規模は明らかでない。深さ0.12m分が残り、埋土は底に灰オリーブ色極細粒砂が堆積したのち、灰色細粒砂が覆っている。

3) 奈良時代の遺構と遺物

i) 土壌(図31・32・34、図版14・31・32)

SK77～79 SD75が第7b層によって埋没したのち、かつての溝の中央部にSK79→SK78→SK77の順に、先行する土壌の西半部を掘込みながら、連なるように造られている。最後に掘られたSK77は東西3.19m、南北1.6m以上ある。埋没状況はみな似ており、下部に明瞭なラミナのある砂礫層、上部に暗色化した極細粒砂や粘土質シルトが見られる。東西方向に設けたセクション(図34)に見られるフォアセットラミナの方向から、これらの土壌内に流入した砂礫は谷頭方向とは逆の東側から運び込まれているのがわかる。この原因については、五合谷の下流側にあった支谷に流入した砂礫が上流側に派及した、あるいは、谷の南側斜面を下ってきた砂礫によって埋った、という状況を考えることができる。掘込んで下流側から埋るという現象が3回重なったという観察に誤りがなければ、後者の状況によって埋没した可能性が高いであろう。

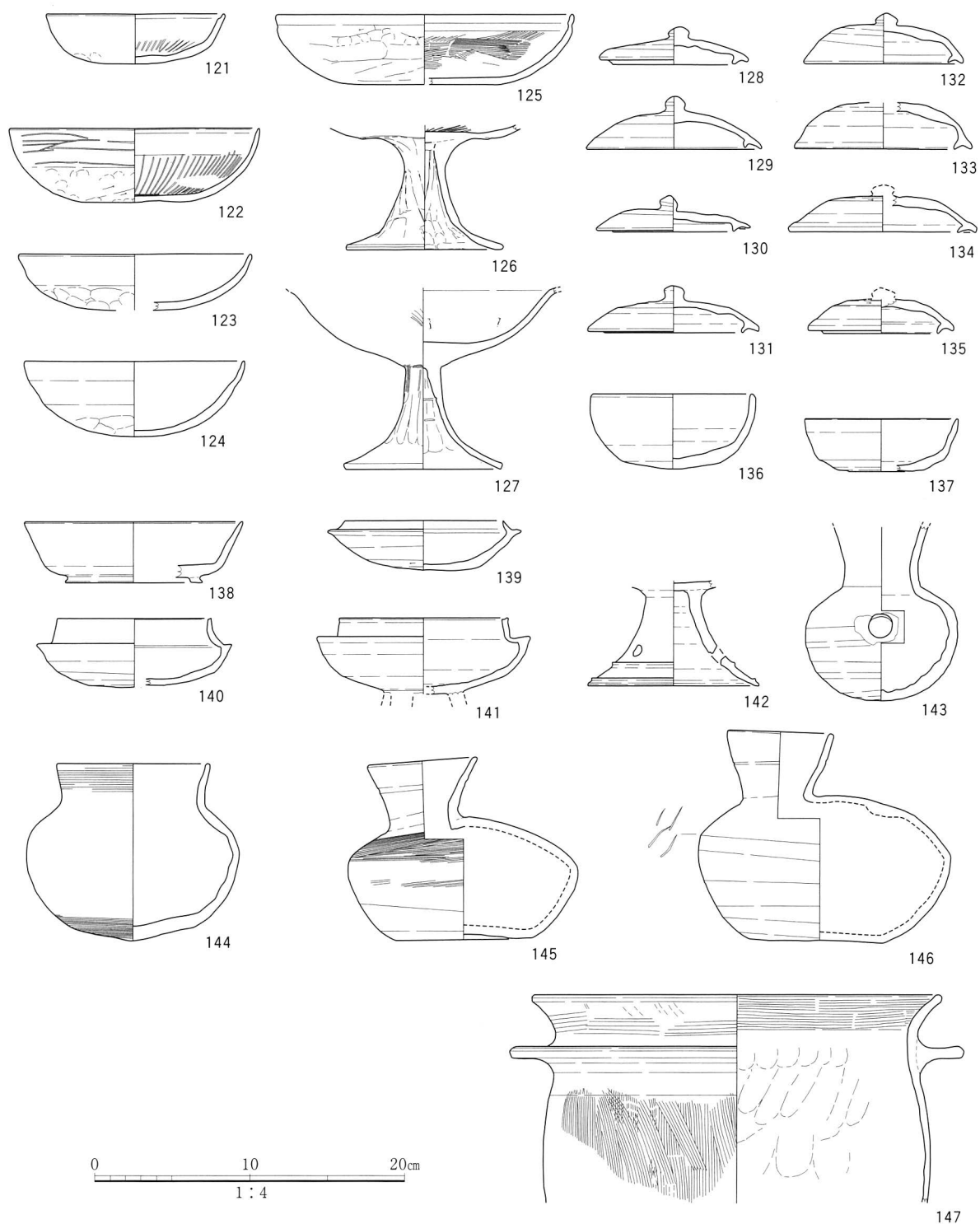


図30 西調査区SD75出土土器

SK78の埋土上方の灰色細粒～粗粒砂層から、土師器として皿B148・甑149・甕A150・甕C152・153、須恵器として壺K151・甕A154・155がまとめて出土した。土師器皿Bの形態から、平城宮土器Ⅱに当る。148の皿Bには底部内外面に輪状暗文、口縁部内面に放射状暗文がある。149の甑は把手や底部の穿孔の形状が欠損のため不明である。150の甕Aの体部はやや下膨れで、飛鳥時代の特徴を残す。須恵器壺Kの151は肩部の上下に3条の凹線が巡る。また、体部から頸部にかけて、その

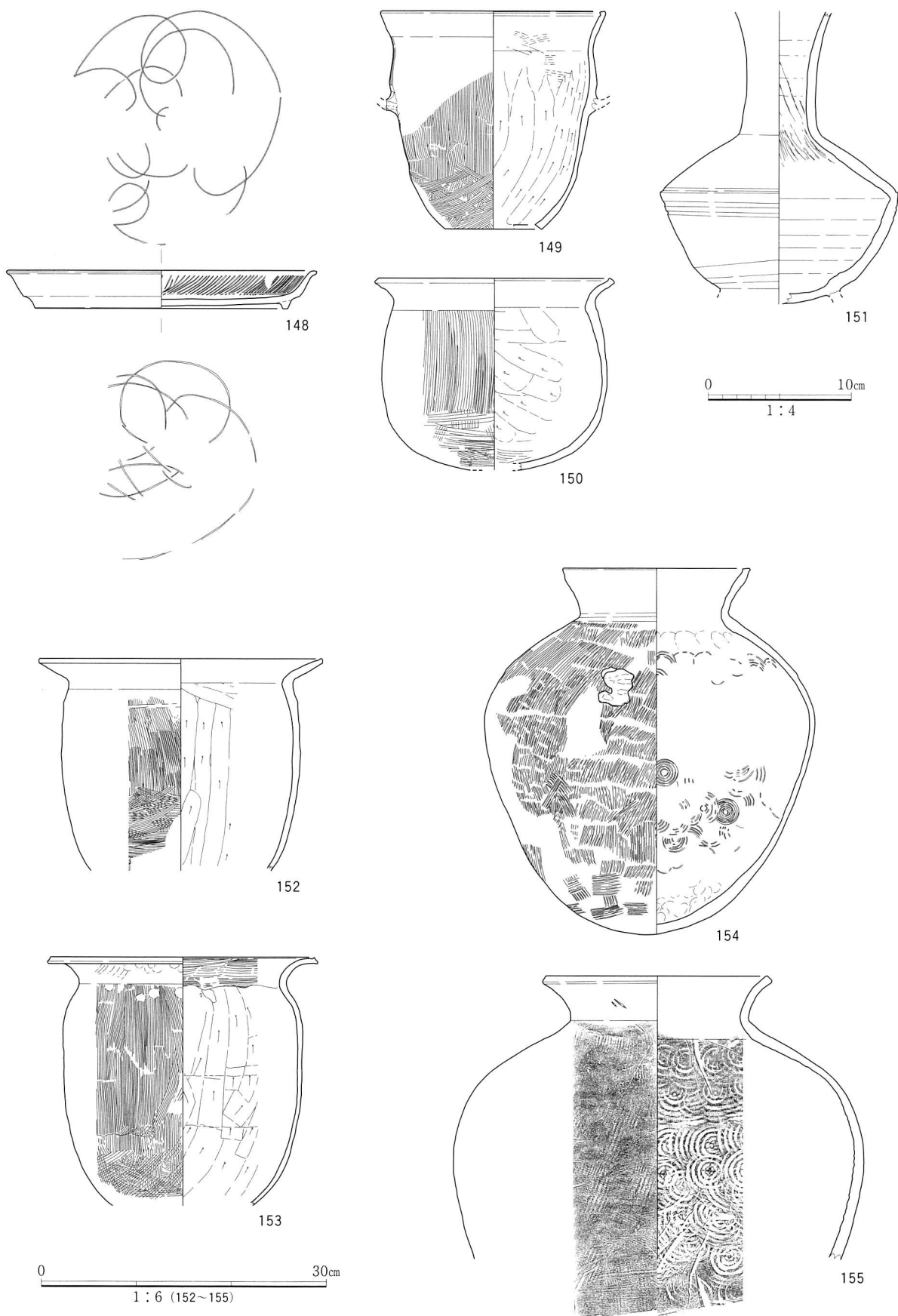


図31 西調査区SK78出土土器

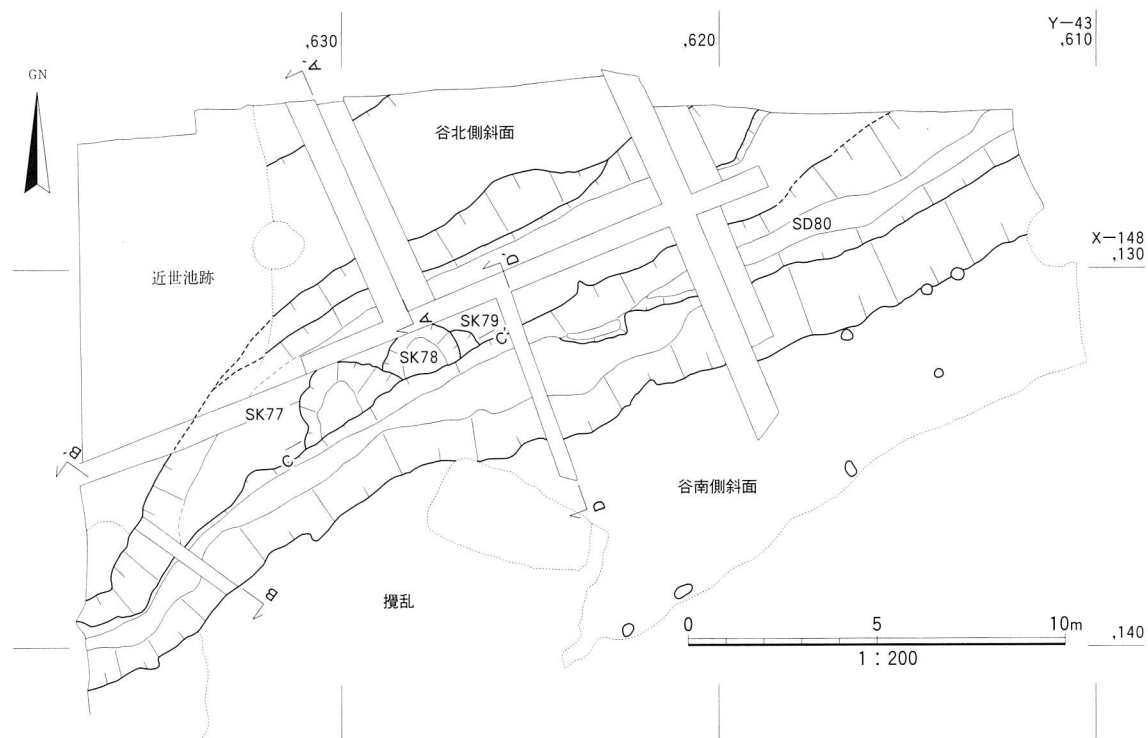


図32 西調査区奈良時代の遺構平面図

内面に成形時のシボリメが見られる。土師器甕Cの152・153はどちらも底部を欠損するが、口径28cm前後の長胴甕である。153の口縁部は大きく湾曲し、内面にハケ調整を行っている。須恵器甕Aの154は口径19.2cm、器高38.2cmに復元できた。体部外面に平行タタキメ、内面に同心円文を残すが、底部内面にはユビオサエが顕著である。口縁端部には水平な面が作られる。一方、155の口縁端部は斜め上向きに平坦面を作っている。また頸部には、「二」字を横倒ししたようなヘラ記号があり、体部の内面に車輪文当て具の痕跡が見られる。

ii) 溝(図32～34・35～40、図版13・14・29～33)

SD80 SD80はSD75の直上にあり、SD75の埋土である第7b層の上面に検出されたSK77～79の南側を掘貫いている。溝北側の斜面部には、溝内に流水があった時の古土壌である第7a-4層があり、その上面から溝底までは1.6mの深さがある(図8)。溝は断面V字形に掘削されている部分が多いが、SK79を検出した個所付近では横断面が逆台形となる。また、SK79などの土壌のあった周辺には、テラス状に平坦部が設けられる。埋土となる7a-1層および7a-2層には溝の中央部にトラフ型のラミナが明瞭に見られるが、第7a-3層には認められない。これらの地層からは次に述べる多量の遺物が出土した。

土師器には杯C156～159、椀160・161、杯A162～166、皿A167～177、鉢178、高杯179～183、甕220、移動式竈223がある。飛鳥時代の土器が多く含まれるが、それらは下層の溝などに本来伴っていたもので、皿167～173・176、高杯181～183などが示す平城宮土器Ⅲ～Ⅴがこの遺構の存続期間であろう。

156～159の杯Cは口径10.5～12.8cmで、口縁部内面に放射状暗文がある。160・161の椀は体部下半から底部をユビオサエで成形し、ヘラケズリで調整している。杯Aのうち162・166は浅い器で、

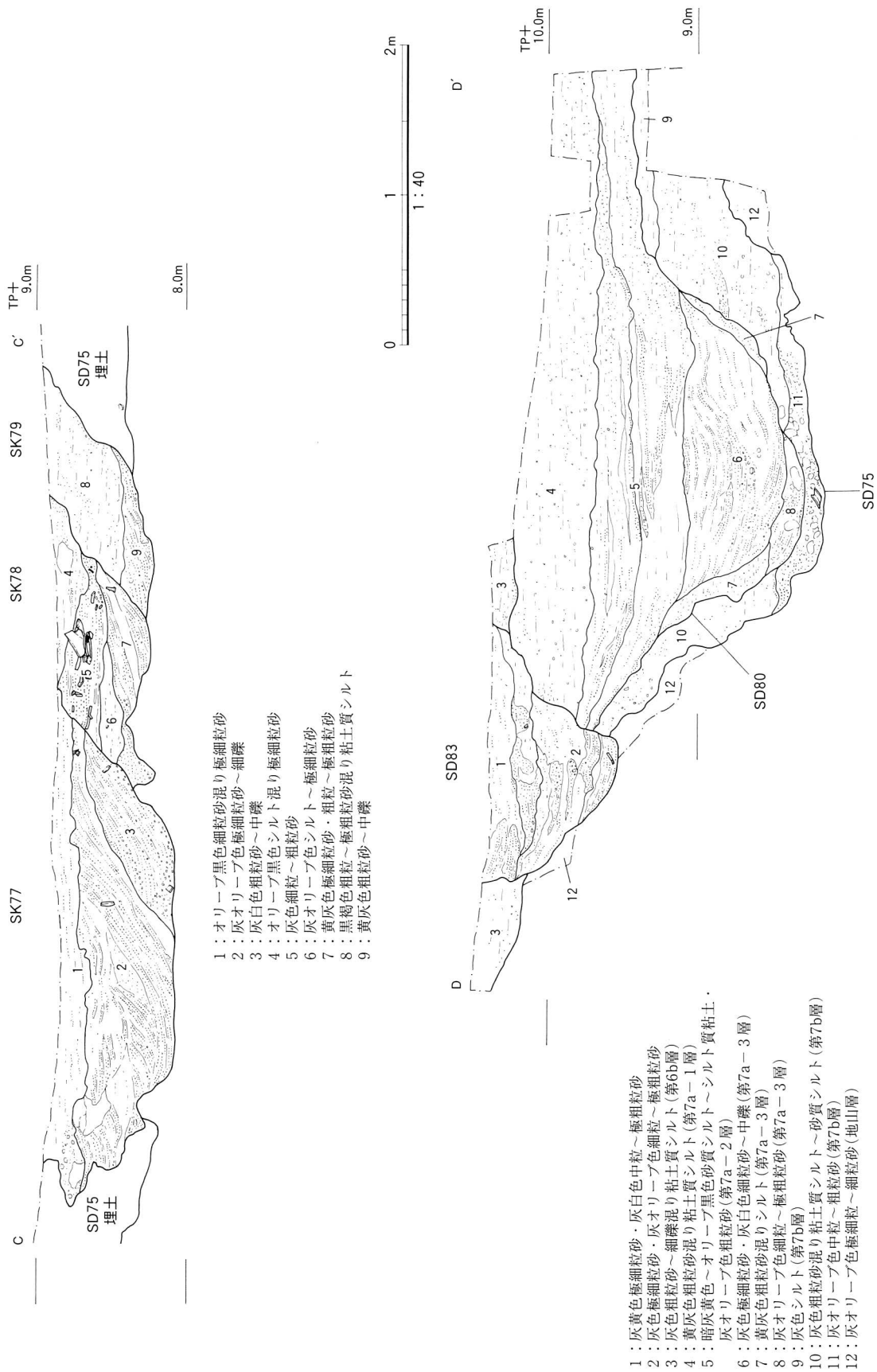


図34 西調査区SD75・80・83、SK77～79断面図(図32にセクション位置を示す)

162の体部外面にはヘラミガキが加えられ、166の内面には輪状暗文が施される。163～165は深く、口縁部内面には上下2段に放射状暗文がある。飛鳥時代の皿A174・175・177は底部と体部の境が明瞭でない。174の見込みには輪状暗文、175には波線を連ねた暗文がある。167～171・176の皿Aは口径から4群に分けられる。168の小型の皿は二次的に火を受け、器表の一部が剥離している。鉢178の体部外面は横方向のヘラケズリで調整を終えている。179・180は高杯の杯部で、飛鳥時代の杯Cと類似した形態を採っている。181は浅い皿形をした高杯の杯部で、口径27.5cmある。内外面に暗文・ヘラミガキが施される。高杯の脚部182・183はともに脚柱部分をヘラで面取りしている。裾の拡がり具合は少なく、外面にヘラミガキがない。220は口径が28.0cmある長胴甕で、体部外面がハケ調整、内面がヘラケズリ調整となっている。移動式竈223は付庇系統のもので、側面から背面には1本の突帯が巡る。器高39.0cmある。

須恵器は、184～193は蓋類で、杯H蓋184、杯G蓋185・186、杯B蓋187～192と口縁端部に浅い凹みを巡らせた193がある。杯には、杯G194～198、杯A199～201、杯B202～209がある。その他には、高杯210、平瓶211～213、各種の壺214～219・221・222が認められる。土師器のばあいと同様に飛鳥時代の土器を含んでいるが、杯B202・203や平瓶213などを見れば平城宮土器Vを下限とするものといえる。

杯H蓋184はやや高い天井部をもつ。杯B蓋189には口縁部内側にかえりが残る。また、191・192のつまみは高台風に作られた金属器形態の模倣品で、杯B206・207はそのセットとなるものである。杯A200の外底面中央には「万」という墨書がある。杯B209は口径25.0cmある大型品である。高杯210は土師器杯Cに似た杯部をもち、「へ」字形に屈曲する脚端部となっている。平瓶212は体部径が10cmに満たない小型品、平瓶211・213は体部が直線的に立上がり、膨らみがない。214・215は頸部の短い小型の壺で、どちらも高台をもたない。216・217は丸味のある肩に続いて垂直に立上がる頸部が特徴的な壺Lである。216は体部最大径が7.8cmの小型品である。218・221は壺Aで、218はわずかに外反する頸部の先に尖った口縁端部を作っているが、221の頸部は直立し口縁端部を平坦にする。前者の器高が13.1cmであるのに対し、後者は24.8cmある大型品である。219は角張った肩部と広い口をもつ壺Xである。器高が15.5cmあり、壺Xとしては大型品に属す。222は壺Kの大型品で、器高が48.5cmある。

瓦には、平瓦・丸瓦・軒丸瓦がある。平瓦228・229・232はいずれも凹面に布目を残すが、229ではその上からヘラケズリを加えている。各凸面は、228が斜格子タタキ、229がナデ、232が縄目タタキである。丸瓦230は玉縁へと連続する部分の破片で、凹面に布目痕があるが、玉縁側へは連続していない。凸面は縄目タタキメ上に粘土を加え、ナデ調整によって仕上げている。231は重圏文軒丸瓦の瓦当部である。直径約18cmで、3重の圏線の中心に「右」左字陽文が存在するかに見えるが明確でない。後期難波宮大極殿に用いられた6015A型式あるいは6016型式[大阪市文化財協会1995]である。

その他には土馬・土錘・製塩土器・銅銭などがある。土馬224・225はどちらも脚部で、中実の円筒形をしている。胴体部との接合面で外れている。棒状土錘226は直径1.5～2.0cm、長さ7.6cmあり、両端に0.7cmの穿孔がある。重量26gある。製塩土器227は口縁部から体部が筒状を呈する。器厚は

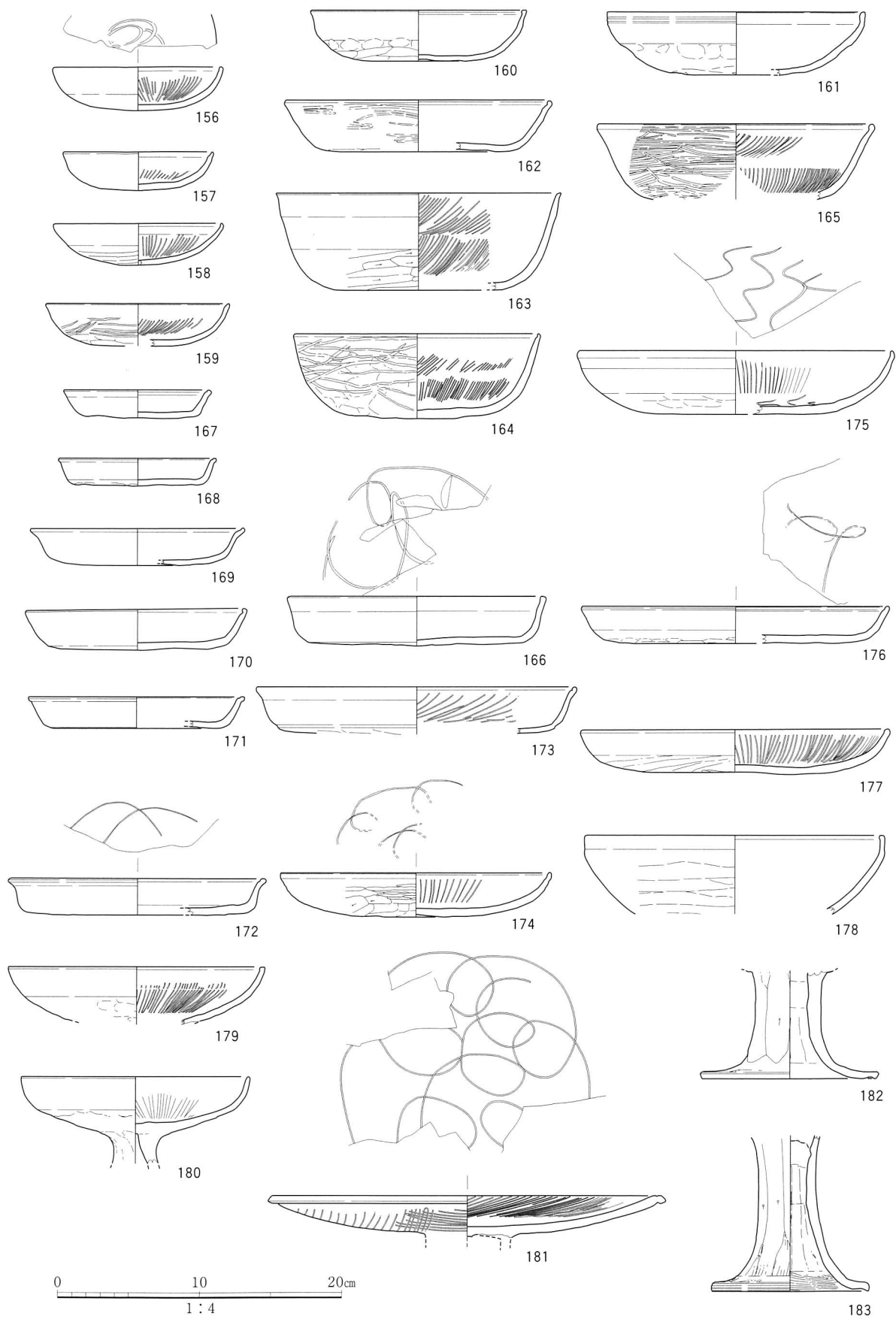


図35 西調査区SD80出土土師器

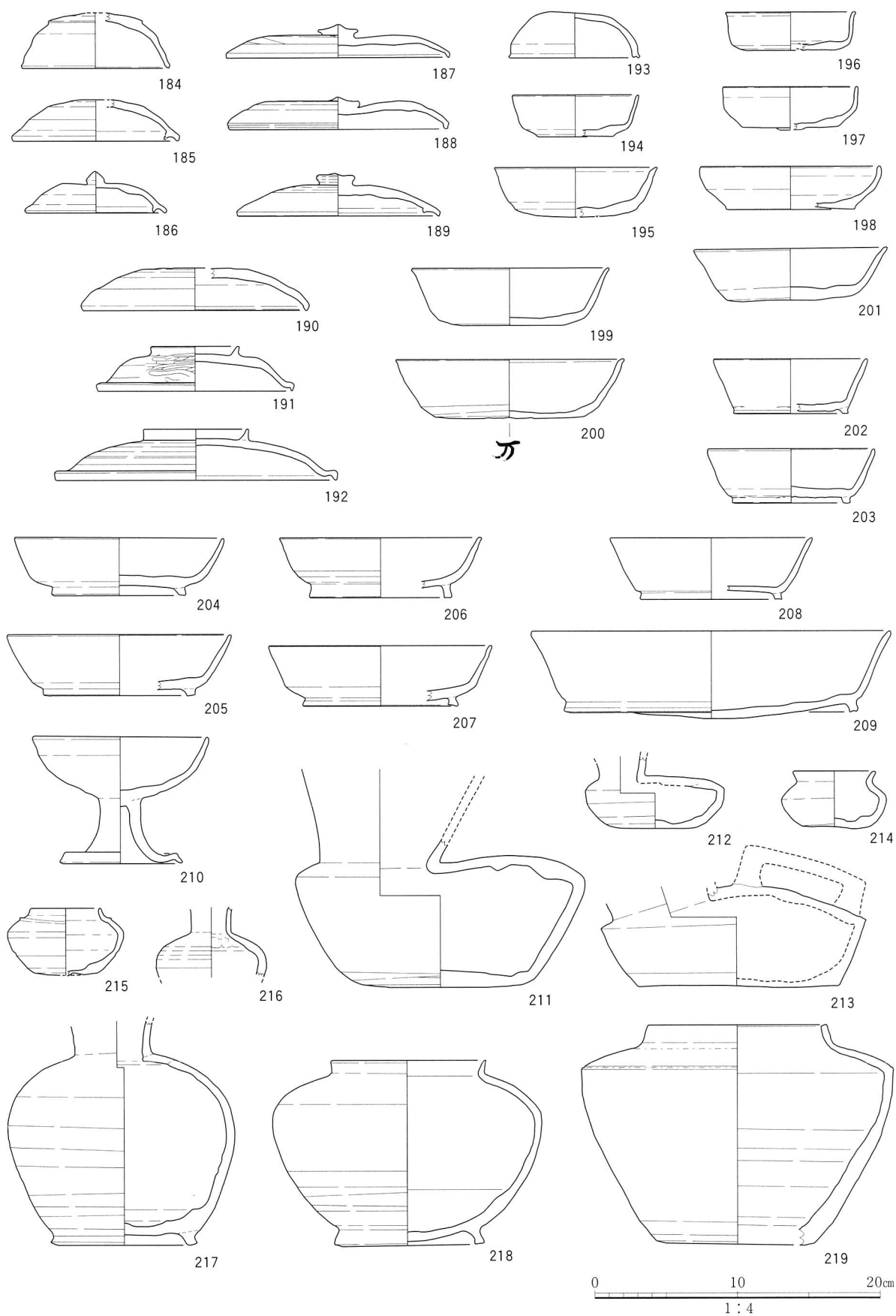


図36 西調査区SD80出土須恵器

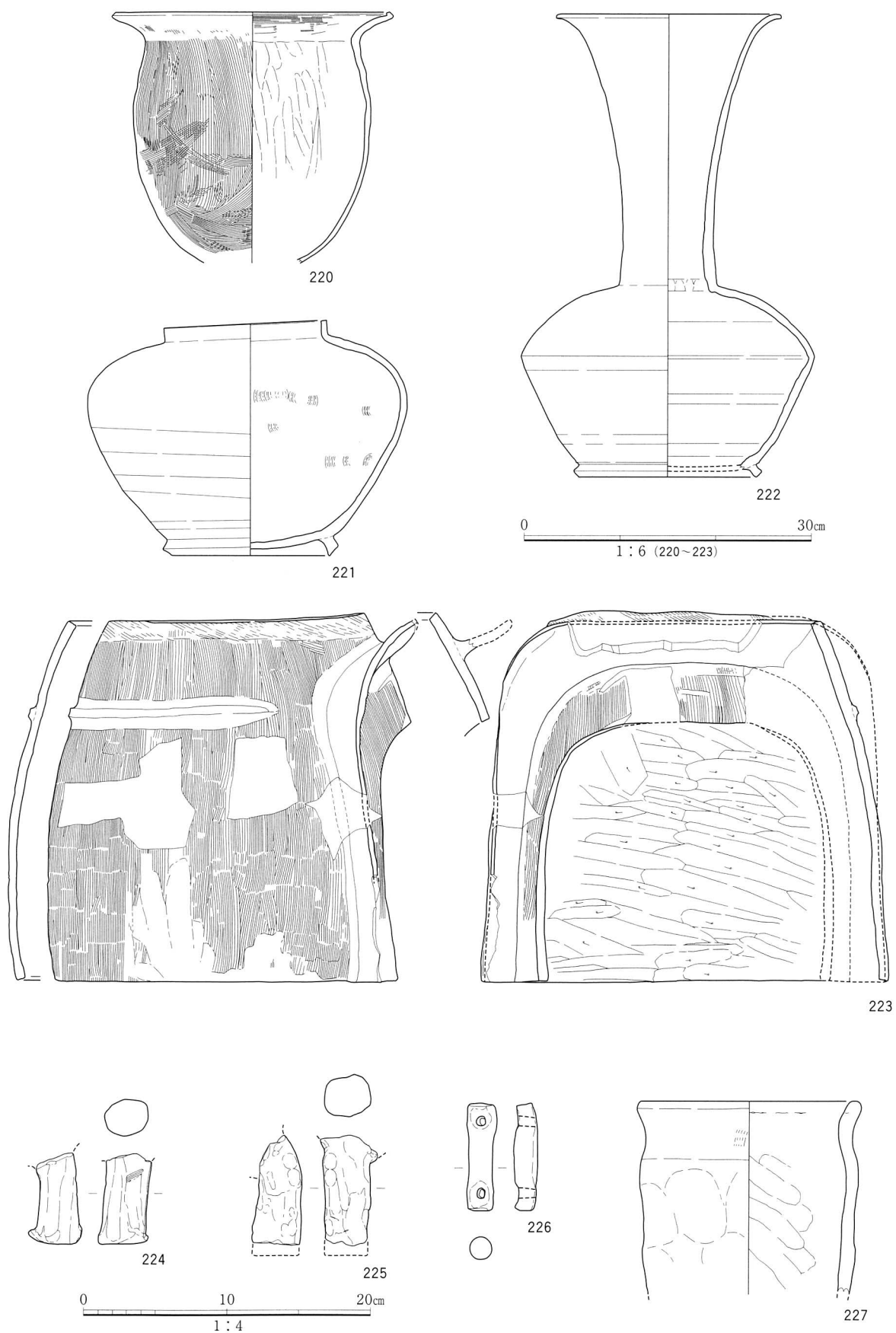


図37 西調査区SD80出土土師器・須恵器ほか

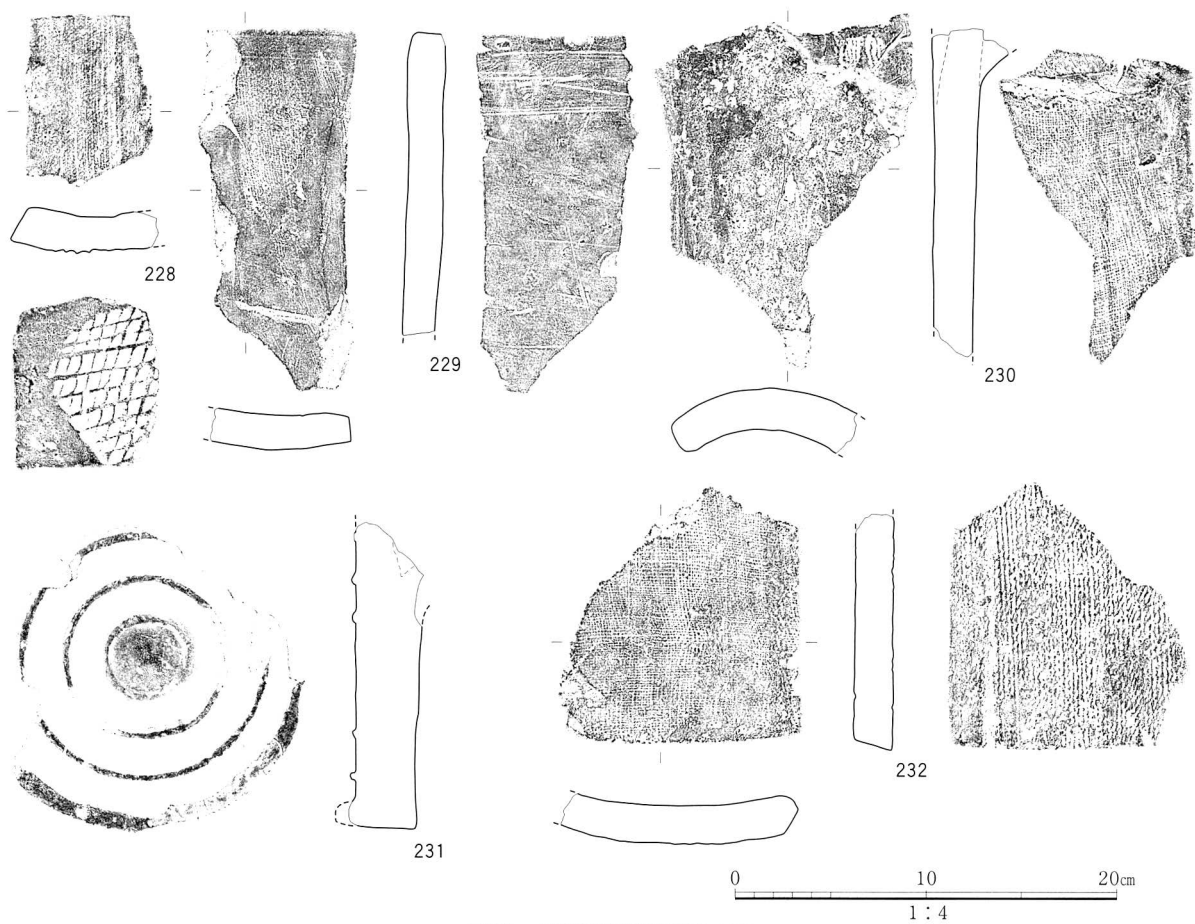


図38 西調査区SD80出土瓦

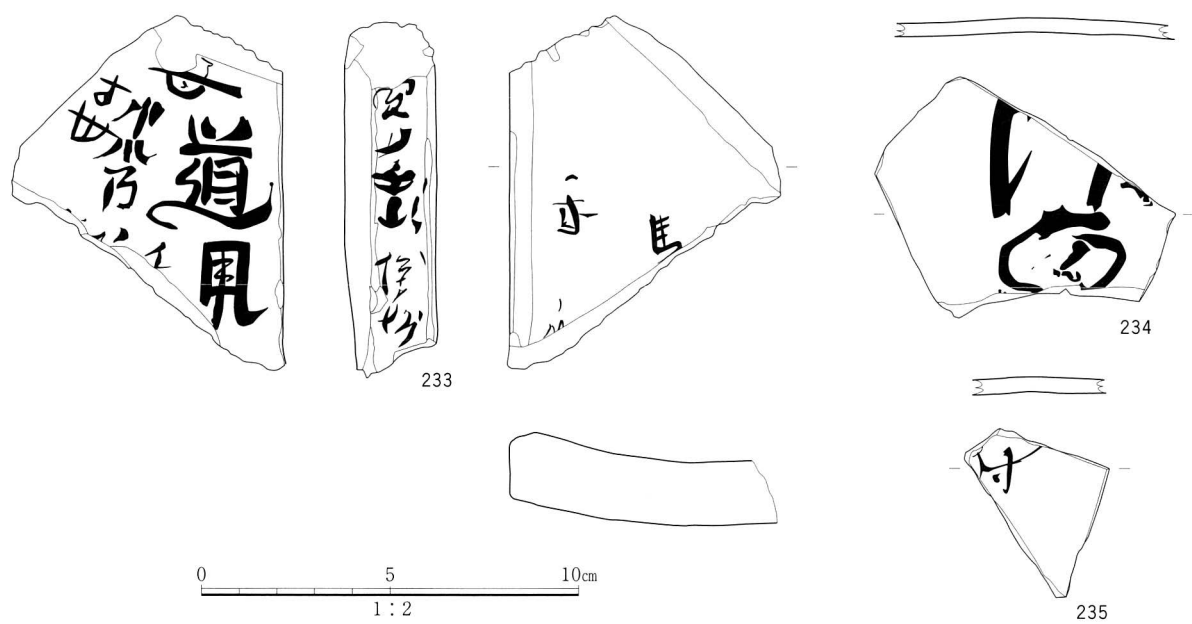


図39 西調査区墨書のある瓦・土器
SD73(古)(233)、SD80(234・235)

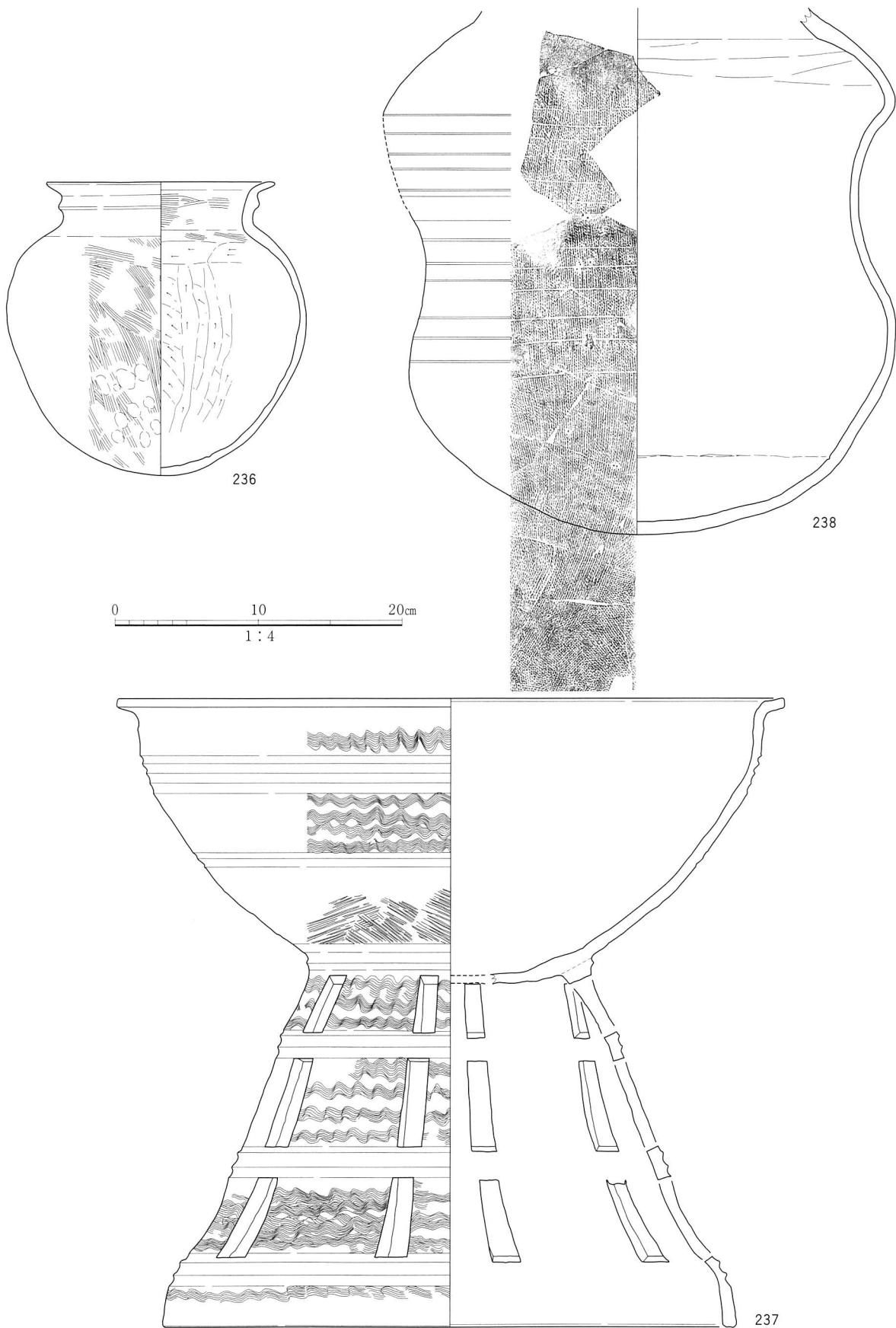


図40 西調査区SD80出土の古墳時代の土器

1 cm前後と厚い。和同開珎239(写真2)は外縁部が細く、その内側にも間隙ができています。こうした状況から製作時の不良品の可能性も考えられたが、全体が薄く痩せており、溶けた銅の回りが悪かったためとはいいい切れません。流通していたものが地中で劣化したものとみられる。墨書土器234・235は土師器皿の底部とみられ、その外面に墨書がある。234には2文字以上があるが、判読できない。235には文字の一部分とみられる「寸」が書かれている。「寺」の4～6画目の可能性もある。



239

写真2 西調査区
SD80出土の和同開珎
(X線写真、ほぼ実大)

SD80からは古墳時代の土器も多く出土しており、全体像の復元可能な資料も含まれる。そのうち土師器壺236は丸底で、口縁部を複合口縁風に作っている。口径15.9cm、器高20.5cmある。水平方向に開く口縁端部に特徴がある。1996・97年の調査で多少類似する口縁部形態をもつものが見ついている[大阪市文化財協会1999；図17-25]。近畿地方の土師器ではなかろう。須恵器高杯形器台237は半球形の杯部に短く外反する口縁部をもち、裾部をやや直立ぎみに作る脚部を有する。器高43.7cm、口径46.2cm、脚部径39.4cmある。杯部は凹線によって3段に区分され、その上方2段に櫛描波状文がある。脚部は4区分されて、各区画に櫛描波状文があり、上方3区画に長方形のスカシ孔が10方向に見られる。

(櫻井)

238は陶質土器短頸壺である。口縁部は欠損するものの、胴部の上半と下半にわずかに接点があり、螺旋状沈線や帯状のナデの位置を加味して図上復元した。頸部までの高さは約37cmである。胴部には8条/cmの縄文タタキが施された後、頸部には強いナデが施され、肩部のタタキメがナデによって消される。それ以下には上から下に向かって螺旋状の沈線と胴部中央付近に幅1 cm程度のナデが帯状に施される。沈線は向かって右から左方向に引かれ、間隔が下方ほど広くなる。底部は丸底で、内面には接合痕が残り、底部外面には側面のタタキメを切る縄文タタキが施されている。なお、図のとおり焼け歪みが激しく、外面の一部には別個体の破片が熔着している。また、破片の一部に器表面や割れ口が赤変しているものがあり、二次焼成を受けたことがわかる。

(寺井)

4) 平安時代の遺構と遺物

i) 第6a層下面および第6b層上面(図41)

第7a-1層によってSD80が完全に埋没すると、五合谷内はなだらかな窪地となる。第6b層上面には、もとSD75のあった位置に溝状の落込み82、SK81が見られる。落込み82は黄灰色中粒砂～細礫混り極細粒砂で埋っており、深さは0.2mほどである。SK81は直径1.22m、深さ0.23mあり、黄灰色シルト・粗粒砂混り細粒砂を埋土とする。

第6a層下面には小溝群が見られ、窪地の中心にある落込み82を挟んで北側の溝は北東-南西方向、南側は落込み82と平行する方向を採っている。北側の小溝群の方向はこの窪地内の等高線に沿ったものといえ、地形に大きな改変を加えずに、耕作地としての利用が五合谷内で始められたことを示す。

ii) 第5b層上面、第6a層上面および層内(図27・42・46・47、図版15・16)

第6a層上面および層内には段差①、SD83、SK84・85などがある。上述した第6a層下面では地形

に合わせて耕作溝が掘削されていたが、第6a層内に谷筋方向に直交する方向に段差①が設けられ、耕地は雛壇状に整えられた。耕作溝もこれに平行あるいは直交する方向となる。

段差① 近世の池などのためごく一部が残るにすぎず、約0.1mの高低差しか遺存してない。その下裾に当る位置の第6a層上面にはSK84・85が並んで存在する。どちらの土壙も後の遺構に掘込まれて本来の形状は不明であるが、やや歪んだ楕円形であったと推測される。SK84の短軸長は0.80m、深さは0.45m、SK85の短軸長は1.08m、深さは0.41mである。ともにトラフ型ラミナのある細粒砂～小礫で埋没している。SD83はSD80の南肩に沿った位置に掘られ、新・古の2時期がある。幅1.1～1.8m、深さ0.8m前後である。灰色極細粒砂や灰オリーブ色粗粒砂～細礫などを埋土とし、トラフ型ラミナが顕著である。

SD83からは須恵器壺247・杯B248・甕250・249、SK85から須恵器甕245が出土した。247の壺には断面三角形の低い高台が付く。249の甕の口縁部は器壁が厚く1cmほどあり、端部を大きく垂下させている。245の口縁部は端を折り返して幅約2cmの突帯状にしている。これらの特徴から9世紀代の須恵器とみられる。

第5b層上面にはSK86・87がある。ともに直径1.2m弱、深さ約0.4mあり、10cm前後の偽礫を多く含んだ灰白色細粒砂で埋る。両遺構はSK84・85とほぼ同じ位置にあり、これらの遺構に代わるものとして掘削されたのであろう。

SK87からは須恵器杯B246が出土した。薄い底部片に細手の高台をもつ。

第5b層上面、第6a層上面には、段差①の下裾に水成層で埋没する2基ずつの土壙があった。これらは形状・規模も類似しており、同じ目的で設けられたと考えられる。谷内の雛壇状段差の裾に穴を掘り、水溜としていた例が現在の耕作地にある(写真3)。これらの遺構にも同様な機能が想定される。

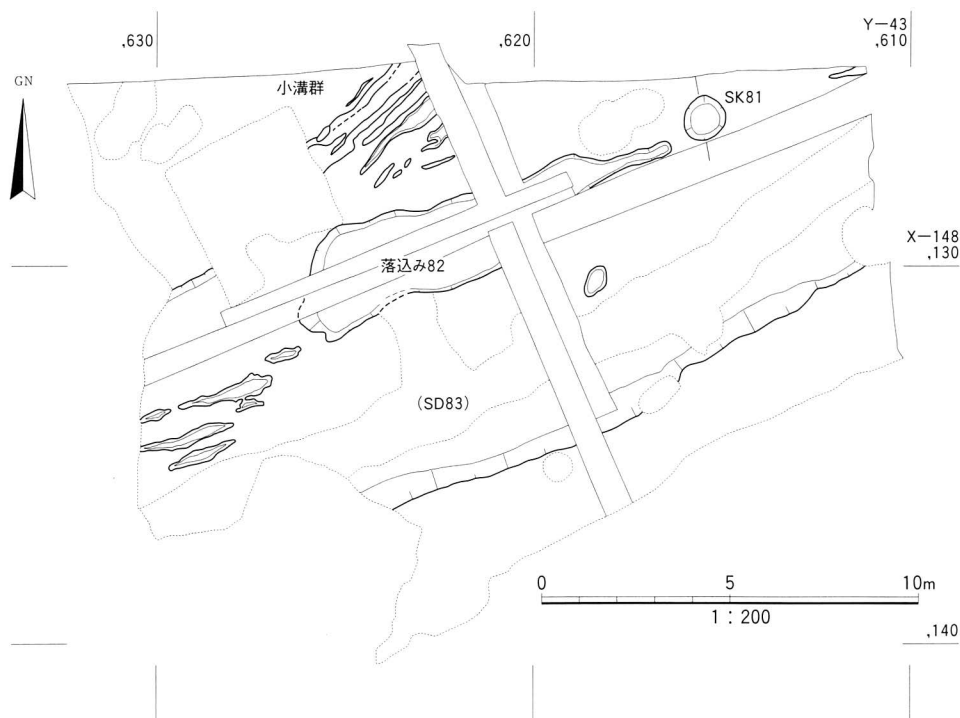


図41 西調査区平安時代の遺構平面図(1)

5) 鎌倉・室町時代の遺構と遺物

i) 第4b-2層上面、第4b-3層上面および下面(図43・46・47、図版16・17・33)

第4b-3層下面の遺構に段差②、SD88、SK89がある。SD88はかつて段差①のあったラインの東側に接する位置にある。SK89もSK86のほぼ真上にあつて、下層遺構が影響していると思われる。段

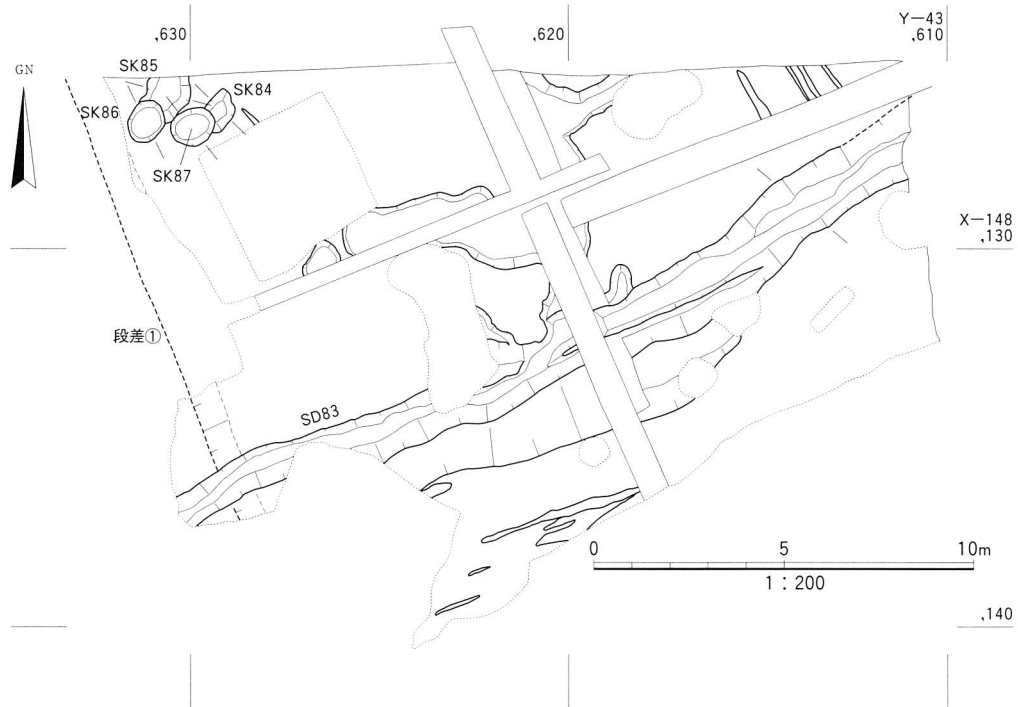


図42 西調査区平安時代の遺構平面図(2)

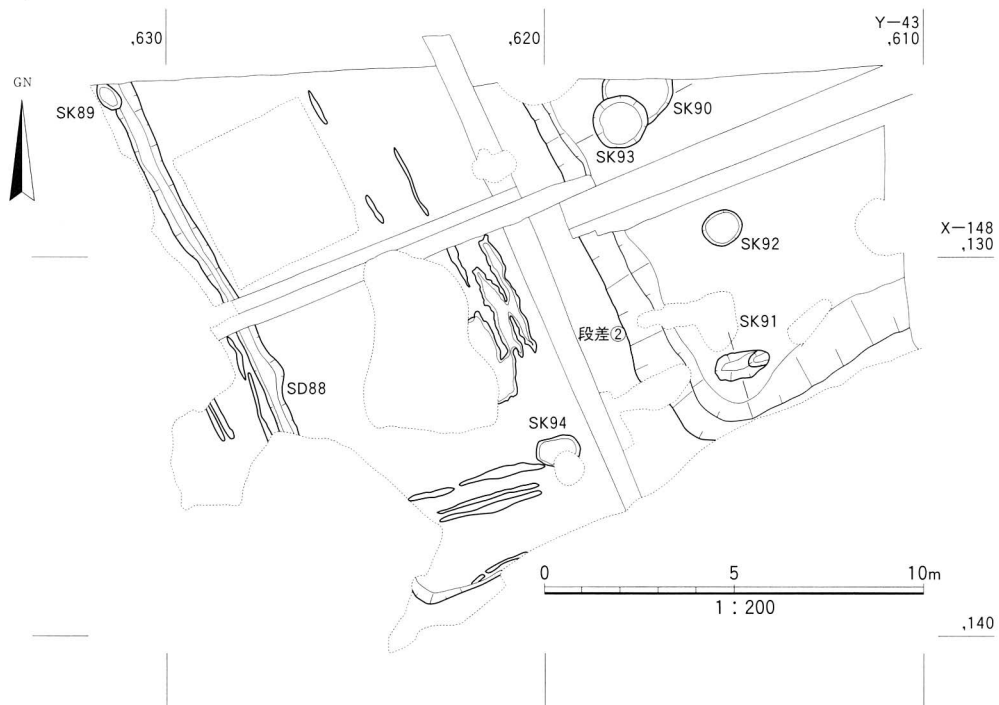


図43 西調査区鎌倉・室町時代の遺構平面図(1)

差2は谷内の南北セクションの東1mにあり、谷の南側斜面部に突き当たったところで、直角に折れ曲っている。約0.5mの高低差がある。

第4b-3層上面にはSK90～92がある。いずれも砂・礫を主体とする水成層により埋没する。SK90は直径2.0m、SK92は直径1.1mで円形を呈するが、SK91は谷筋方向に細長く、底中央が一段深く窪む。前2者は段差②の裾に設けられた水溜と思われるが、後者は激しい水流による浸食痕であろう。

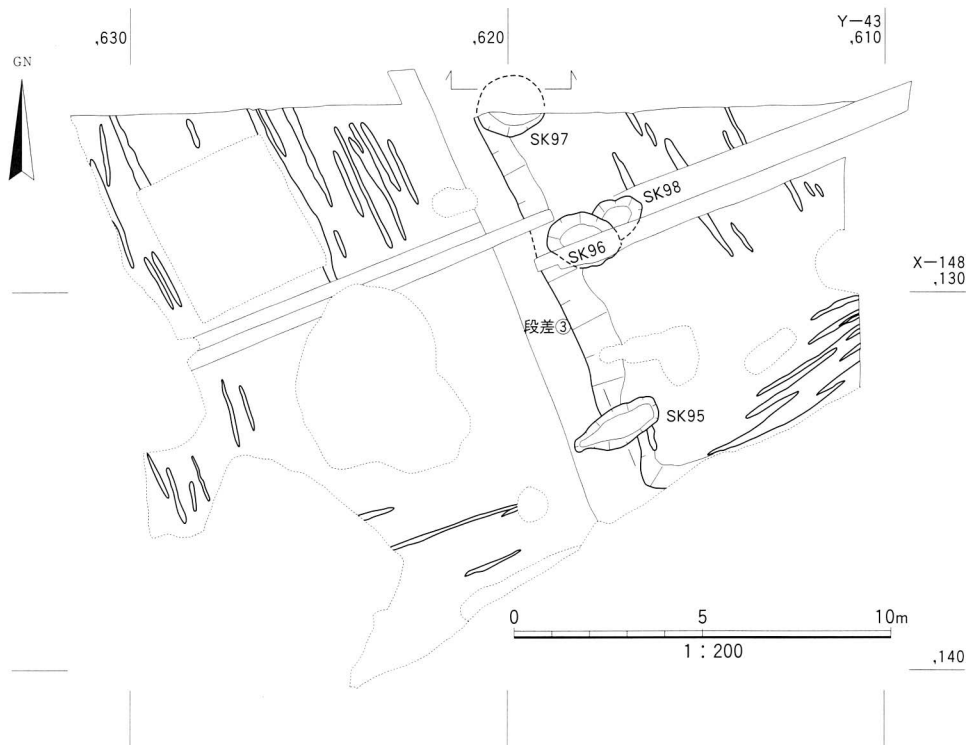


図44 西調査区鎌倉・室町時代の遺構平面図(2)

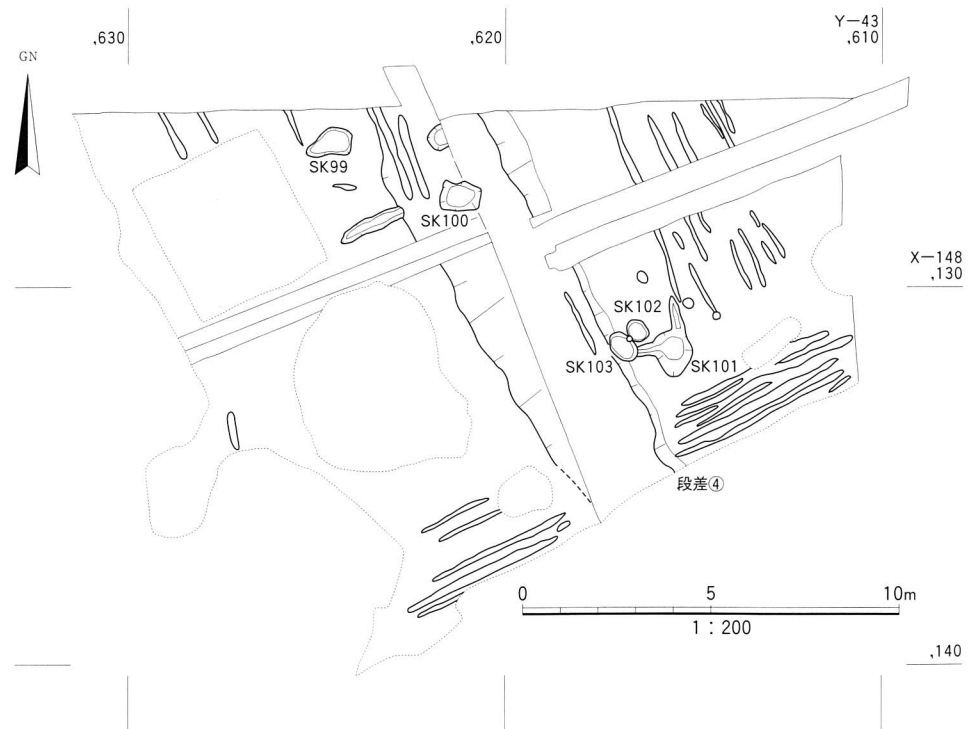


図45 西調査区鎌倉・室町時代の遺構平面図(3)

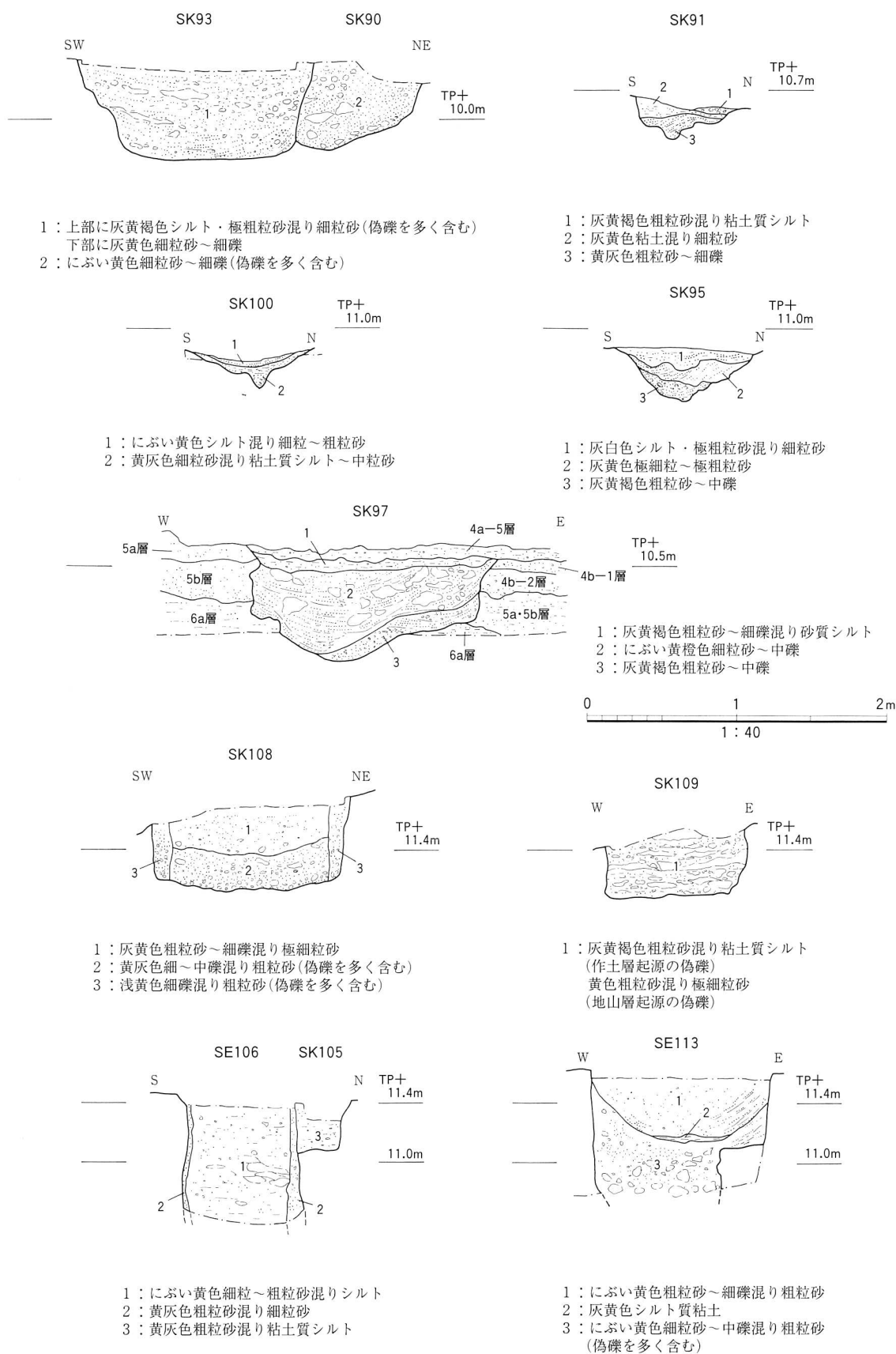


図46 西調査区平安～江戸時代の遺構断面図



写真3 段裾に掘られた水溜(大阪府柏原市青谷)

SK91から飛鳥時代後半の単弁蓮華文軒丸瓦251が出土した。単弁をやや隆起させ、ペン先のような子葉をもっている。外縁は風化しているが、複数の圈線が巡っていたようである。

第4b-2層上面にはSK93・94がある。SK93はSK90に一部重複する場所にあり、直径1.50m、深さ0.64mある。この遺構も偽礫を多く含んだ水成の砂礫層によって埋る。

ii) 第4b-1層上面および下面

(図44・46・47、図版18)

第4b-1層下面には段差④の少し西寄りの位置に段差③が設けられる。約0.2mの高低差がある。この段差に平行または直交する方向を採って小溝群も見られる。そして、第4b-1層上面には段差③に伴う水溜と考えられるSK96~98がある。これらは長軸長1.5~2.0mの規模をもつ。同じく本層上面のSK95は谷筋方向に細長い土壇で、横断面もV字形となる。これは先に記述したSK91と同様に水流による侵食痕であろう。

SK95から瓦質土器244が出土している。甕あるいは壺の口縁部であろう。

iii) 第4a-4層上面、第4a-5層上面および下面
(図45・46、図版18)

第4a-5層下面には段差④があり、0.6mほどの高低差をもっている。第4a-5層上面のSK99・100は、V字形を呈すその断面形から水流による侵食痕である。第4a-4層上面に検出されたSK101~103は段差④の裾付近に掘られている。

6) 江戸時代の遺構と遺物

i) 第3a層下面、第3b層上面、第3c層下面、第4a-1層上面、地山層上面(図46~49、図版19)

地山層や第4a-1層の上面で検出されたが、埋土や包含する遺物から第3層に係わると判断される遺構がいくつかある。溝ではSD114・115、井戸では

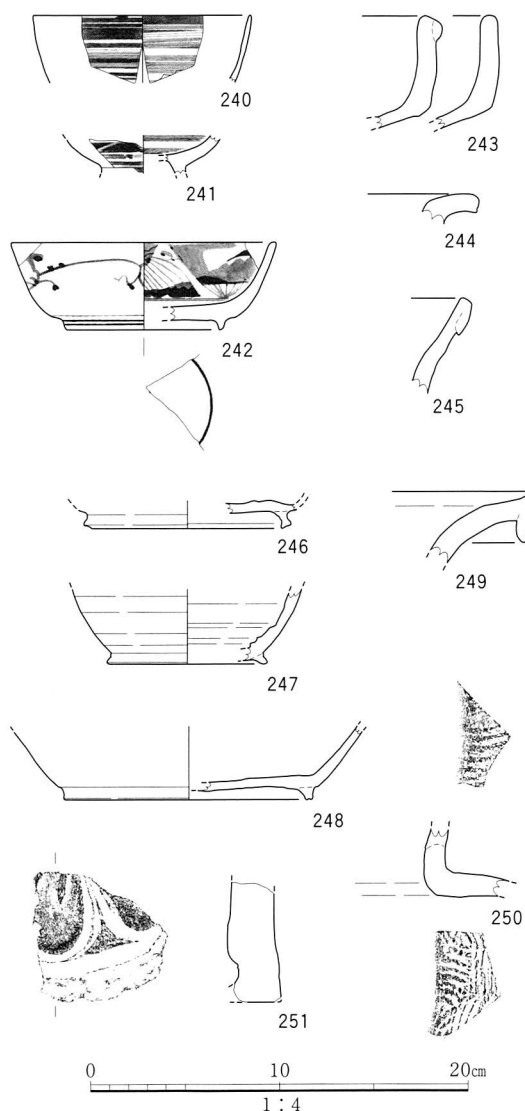


図47 西調査区古代~近世の遺構出土遺物

SD83(247~250)、SK85(245)、SK87(246)、SK91(251)、SK95(244)、SK119(241・240)、SD114(242・243)

SE106・107・113、土壌ではSK104・105・108～112である。SD114は五合谷の南肩に沿った溝で、横断面がV字形に掘られている。SE106には井戸側の痕跡があったが、SE113は素掘りであった。SK104の埋土は大きく2つに分かれ、上半が人為的な埋立て、下半部が水成の粘土～シルト質粘土となる。SK108には内部になんらかの枠が存在していたことが断面観察からうかがえた。SK105・109・112は人為的に埋戻されていたが、SK110は水成層の粗粒砂～細礫層と粘土質シルト層が互層になっていた。

第3c層下面には段差⑤があり、それに伴う斜面部に、段の肩に平行した小溝が数条見られた。段は1.0mほどの高低差をもつ。その他にもSD116・117などの耕作溝がある。

第3b層上面にはSE118、第3a層上面にはSK119、SD120があった。SK119は4.30×4.10mの方形土壌で、深さが1.95mある。埋土の最下部には水平方向のラミナのある暗オリーブ灰色極細粒砂が0.15mほどの厚さで堆積していた。水溜として設けられたものであろう。

SK119からは肥前系陶器刷毛目茶碗240・241が出土している。18世紀代のものであろう。

SD114からは肥前系磁器染付皿242・焙烙243が出土している。242は外面に唐草文、内面に扇文を描いている。243は直に立上がる体部をもつ。口縁端部の外面の一部に突帯が巡る。ともに18世紀代

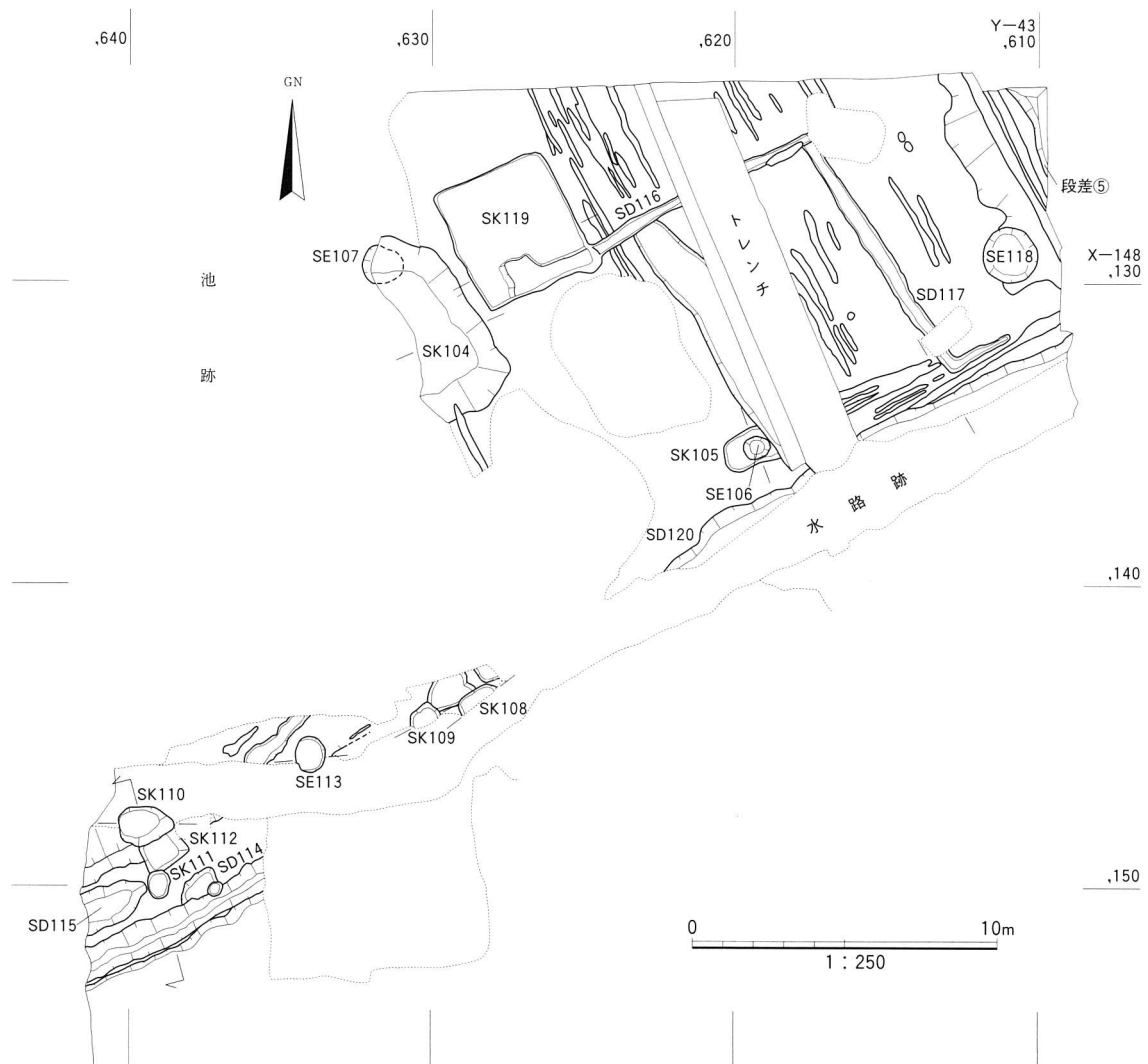
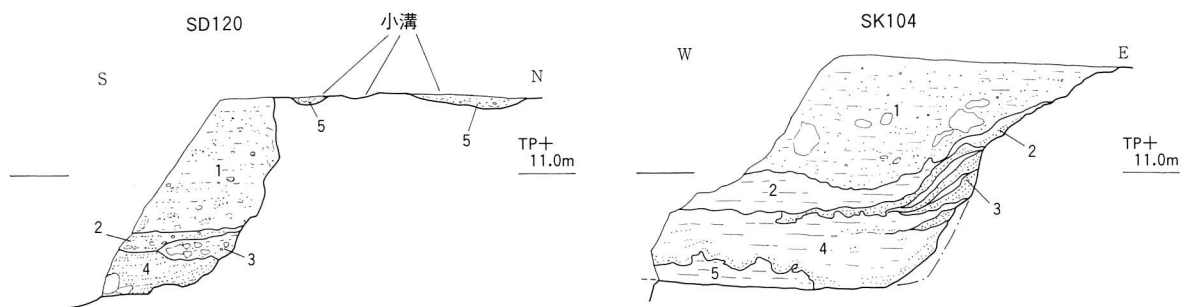
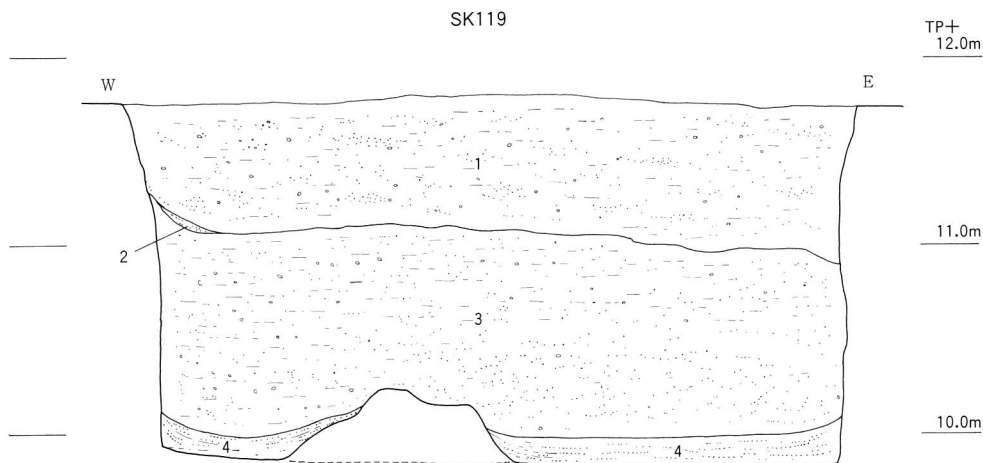


図48 西調査区江戸時代の遺構平面図(1)

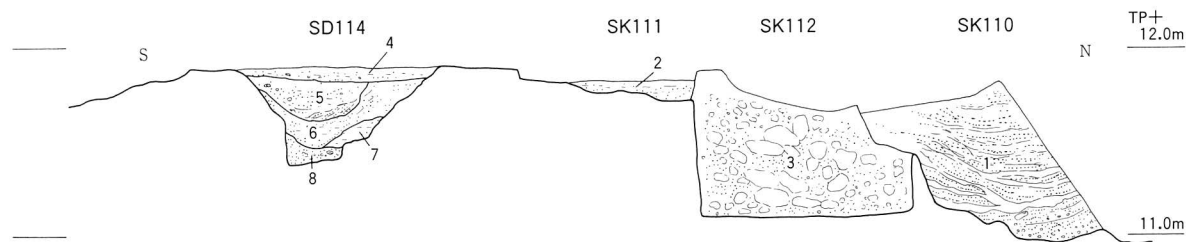


- 1: 灰黄褐色粗粒砂～中礫混り砂質シルト
 2: にぶい黄褐色細粒砂
 3: にぶい黄褐色粘土質シルト(偽礫を多く含む)
 4: 灰黄色中粒～極粗粒砂
 5: 灰黄褐色粗粒～極粗粒砂混り砂質シルト

- 1: 灰黄褐色粗粒砂～細礫混り砂質シルト
 2: 灰黄褐色～灰色シルト質粘土
 3: オリーブ灰色シルト混り粗粒砂
 4: 灰色粘土(下部に粗粒砂混る)
 5: 暗青灰色粘土



- 1: 灰黄色中粒砂～中礫混り砂質シルト
 2: 灰白色極細粒砂
 3: 灰色～灰オリーブ色中粒砂～中礫混りシルト
 4: 暗オリーブ灰色極細粒砂



- 1: にぶい黄色粗粒砂～細礫と黄灰色粘土質シルトが互層になる
 2: 暗灰黄色粗粒砂混り粘土質シルト
 3: 黄褐色細粒～粗粒砂(黄灰色粘土の偽礫を多く含む)
 4: にぶい黄褐色粗粒砂～中礫混り細粒砂
 5: 上部に黄褐色粗粒砂～中礫混りシルト、下部に浅黄色細粒砂
 6: 黄灰色粗粒砂～細礫混りシルト～細粒砂
 7: 褐灰色粘土質シルト
 8: 褐灰色中礫混り細粒～粗粒砂

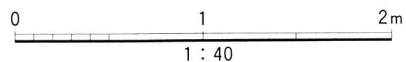


図49 西調査区江戸時代の遺構断面図

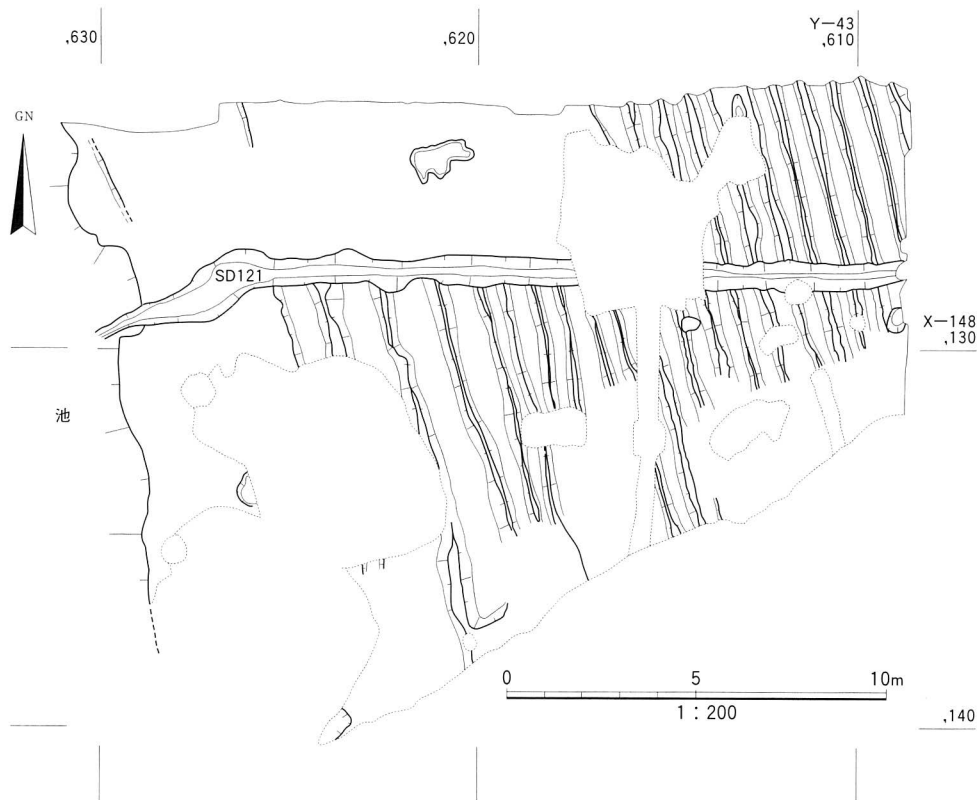


図50 西調査区江戸時代の遺構平面図(2)

のものである。

ii) 第2層下面および上面(図50・52、図版20・21)

第2層の下面には畝の畝間溝が多数存在した。また、同層の上面には谷部西側に大規模な池が築かれる。この池に続くSD121は正東西に掘られた溝で、深さが0.4mほどある。素掘り溝であるが、この五合谷の範囲内に始めて登場した正方位方向を採る遺構として注目される。

7) 各地層出土の遺物(図51、図版30・33)

第3b層から17世紀の青花小杯269が出土した。口縁部付近の小片である。耕作地であったため、第3a層を含め陶磁器類の出土量は少ない。

第4a-1層～4a-5層からは中国製白磁碗264、同青磁碗265・271・272、瓦質土器羽釜267、東播系須恵器播鉢270が出土した。青磁碗271・272の見込みには菊花文と思われるスタンプがある。白磁や青磁は13～14世紀代のものであるが、第4a-4層から出土した羽釜267は16世紀前葉頃のものである。

第4b-1層～4b-3層からは須恵器円面硯263、青磁碗266、瓦質土器鉢268が出土した。青磁碗266は体部外面に鎬蓮弁文が明瞭で、13～14世紀代のものといえる[上田秀夫1982]。瓦質土器鉢268は12世紀のものであろう。

第5a層から須恵器鉢252が出土した。口縁端部がわずかに肥厚している。10世紀代のものであろう。

第7a層からは土馬頭部253、須恵器杯A 254が出土した。土馬の頭部は角柱状の粘土塊に耳を付け、

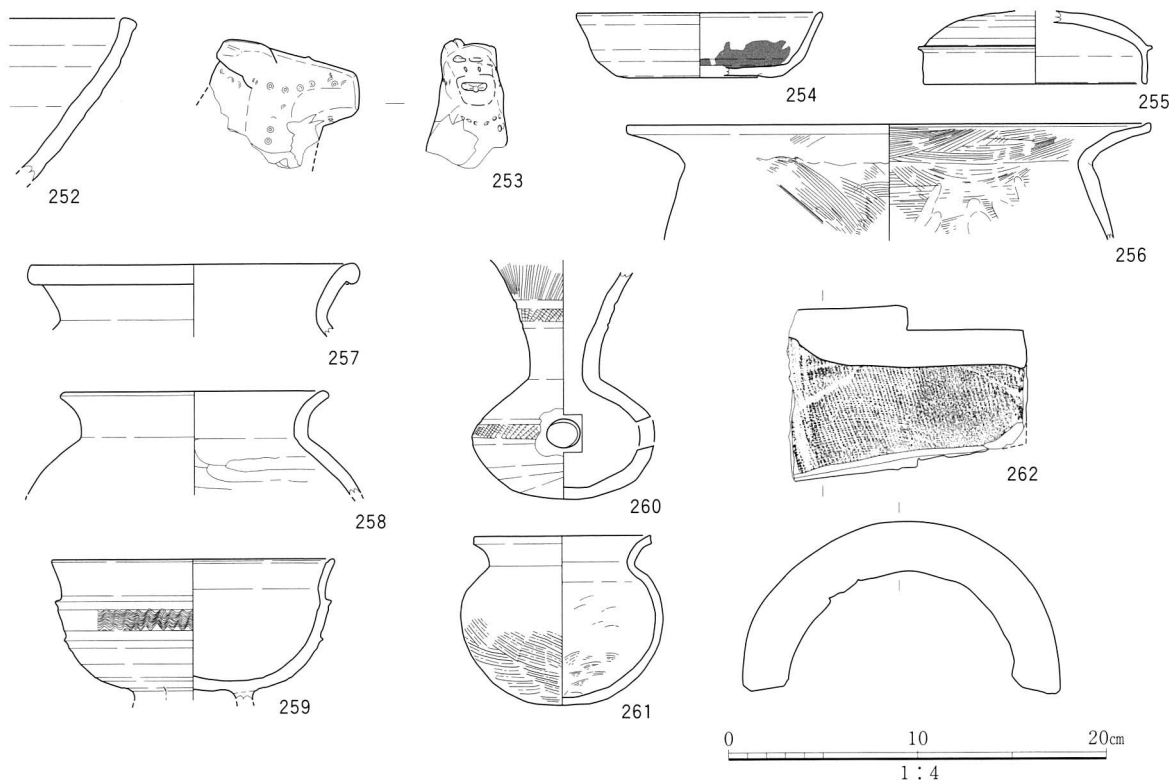


図51 西調査区各地層出土の遺物

第5a層(252)、第7a層(253・254)、第8a層(256・257)、第8b層(255・258～260・262)、第9a層(261)

目・口・鼻をヘラ先による刺突により表現している。また、竹管状工具の刺突痕を連ねて面繋を表している。杯Aの内面には漆が一部に付着する。

第8a層からは口縁部を玉縁状にした須恵器壺257、土師器甕256が見つかり、第8b層からは須恵器杯H蓋255・無蓋高杯259、甕260、土師器甕258、丸瓦262が出土した。第8b層中の古墳時代中期(255・259)・後期(260)の資料が注意されるが、丸瓦262は飛鳥時代後半のものである。丸瓦の玉縁は長さが6.0cmあり、凹面の布目はこの部分にも及んでいる。玉縁部分を本体の凹面側に入れ込んで接合している。焼成は良好で灰白色をしている。

第9a層からは須恵器壺261が出土した。口径9.2cm、器高9.0cmある。底体部には外面に平行タタキメ、内面に同心円文がかすかに残る。

(櫻井)

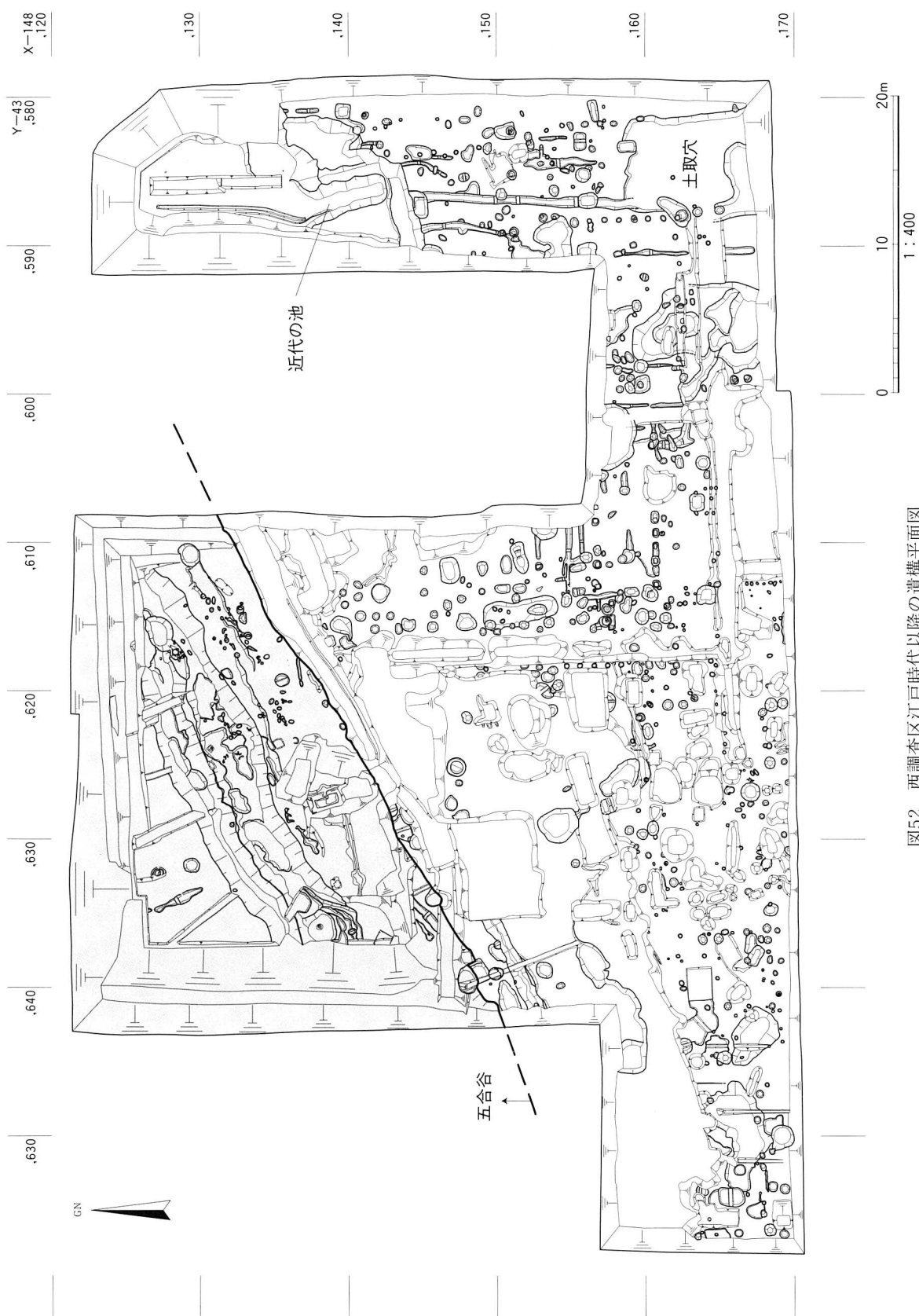


図52 西調査区江戸時代以降の遺構平面図

第Ⅳ章 まとめ

今回の調査で明らかになった点は以下のとおりで、時代ごとに述べる。

1) 五合谷

五合谷は『大阪実測図』などからもその存在を予測することができたが、西調査区でその底～南肩を、東調査区ではその支谷とみられる南北方向の谷を検出した(図53)。調査地の北側をほぼ東北東―西南西に延び、玉造筋の西側に開口するものとみられる。谷の内部には古墳時代以降、江戸時代に至る時代の遺構・遺物が残されており、その土地利用形態の変遷が次項以下のとおり把握できた。弥生時代以前にさかのぼる発見はなく、周辺にその時代の生活圏がなかったか、堆積物が流出したか、あるいは削平されたものとみられる。

2) 古墳時代

東調査区では、5世紀中葉に五合谷支谷の比較的浅い谷頭部分を埋立てていた。上面は削平されており、整地の目的は不明であった。5世紀の後半には、流水によってできた溝(SD56)から多量の土器が出土した。谷頭部分で流水に係わる祭祀が行われたものとみられる。

西調査区では、6世紀に五合谷の谷底に沿ってSD71が掘削された。同様の溝はこの後、奈良時代まで約200年間にわたって存在した。その目的は明確にできなかったが、前期難波宮西方官衙に確認された谷筋内の石組導水施設[大阪市文化財協会2000]のように、谷頭に貯水施設があり、そこからの導水を目的としたものなのかもしれない。このほか、古墳時代の遺構・遺物は5～6世紀を通じて見られるが、谷の中の遺構には居住に係る遺構はなく、これらは祭祀や廃棄に係わるものとみられる。

3) 飛鳥時代

東調査区では支谷の中にSA54が設けられた。SD05-1・06-1調査の掘立柱建物群と同様に、谷の中も居住地として利用されていたとみられる。しかし、その後すぐに谷の埋立てが行われ、谷の半ばまでが埋立てられていた。

一方、西調査区では谷筋に7世紀中頃のSD73、7世紀後半のSD75が掘削されていた。いずれも埋土には水が流れた痕跡があった。谷を埋立てた痕跡は発見されていない。

4) 奈良時代

東調査区では谷の中をさらに埋立てていた。上面が削平されているので定かではないが、この時期に支谷が平地化された可能性がある。

西調査区ではやはり谷筋にSD80が掘削され、平城宮土器Ⅴの時期に埋没する。谷筋の溝は埋没す

るたびに掘直して維持されてきたがSD80を最後に深い溝は掘削されなくなる。溝の埋没後、谷の地形はなだらかにはなったが、やはり起伏は残っていた。

SD96-1・97-1次調査の結果から、本調査地付近に7～8世紀の「百済尼寺」が存在したことが推定されていた。今回の調査では、地山上面が削平を受けていたため、直接寺院に係わる遺構は確認できなかった。西調査区のSD80などから同時期の遺物が多量に出土し、大型の須恵器壺219・221・222・杯209などは同寺に関連する資料とも考えられるが、SD96-1・97-1調査に比べて木簡や墨書土器、瓦など寺院に関連する遺物は少なかった。こうした状況は、寺院の中心から遠ざかった感を与える。「尼寺」所在地については次章で再度述べる。

5) 平安～江戸時代

8世紀末頃、五合谷内は一転、耕作地として利用されるようになる。谷筋に直交する方向に段差を設けて雛壇状に造成し、段の下裾には水溜用の土壙が設けられた。谷部に流れ込む雨水によって運ばれた土砂で谷は徐々に埋り、段差の切り直しが行われた。こうした状況が平安時代から江戸時代まで1000年ほど継続し、少なくとも5回の段差の造り替えが行われていることが確認できた。

江戸時代18世紀後半以降は、土取穴と井戸がさかんに掘られた。土取穴は壁土の採取用とみられ、井戸は周辺の耕地の灌漑用であろう。これらの遺構は大都市近郊の産業に係わる風景を彷彿させている。また、谷の西部に大規模な池が造られ、それが埋った後、ようやく正方位を採る溝が五合谷の範囲内に見られるようになった。

(高橋・櫻井)

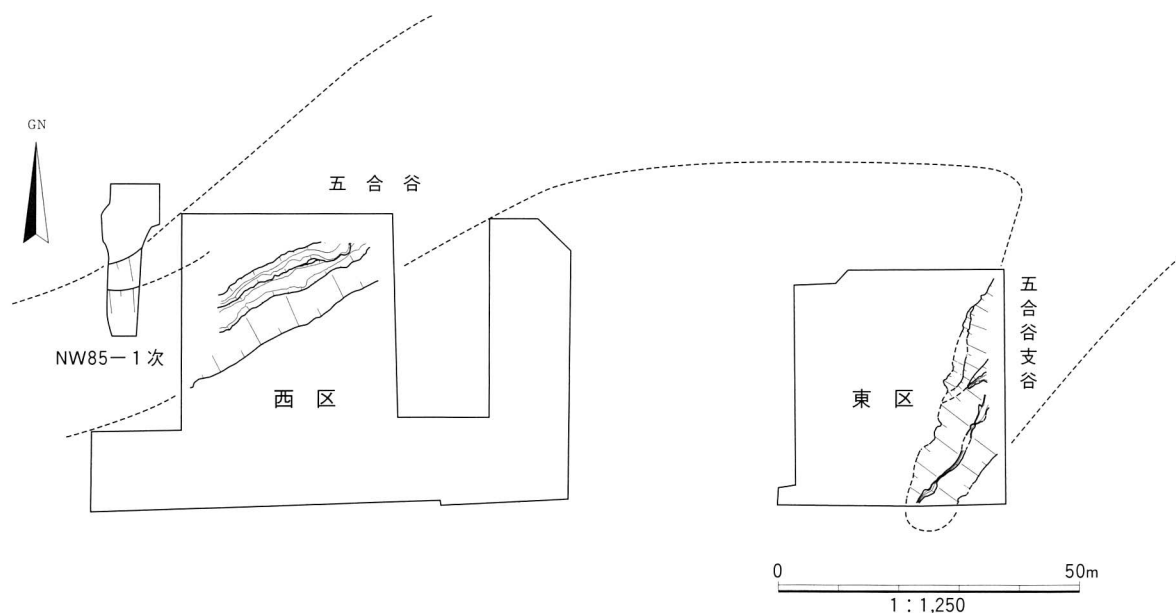


図53 五合谷復元図

第V章 調査成果の検討

細工谷遺跡周辺の古代における谷の開発について

今回の発掘調査では東・西調査区ともに自然地形の谷が検出され、それが埋没してゆく過程が観察された。これは谷を平地に造成して活用しようとした古代人の行為を反映したものである。上町台地北部の旧地形の復元と、前期難波宮成立期に行われた同様の開発行為については、すでに寺井誠が論じている[寺井誠2004]。また、難波京域内に当り、中心大路の朱雀大路に隣接するとされる今回の調査地においては、当然、造成工事の目的は大路の敷設や「百済尼寺」などの寺院を包摂した京域の都市計画と深く係わっていたに違いない。

そこで、本稿では発掘調査や地形図、現況の踏査の所見をもとに細工谷遺跡周辺に埋没する谷を復元し、次に、谷に関する開発の状況やその時期を明らかにしてみたい。さらにそれらの所見から、難波京朱雀大路や百済尼寺の所在地など、難波京の整備に関する問題について言及してみたい。

1) 埋没谷の復元

細工谷遺跡の周辺で、発掘調査・試掘調査の成果と『大阪市地形図』(1:2500、大阪市総合計画局1974年測量)から埋没谷を復元したのが図55である(註1)。近鉄奈良線以北は、『仮製地形図』(1:20000、1885・1886年測量)の等高線(図54)や『大阪実測図』(1:5000、1886年作成)からの所見も混えて復元している。大阪赤十字病院以南は、地山が深く埋没し、近世より古い地層の堆積が確認された地点の分布から谷の範囲を類推したものであ



図54 上町台地東縁の谷

る。なお、この地域は現地形での起伏も激しいことから、地表面からの減値によって復元等高線を描くことがためらわれたので、等高線入りの地形復元図の態をとっていないが、谷以外の地形は上町台地東縁の尾根とみてよい。

味原谷 半島状に東へ張り出した真田山の南に接し、現在の味原交差点付近に開口する谷である。味原町から味原本町にかけて北西方向に台地に入込むが、途中で北と南西に分岐して続く。江戸から明治時代の古地図に見られる味原池はこの谷を締め切って造った人工の灌漑池と考えられる。

鍵手状に屈曲して南西に続く部分で行われた試掘調査では現地地表下-240cm(以下現地地表下を省略)まで掘削しても地山層が検出されておらず(NS90-7・98-10など)、そこから約200m北の試掘調査(NS94-2)での地山の埋没深度は-250cm以下である。一方、屈曲部南側で行われたNS04-2次調査[大阪市教育局・大阪市文化財協会2005f]では、わずか-10cmで地山が検出されている。

五合谷 今回調査の西調査区のほかに、NW85-1次調査[大阪市教育局・大阪市文化財協会1987]では北の肩を検出している。西調査区付近での幅は約22m、深さ約4mである(図8・53)。谷筋は本調査地と赤十字病院の間の東西道路にほぼ沿い、玉造筋の西側に開口するのが現地形からもわかる。谷頭は、本調査地の西側で-220cmまで地山が下がる地点がある(NS93-13・97-19次試掘調査)ことから、難波宮中軸線の名残とされる都市計画道路森の宮勝山線の西に達する可能性がある。東調査区で検出した南北方向の谷は五合谷から南へ派生する支谷である。

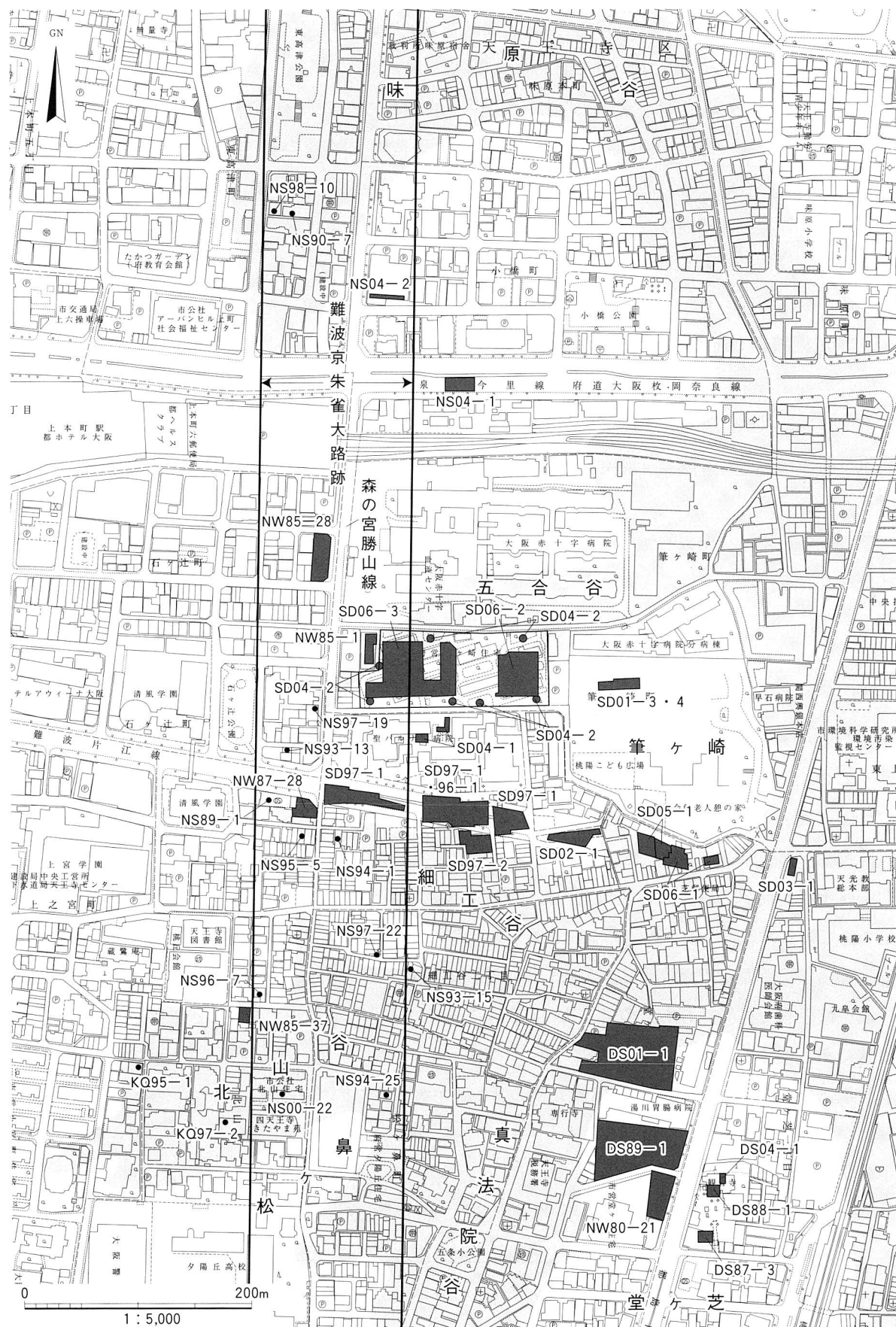
細工谷 現在の細工谷二丁目で、五合谷の南にある筆ヶ崎の突出部の南を画する谷である。西北西方向に入込み、その範囲は、『大阪実測図』でより明らかである。「百済尼寺」関連の墨書土器や木簡・和同開珎の枝銭が出土したSD96-1・97-1次調査や、奈良時代を中心とする掘立柱建物群が発見されたSD05-1・06-1次調査地はこの谷の北斜面に立地している。また、SD02-1次調査地の東方には北西に延びる小支谷があり、枝銭が出土したSD96-1次調査のSD501も小支谷の底を流れた溝であろう。

谷奥には西北西方向に-150~-230cm掘削しても地山が検出されない地点(NS89-1・94-1・95-5次試掘調査)が続き、谷頭は狭く深い溝状になっているものとみられる。谷の北で、筆ヶ崎の尾根筋の南側を蛇行しながら下る道は、寛政9(1797)年や、文久3(1863)年の古地図上でも辿ることができ、古くからの交通路であった。

北山谷 細工谷の南を画する小さな突出部の南にある谷で、現在の北山町を西南西方向に入込む。『大阪実測図』に見える、細工谷の南でほぼ真西に入込む谷を捉えたものであろう。小突出部の先端付近では、地山が-10~-180cmと南に急激に下がる地点(NS93-15次試掘調査)があるのは、この谷の北斜面を捕捉したものである。傾斜は急で、約10mで1.7m以上も下がっている。一方、北西にほど近いNS97-22次試掘調査では、地表下数cmで地山が確認されている。

NW85-37次調査[大阪市文化財協会1986a]では、北東に下がる地山の落ちが検出され、最深部では-220cmで地山が検出され、さらに深くなっている。北側のNS96-7次試掘調査では-25cmで地山が検出されているので、北西方向に入込む小支谷の存在が考えられる。

夕陽ヶ丘高校の北方での地山の埋没深度は、NS00-22次試掘調査で-280cm以下、KQ97-2次



試掘調査で同-170cm以下、KQ95-1次試掘調査で現地表下-200cm以下などとなっている。北山谷の南に尾根筋が張り出しているのが松ヶ鼻(現松ヶ鼻町)である。

真法院谷 『大阪実測図』を見ると北山谷の南は、南南西方向に延び、真法院町から四天王寺東門の東に至る長大な谷である。開口部は現細工谷交差点(玉造筋)の東なので、巨視的にみれば先の細工谷や北山谷はこの谷の支谷である。地図上での谷頭は四天王寺東門付近であるが、やはり江戸時代の古地図に記された毘沙門池はこの谷の谷頭を締め切ったものである可能性が高い。このばあい、谷は東門付近ではほぼ真北に折れ、小宮町辺りが谷頭であろう。

現勝山町方面から真法院町を北東に進む道はこの谷のほぼ中心部に当たるとみられ、道沿いのNS89-14次試掘調査で地山の埋没深度は-215cm以下、同じくNS92-24次試掘調査で-265cmである。また、この道を東にはずれたNS99-2次試掘調査では-200cmで地山が検出されている。江戸期の古地図には、真法院谷の中を四天王寺方面から細工谷方面へ延びる道が描かれており、細工谷で先述の筆ヶ崎南側の道と合流している。『大阪実測図』に見える「下ノ大道」の小字名はこの道を指したものであろう。

この谷の東側は、比較的低平な丘陵地になっており、そこには、北に堂ヶ芝廃寺、南に摂津国分寺跡があり、寺院関連遺構の実態は未だ把握されていないが、多量の古代瓦を出土することで知られている。

2) 谷の開発とその時期

これらの谷に関係する本格的な発掘調査は少ないが、難波京朱雀大路跡に係わってこれらを縦断するかたちで試掘調査が多数行われている。これらの谷の中には谷を埋立てた際の盛土層が見つかり、その年代が知れるものもある。以下、谷ごとにそれらを紹介する。

味原谷 現東高津公園の東に当たるNS94-2次試掘調査では、-180cm~-265cmまで江戸時代後期の盛土層が発見されている。付近のNS94-4次試掘調査でも、-100cmで江戸時代の盛土層が発見されている。このほか、近代になってようやく埋立てが行われたことを示す地点も複数ある(註2)。このように谷を埋立てた時期はおおむね江戸時代後期以降であるが、味原池造成の際に周囲を掘削して池を拡張した可能性もあるので、この高低差をそのまま古代の地形にまでさかのぼらせることには慎重であるべきである。

五合谷 NW85-1次調査では8世紀代の盛土層があったことが報告されている。出土した土器は、暗文が省略される、もしくは疎らとなり、外面にヘラケズリ調整を施す土師器からみて8世紀でも後半のものであろう。

本調査西調査区では、古墳時代後期~奈良時代にかけて谷筋沿いに掘削された溝が検出された。溝には流水の痕跡があり、埋没しかかると掘削し直されていた。谷を埋立てた盛土層は発見されていない。したがって、西調査区についていえば谷を一気に埋立てて平地を造成するといった大規模な開発はなかったと考えてよい。

東調査区では、古墳時代中期(第11層)と飛鳥時代(第8層上部)・奈良時代(第7層)に盛土が認めら

れた。古墳時代中期には谷頭部分のみではあるがほぼ谷は平地化され、同様に奈良時代にも谷を完全に埋めるような造成が行われたとみられる。飛鳥時代には谷は残っていたが、掘立柱建物が建設されて居住に係わる土地利用がなされていた。

この谷では、古墳時代から奈良時代にかけて、谷を埋立てる開発が行われたが、それは浅い支谷部分に限られ、谷本体全部を埋めるような開発は行われていない。

細工谷 開口部に近いSD05-1・06-1次調査地で、下位から、7世紀後半の盛土・7世紀末～8世紀初頭の盛土・平安時代の水田に覆われる盛土が見つかり、上位と下位の盛土層上面で掘立柱建物や溝などが発見された。この期間、雛壇を造成するなど、盛土による地形の改変が行われたとみられる。ただし、こうした造成が谷全体に及んでいたかは、谷の中心部での調査例がないために不明で、丘陵に近い部分だけで行われた可能性も十分にある。建物は傾斜地もしくは傾斜変換点近くに建てられているからか、その主軸方向は正方位をとらず、自然地形に強く規制されている。

北山谷 北肩に当るNW85-37次調査では、北東へ下がる地山の落ちが奈良時代の遺物を含む盛土で埋められていた。盛土の途中と上面で2面の遺構面が発見されているが、いずれも8世紀中葉(平城宮土器Ⅲ)に属していた。遺構には正方位をとる小規模な溝があった。

同じく谷の北肩にあたるNS93-15次試掘調査では、急激な落込み内に、奈良時代の須恵器・土師器と多量の布目瓦を包含する地層が堆積していた。試掘報告に盛土であるという所見はないが、これだけ分厚い単一層準は盛土層と考えてよからう。

南肩に近いNS94-25次試掘調査では、-70cmで地山層が検出されたが、その上には約20cmの厚さで盛土層が遺存し、7ないし8世紀の土師器が出土している。

このように北山谷では奈良時代に大規模な埋立てによる造成が行われたとみられる。詳細な時期が知れるものは少ないが、NW85-37次調査出土のものは平城宮土器Ⅲとされており、8世紀中葉以降に造成が行われたものとみてよい。

真法院谷 NS89-14次試掘調査では表土直下で8～9世紀の土師器・須恵器片や瓦器・肥前磁器片を含む遺物包含層と遺構が発見されている。この下は厚さ170cm以上の一括整地層で、包含層の遺物からみて盛土層の年代は奈良時代以前である。

NS92-2・99-24次試掘調査では中世の地層の下に厚さ80～140cmの盛土層が検出されている。

以上から、真法院谷では奈良時代以前に大規模な埋立てによる造成が行われたとみられ、地山偽礫を用いて強固な整地をした例も見つかっている。

3) 難波京朱雀大路の問題

難波京朱雀大路は難波宮中軸線の南延長上に想定されている大路である。岸俊男氏が『大阪実測図』から、四天王寺東方に中軸線に東辺が一致する方形区画(1辺265m=藤原京の1坊)の連続が存在するとした説[岸俊男1970]がおもな根拠となっているが、大路の存在を積極的に支持する道路側溝などの考古学的発見はまだない。しかし、難波宮を南へ約9.5km隔たった大和川・今池遺跡で、宮中軸線をはさんで、道路側溝とされる2条の溝が発見され、[大和川・今池遺跡調査会1981・大阪府教育

委員会1995]宮外にも直線道路が延びていたものと考えられた。このことから、宮と大和川・今池遺跡の間に京の中心道路としての朱雀大路が存在することが想定されているといつてよいであろう。京の中心大路の有無やその成立時期は、冒頭にも述べたように京域整備の根幹に係わる問題であり、朱雀大路の研究はその意味で重要である。

今回調査を行った細工谷遺跡周辺は朱雀大路が想定される地域にあたり、今回の西調査区やSD97-1次調査などは大路推定地内で調査が行われたが、後世の削平により道路関連遺構の有無は確認できていない。そこで、長距離の直線道路を敷設するのは整地などによってある程度地形の起伏を克服した後でなければ不可能であるという前提に立ち、前項で行った周辺の埋没谷の復元と谷に対する開発の時期から、現在想定されている位置に大路を敷設することが地形的条件からみて可能であったかを考え、間接的に大路の存否について考えてみたい。

まず、孝徳朝・天武朝の難波宮の段階に朱雀大路があったかどうかである。この時期については、天武8(679)年の「難波に羅城を築く」や、同12(683)年の複都制に伴う宅地の班給などがあり、京域の整備は進行していたものと考えられている。しかし、細工谷遺跡周辺の谷の造成がこの段階では小規模なもので、谷の起伏は依然激しいままで残っていたということからみて、これらの地形をまたいで直線道路が敷設されことはなかったと考えられよう。また、東調査区のSA54やNW85-1次調査のSA1が正方位をとらないことも、この現在想定される中軸線に則った都市計画が及んでいなかったことの証左である。

次に、大和川・今池遺跡の難波大道の側溝とされる遺構との関係である。溝の年代は出土土器から7世紀末～8世紀初頭とされている。これが難波大道の側溝で、なおかつ朱雀大路と一連のものであるとすれば、朱雀大路の敷設のために、この時期には細工谷遺跡周辺の谷の造成は終わっていたはずである。しかし、北山谷で谷に大規模な埋立てがされたのは8世紀の中葉をさかのぼることはなく、この段階では各所に急峻な地形が残っていたはずで、やはり朱雀大路が敷設される条件は整っていなかったと考えられるのである。

最後に、聖武朝の後期難波宮の段階である。後期難波宮の造営については、神亀6(726)年に開始され、天平6(734)年の宅地班給開始をもって京域まで含めて完成したとするのが衆目の一致するところであろう。とすれば、難波京の中心大路である朱雀大路は遅くとも天平6(734)年までには完成していなければならない。ところが、先にも述べたように、北山谷の造成は平城宮Ⅲの時期(8世紀中葉)である。同型式の土器の実年代については未確定な要素があるものの、天平年間後半(740年前後)の木簡を伴うものもあり、造成が完成してから道路が敷設されることを併せ考えると、造成の年代が遅すぎるとみられるのである。また、西調査区のSD80は後期難波宮の重圈文軒丸瓦を含むことからその造営をさかのぼることはなく、宮完成の当時にはまだこの谷が整地されていなかったことを示している。

さらに、都市計画の施行において基幹となる道路が当然最初に整備されるであろうことを考えると、より矛盾が大きく感じられ、この地に朱雀大路が存在したことについて大きな疑問を抱かせるのである。朱雀大路が現在の想定線上に存在した直接的な証拠は依然としてなく、文献から知れる京域整

備の時期と、考古学的にみたこの地域における開発の時期にも齟齬がみられる。前述の前提に立てば、細工谷遺跡周辺の検討から、現在の想定線上に朱雀大路が敷設された可能性は低くなったと考えられるのである。

その一方で、文献の記載に対応するように京域の整備が進んだことを示す考古学的資料は蓄積されてきている。それらは上町台地中心部のより高所に偏して分布しており、前期難波宮の時期については、宮城南門の南方で宮殿造営を期に従来からの建物が正方位に建て替えられており、これが官人などの居住地の造成に伴うものとする重要な指摘がなされている[積山洋2004]。また、後期難波宮の時期に関しては、四天王寺北方の上汐町地域で奈良時代の遺構の発見が相次いでいる。NW81-4次調査で「米家」と記した墨書土器を出土した井戸[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983]、US04-2次調査で製塩土器を含む溝や柱穴[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005d]、US06-1次調査で井戸を伴う掘立柱建物群[大阪市文化財協会2007b]、US07-2次調査で多量の土器が出土した水溜遺構[大阪市文化財協会2008]などがある。これらのうち建物や溝は正方位を採っており、なんらかの都市計画に則ったものであることが想像される。とすれば、都市計画の中軸となる中心大路が存在した蓋然性は高い。そして、それは現在想定される朱雀大路と違う位置、つまり上町台地のより高所で、難波宮中軸線と一連ではない軸を有して存在したのではないだろうか。

上記の仮説に立てば、今回の調査地や細工谷遺跡周辺で見られた8世紀の造成工事は、京域縁辺部の造成工事と位置づけることが可能で、台地高所の京域中心部に遅れて実施されても問題はないと思われるのである。

4)「百済尼寺」所在地の問題

本調査地の周辺には、百済寺と「百済尼寺」の存在が想定されている。いずれも百済からの渡来系氏族百済王氏の氏寺と考えられている。百済王氏と両寺院の関係は先行の報告書[大阪市文化財協会1999]に詳しいのでそちらを参照されたい。それによれば、いずれも7世紀後半には成立しており、百済寺の所在地については、現在の堂ヶ芝1丁目豊川閣観音寺付近(堂ヶ芝廃寺)とみられている。同地点周辺では白鳳期から平安期に至る瓦が発見されていることはこの説を補強している。

一方、「百済尼寺」については、SD96-1・97-1次調査地で「百済尼」や「尼寺」と記された墨書土器や木簡が出土したことから付近に「百済尼寺」が存在することが想定された。また、7世紀後半から8世紀の多くの遺物が出土した溝が調査地の北方に延びていたことから、北方の高所に「百済尼寺」の本体が存在したと考えた。この候補地はすなわちSD04-1次調査地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005b]および今回調査地の周辺である。

しかし、SD04-1次調査地と今回の調査地ではともに地山の削平が著しく、直接に寺院に関連する遺構の有無を確認することはできなかった。しかし、出土遺物をみるに、木簡は出土せず、古代の瓦や墨書土器などはSD96-1・97-1次調査に比してはるかに少量であり、明らかに寺院の中心から遠ざかった感がある。また、五合谷やその支谷が入込んでいることもわかり、伽藍を展開するのに十分な広い平坦な地形があったとも考えられないのである。結果として、「百済尼寺」所在地は本調査

地以外に求めるのが適当と思われるのである。ただし、寺院に関連する木簡や墨書土器が出土したSD96-1・97-1次調査地が寺院の周辺施設、あるいはその一部であることはまちがいないであろうから、ここからさほど遠くはないはずである。李陽浩氏はその候補地を今回調査地の想定朱雀大路を挟んだ西側の高所に求める[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005b]。または、SD96-1・97-1・05-1・06-1次調査地を周辺施設と考えたばあい、藤澤一夫氏も述べるように[藤澤一夫1999]、その北に隣接する半島状に突出した筆ヶ崎の尾根の先端部(本調査地の東、旧桃山市民病院)もまた立地的に適当と思われるのである。しかし、当該地ではSD01-3・4次調査が行われ、敷地の大半が削平を被っていることが判明し、直接に寺院関連の遺構を把握することはできていない。

いずれにせよ、上記候補地がどちらかが正しいとすれば、「百済尼寺」と百済寺は真法院谷の開口部をはさんで南北に立地し、これを見下ろす位置関係となる。この開口部は、四天王寺方面から真法院谷内を通して北上する道と筆ヶ崎の南側を上町台地から下ってくる道の交差点に当る。これらの道が古代にも用いられていたかは不明であるが、前述したように真法院町で古代の遺構が発見されていることや、宝暦11(1761)年に無文銀錢100枚が出土したという記録[菅谷文則1991]があることを考えるとその可能性は高い(註3)。とすれば、この地点は西の京域や南の四天王寺に通じる交通の要衝と捉えることが可能で、古代都市が展開した上町台地の玄関口のひとつと位置づけることが可能なのではないだろうか。そこに百済寺・「百済尼寺」を並べ建てたことには、政治的な意図をも読み取れるのではないかと考えるのである。

註)

- (1)以下に復元した谷の名称は、『大阪実測図』の小字名をとっている(味原池・五合谷・真法院)。北山谷は小字名「北ノ山」があるが、おもに台地部分を指しているので、現在の町名でもっとも距離的に近い「北山」を援用した。
- (2)最終的に味原池が埋立てられるのは大正年間、毘沙門池は大正末期である[三善貞司1986]。
- (3)NS99-2次試掘調査結果によると、谷を埋めた盛土層の下に古代の遺物包含層が発見されている。真法院谷の道は、おそらく難波京の都市整備以前から存在し、江戸時代まで存続したものであろう。とすると、台地上の都市整備とは原理が異なる道路が残っていたことになる。条坊が敷かれたとしてもそれは台地の上だけで、縁辺部の地形が複雑に入り組んだ地域では、従来どおりの地形に規制された交通路が維持されたのではないだろうか。

引用・参考文献

- 石田茂作1936、「堂ヶ芝廃寺」：『飛鳥時代寺院址の研究』 財団法人聖徳太子奉賛会、pp.542-549
- 上田秀夫1982、「14～16世紀の青磁碗の分類について」：『貿易陶磁研究』No.2、日本貿易陶磁研究会、pp.55-70
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983、「難波宮跡(NW81-4次)発掘調査略報」：『昭和56年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.57-62
- 1987、「筆ヶ崎マンション建設工事に伴う難波京朱雀大路跡(NW85-1)発掘調査略報」：『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.49-56
- 2003、「堂ヶ芝2丁目所在遺跡発掘調査(DS01-1)報告書」：『平成13年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.43-47
- 2005a、「堂ヶ芝廃寺遺跡発掘調査(DS04-1)報告書」：『平成16年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.29-35
- 2005b、「細工谷遺跡発掘調査(SD04-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.161-169
- 2005c、「細工谷遺跡発掘調査(SD04-2)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.171-179
- 2005d、「上本町南遺跡発掘調査(US04-2次)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.203-210
- 2005e、「難波京朱雀大路跡発掘調査(NS04-1次)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.149-156
- 2005f、「難波京朱雀大路跡発掘調査(NS04-2次)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.157-160
- 大阪市文化財協会1981、『マンション建設工事に伴う堂ヶ芝廃寺址発掘調査(NW80-21)略報』
- 1986a、『殖産住宅(株)による集合住宅建設に伴う難波京朱雀大路跡発掘調査(NW85-37)略報』
- 1986b、『ライオンズマンション建設に伴う難波京朱雀大路跡発掘調査(NW85-28)略報』
- 1988a、『西村薬品産業(株)による建設工事に伴う堂ヶ芝廃寺発掘調査(DS87-3)略報』
- 1988b、『大和氏による建設工事による建設工事に伴う難波京朱雀大路跡発掘調査(NW87-28)略報』
- 1989、『観音寺本堂建て替えに伴う堂ヶ芝廃寺発掘調査(DS88-1)略報』
- 1990、『近畿財務局桃谷住宅新築工事に伴う堂ヶ芝廃寺発掘調査(DS89-1)略報』
- 1995、『難波宮址の研究』第十
- 1998、『大和団地(株)による住宅建設に伴う細工谷遺跡確認調査(SD97-2)報告書』
- 1999、『細工谷遺跡発掘調査報告』I
- 2000、『難波宮址の研究』第十一
- 2003a、「細工谷遺跡の調査」：『大阪市内埋蔵文化財発掘調査報告—2001・2002年度—』、pp.17-19
- 2003b、『計画道路難波片江線の整備に伴う細工谷発掘調査(SD02-1)完了報告書』
- 2004a、『平成15年度都市計画道路難波片江線の整備に伴う細工谷発掘調査(SD03-1)完了報告書』

- 2004b、「第5節遺物」：『広島藩大坂蔵屋敷跡』Ⅱ、pp.113-242
- 2007a、『平成17・18年度都市計画道路難波片江線の整備に伴う細工谷遺跡発掘調査(SD05-1・06-1)完了報告書』
- 2007b、『昭和住宅株式会社による建設工事に伴う上本町南遺跡発掘調査(US06-1)報告書』
- 2008、『カナセ興産株式会社による建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH06-2)報告書』(作成中)
- 大阪府教育委員会1995、『大和川今池遺跡発掘調査概要』Ⅶ
- 岸俊男1970、「難波一大和古道略考」：『小葉田淳教授退官記念国史論集』 小葉田淳教授退官記念事業会、pp.81-92
- 京嶋寛1993、「古墳時代後半期の土器の変遷」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.269-276
- 古代の土器研究会1992、『都城の土器集成』Ⅰ
- 小山正忠・竹原秀雄1967、『新版 標準土色帳』 日本色研事業株式会社
- 菅谷文則1991、「松浦武四郎資料にみる天王寺付近出土の『無文銀銭』」：『大阪の歴史』32号 大阪市史編纂所、pp.71-77
- 積山洋2004、「孝徳朝の難波宮と造都構想」：塚田孝編『大阪における都市の発展と構造』 山川出版社、pp.41-63
- 田辺昭三1981、『須恵器大成』 角川書店
- 趙哲済1995、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.41-44
- 寺井誠2004、「難波宮成立期における土地開発」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十二、pp.161-170
- 原口正三・田中琢・田辺昭三・佐原真1962、『船橋遺跡の遺物の研究』Ⅱ 平安学園考古学クラブ
- 藤澤一夫1941、「摂河泉出土古瓦の研究―編年の様式分類の一試企―」：『仏教考古学論叢』第3輯、pp.237-307
- 1999、「難波鑄銭司及百済尼寺跡考」：大阪市教育委員会『大阪の歴史と文化財』第2号、pp.43-52
- 松本啓子2006、「細工谷につくられた謎の暗渠」：大阪市文化財情報『葦火』123号 大阪市文化財協会、pp.2-3
- 2007、「細工谷遺跡で新たに大型遺物を確認」：大阪市文化財情報『葦火』126号 大阪市文化財協会、pp.3-4
- 三善貞司1986、『大阪史蹟事典』 清文堂出版
- 大和川・今池遺跡調査会1981、『大和川・今池遺跡』Ⅲ

あ　と　が　き

早くから市街地化が進んだ大阪市の中心部では、広い面積を一度に調査することは年々困難になってきている。そのような状況の中、都市大阪の地形的背骨である上町台地で、近年、古代史上重要な遺跡のひとつとして浮かび上がってきた細工谷遺跡を、大規模かつ本格的に調査を行えたことは幸運であった。

この調査では、「百済尼寺」に関連する遺構や遺物こそ発見できなかったが、大阪に都が置かれた時期の都市開発を考えさせてくれる数多くの資料を得ることができた。本書にはこれらの資料とともに、遺跡周辺の当時の復元地形を掲載している。これらの検討によって具体的な課題も生じてきた。当時の幹線とされる難波京朱雀大路は直線道路として存在したか、という問題はそのひとつである。

今回の調査が契機となり、これまでの点的・線的な調査の成果が有機的に結びつくことによって、遺跡の実像に迫って行けるであろう。今後、より立体的な大阪の歴史が再構築されていくことを期待していただきたいし、そのために、大方の忌憚のないご意見をお待ちするしだいである。

(趙　哲済)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- | | |
|---|---|
| <p>T TK208…………… 18, 28, 29</p> <p>TK23…………… 28, 29</p> <p>TK47…………… 29</p> <p>TK10…………… 28</p> <p>TK209…………… 20, 21, 28</p> <p>TK217…………… 28</p> <p>あ 飛鳥Ⅰ…………… 20, 28</p> <p>飛鳥Ⅱ…………… 20, 22, 28, 29, 34</p> <p>飛鳥Ⅲ…………… 34</p> <p>え 円面硯…………… 29, 55</p> <p>か 瓦器碗…………… 13</p> <p>瓦質土器羽釜…………… 13, 55</p> <p>関西系陶器…………… 10, 22, 23, 27</p> <p>き 京信楽系陶器…………… 23, 27</p> <p>し 鎬蓮弁文…………… 55</p> <p>車輪文当て具…………… 38</p> <p>重圈文軒丸瓦…………… 15, 41, 66</p> <p>せ 製塩土器…………… 41, 67</p> <p>瀬戸美濃焼…………… 22</p> <p>た 単弁蓮華文軒丸瓦…………… 52</p> <p>ち 中国製青磁…………… 13</p> <p>中国製白磁…………… 55</p> | <p>と 陶質土器…………… 47, 48</p> <p>東播系播鉢…………… 13, 55</p> <p>土錘…………… 41</p> <p>土馬…………… 41, 55</p> <p>な 軟質施釉陶器…………… 23</p> <p>は 萩焼…………… 23</p> <p>ひ 肥前系磁器…………… 22, 23, 53</p> <p>ふ 船橋Ⅰ～Ⅱ期…………… 16, 28</p> <p>富本銭…………… 1, 8</p> <p>へ 平城宮土器Ⅱ…………… 36</p> <p>平城宮土器Ⅲ…………… 6, 65</p> <p>平城宮土器Ⅳ…………… 38</p> <p>平城宮土器Ⅴ…………… 38, 41, 59</p> <p>ほ 墨書（土器・瓦）…………… 1, 8, 34, 41, 47, 48, 60, 62, 67, 68</p> <p>掘立柱建物…………… 8, 11, 21, 59, 62, 65, 67</p> <p>ま 埋納土壙…………… 30</p> <p>勾玉…………… 16, 17</p> <p>む 無文銀銭…………… 68</p> <p>も 木簡…………… 1, 8, 60, 62, 66～68</p> <p>ら 螺旋状沈線…………… 47, 48</p> <p>わ 和同開珎…………… 1, 8, 15, 47, 48, 62</p> |
|---|---|

〈地名・遺跡名など〉

- | | |
|---|---|
| <p>あ 味原谷…………… 5, 62, 64</p> <p>き 北山谷…………… 62, 64～66, 68</p> <p>く 百済尼寺…………… 1, 8, 60～62, 67, 68</p> <p>百済王氏…………… 8, 67</p> <p>百済寺…………… 8, 67, 68</p> <p>こ 五合谷…………… 5, 6, 9, 10, 12, 15, 16, 30, 31, 35, 47, 48, 53, 55, 59, 60, 62, 64, 67, 68</p> | <p>さ 細工谷
（細工谷遺跡除く）…………… 5, 8, 62, 64, 65</p> <p>宰相山遺跡…………… 5</p> <p>し 四天王寺…………… 5, 64, 65, 67, 68</p> <p>下ノ大道…………… 64</p> <p>真法院谷…………… 64, 65, 68</p> <p>と 堂ヶ芝廃寺…………… 8, 64, 67</p> <p>な 難波大道…………… 66</p> <p>（難波京）朱雀大路跡…………… 1, 5, 6, 61, 64～68</p> <p>や 大和川・今池遺跡…………… 65, 66</p> |
|---|---|

**Archaeological Report
of the
Saikudani Site in Osaka, Japan**

Volume II

A Report of Excavation
Prior to the Development of the Fudegasaki Residential Flats
in 2006 and 2007

December 2007

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SA : Palisade or Fence

SB : Building

SD : Ditch

SE : Well

SK : Pit

SP : Posthole

SX : Other features

CONTENTS

Foreword

Explanatory note

Chapter I Historical background and progress of the investigation	1
S.1 Historical background of the investigation	1
S.2 Progress of the investigation and report making	3
1) Progress of the investigation	3
i) Eastern sector	3
ii) Western sector	3
2) Progress of report making	4
Chapter II Geographical setting and previous research at surrounding the site	5
S.1 Geographical setting of Saikudani site	5
S.2 Previous research at Saikudani site and surrounding area	6
Chapter III Research results	9
S.1 Stratigraphy	9
1) Stratigraphy of eastern sector	10
2) Stratigraphy of western sector	12
S.2 Features and remains of eastern sector	16
1) Features and remains of Kofun period and earlier	16
i) Valley	16
ii) Fill	17
iii) Ditch	17
2) Features and remains of Asuka period	20
i) Ditch	20
ii) Posthole type building	21
iii) Other features	22
3) Features and remains of Edo period and later	22
4) Remains of each stratum	27
5) Remains of Ancient and earlier period from Early Modern period features	28
i) Remains of Kofun period	28
ii) Remains of Asuka and Nara period	29
S.3 Features and remains of western sector	30
1) Features and remains of Kofun period and earlier	30
i) Ditch	30
ii) Other features	30
2) Features and remains of Asuka period	31
i) Ditch and Pit	31
3) Features and remains of Nara period	35
i) Pit	35
ii) Ditch	38

4) Features and remains of Heian period	47
i) Features discovered under the stratum 6a, and on the top of 6b	47
ii) Features discovered on the top of 5b, on the top of and inside 6a	47
5) Features and remains of Kamakura and Muromachi period	49
i) Features discovered on the top of stratum 4b-2, discovered under and on the top of 4b-3	49
ii) Features discovered on the top and under the stratum 4b-1	52
iii) Features discovered on the top of stratum 4a-4, discovered on the top and under the stratum 4a-5	52
6) Features and remains of Edo period	52
i) Features discovered under the stratum 3a, on the top of 3b, under the 3c, on the top of 4a-1, on the natural ground	52
ii) Features discovered under and on the top of stratum 2	55
7) Remains of each stratum	55
 Chapter IV Report conclusion	59
1) Gogo dani valley	59
2) Kofun period	59
3) Asuka period	59
4) Nara period	59
5) Heian to Edo period	60
 Chapter V Examination of research results	61
Exploitation of valleys at Saikudani site in Ancient period	61
1) Geographical reconstruction of buried valley	61
2) Exploitation of valley and its period	64
3) Naniwakyo Suzaku Ooji	65
4) Consideration on Kudara nunerry's location	67
 Bibliography	69
 Postscript and Index	
 English Contents and Summary	
 Reference card	

ENGLISH SUMMARY

Outline of research and its background

Saikudani site (細工谷遺跡) locates at Fudegasakicho in Tennoji ward, Osaka city, which have been important and famous because Wadokaichin (和同開珎) coins with sprue and pottery with ink inscription “Kudara ama (百濟尼)”, “Amadera (尼寺)” were discovered during the previous research in 1996, 1997. From these discoveries Kudara nunerry is considered to had been situated around the site, and metal production including coinage were presumed at this area, the site have been important for not only Osaka but Japanese anicient history.

In 2006, researches were carried out at immediate northern side of previous researched site prior to the construction of Apartment house. Investigation site was divided into 2 sectors, east and west, amount of excavation site was 3,860 square meters. From previous research features relating with Asuka (飛鳥時代, 7th C.) and Nara (奈良時代, 8th C.) period temple “Kudara nunnery (百濟尼寺)” had been presumed at investigation site, the main purpose of this research was detection of this ancient temple in that area.

Research results

In this research although the strata of ancient period had been disturbed during later phases, the old buried valleys were discovered, the history of land development and exploitation in this area was uncovered. Important points are summarized as follows.

1) Discovery of buried valley

The buried valley “Gogodani (五合谷)” and small branch valleys stretched from Gogodani were discovered. The valley was 17m wide and 4-5m deep, the strata sedimented from Kofun period until Edo period were found inside the valley. The research of these strata uncovered the historical changes of land exploitation and utilization of each period.

2) Kofun period(5th C.)

During the Kofun period branch valleys were filled with soil to develop the flat ground. But the archaeological feature was not discovered, the function or characters were not clarified. At Gogodani deep ditch was dug inside the valley, strata sedimented with a stream were discovered. The ditch is considered as channel stretched from reservoir at upper reaches.

3) Asuka and Nara period(7-8th C.)

In Asuka period, posthole type building was detected at the branch valleys, it was utilized as residential area. But the ground was raised with soil in Nara period to develop flat ground. At Gogodani the examination of remains and strata inside the ditch made it clear that the ditch had been functioned about 200years in Asuka to Nara period. And the traces of dredge work of ditch were detected. But during the end of Nara period the work stopped, the ditch was buried.

4) Heian to Edo period(9-19th C.)

During these periods Gogodani area was changed into cultivation area, the slope around the valley was developed as terraced fields. It had been continued about 1,000 years.

Examination on research results

Kudara nunnery (百濟尼寺) In this investigation site several buried valleys were de-

tected, and features and remains relating with temple were not discovered, ancient temple “Kudara nunerry” is thought to had been located at another area. From the geographical setting and current research results the temple would be situated at terrace at west side or tip of upland at east side. So future research will clarify the presence of the temple.

Naniwakyo Suzaku Ooji (難波京朱雀大路) At west side of investigation site Naniwakyo Suzaku Ooji, the main street of Naniwa Capital(難波京) stretched to south from the center of Naniwa Palace (難波宮), was presumed to had been situated. At this site the ditch inside the valley had been functioned during Asuka and Nara period about 200 years, the phases Naniwa palace was built and functioning, and valleys were not developed to construct the road at the site. Moreover, the examination of geographical setting around Saikudani site, there were several old buried valleys at surrounding area, they were not filled during those phases. The reconstructed geographical situation around the site was hilly, the location of Suzaku Ooji should be examined carefully.

So the results of this investigation area would be the crucial evidence for reconstruction for not only for Saikudani site but Naniwa Palace and Capital in Ancient period.

報 告 書 抄 録

ふりがな	さいくだにいせきはくつちょうさほうこく2							
書名	細工谷遺跡発掘調査報告Ⅱ							
編著者名	高橋工・櫻井久之・寺井誠							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL 06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2007年12月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
さいくだに 細工谷遺跡	おおさかしてんのうじく 大阪市天王寺区 ふでがき 筆ヶ崎	27126	—	34° 39′ 48″	135° 31′ 28″	20061204 ～ 20070428	3860m ²	集合住宅建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
細工谷遺跡	集落跡	古墳時代		溝・盛土遺構		土師器・須恵器		
		飛鳥時代		柵・溝		土師器・須恵器・墨書瓦		
		奈良時代		溝		土師器・須恵器・円面硯・重圈文軒丸瓦・和同開珎		
		平安時代		溝・土壇		土師器・須恵器		
		鎌倉時代		溝・土壇		瓦器・中国製青磁		
		室町時代		溝・土壇・井戸		瓦質土器・中国製青磁		
		江戸時代		井戸・土取穴・畠		国産陶磁器		
要約	<p>本報告書では大阪市天王寺区の細工谷遺跡で行われた発掘調査の成果を報告する。</p> <p>調査では小字名にその名残をもつ「五合谷」とその支谷が発見された。支谷の内部は古墳時代から古代にかけて埋め立てられ、居住や祭祀の場として利用されていた。五合谷本体には、古墳時代後期から奈良時代にかけて導水用の深い溝が掘削され、埋め立ては行われていなかった。溝内から古墳時代から奈良時代までの遺物が数多く出土した。</p> <p>本調査地は推定難波京朱雀大路に隣接し、百済王氏の氏寺である「百済尼寺」所在地の有力候補地であったが、谷が入り込む地形が発見されたことで、それらの所在地については再考を促すこととなった。</p>							

原 色 図 版



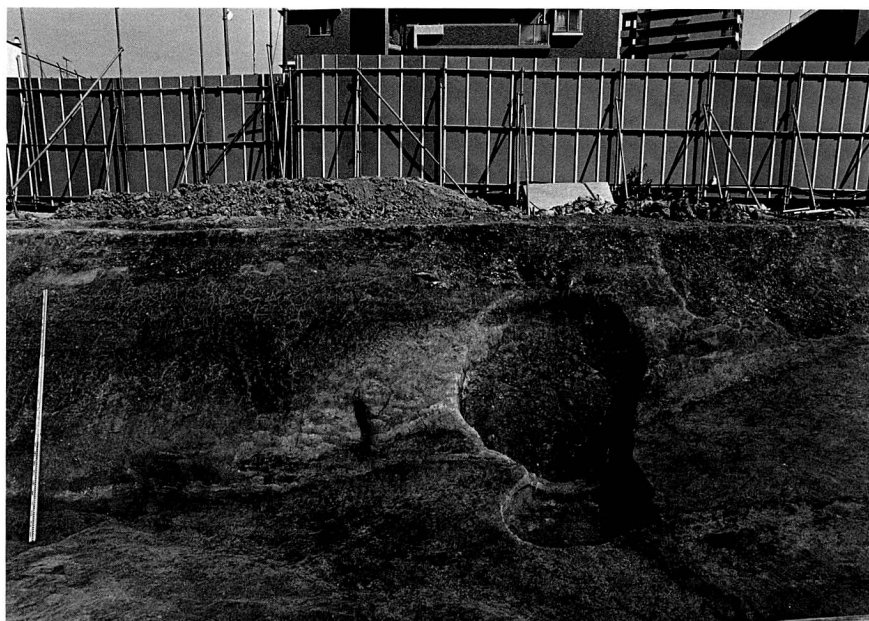
東調査区出土の古墳時代の土器



西調査区出土の飛鳥時代の土器

図 版

東壁地層断面
(谷南部)



東壁地層断面
(谷北部)



南壁地層断面
(谷頭付近)





五合谷支谷遠景
(北から)



五合谷支谷近景
(北から)



支谷内土器出土状況
(南東から)

溝群
(北東から)



谷頭盛土
(北東から)



SD56・63
(北東から)





SD56
(北東から)



SD56
(西から)



SD56
(南西から)

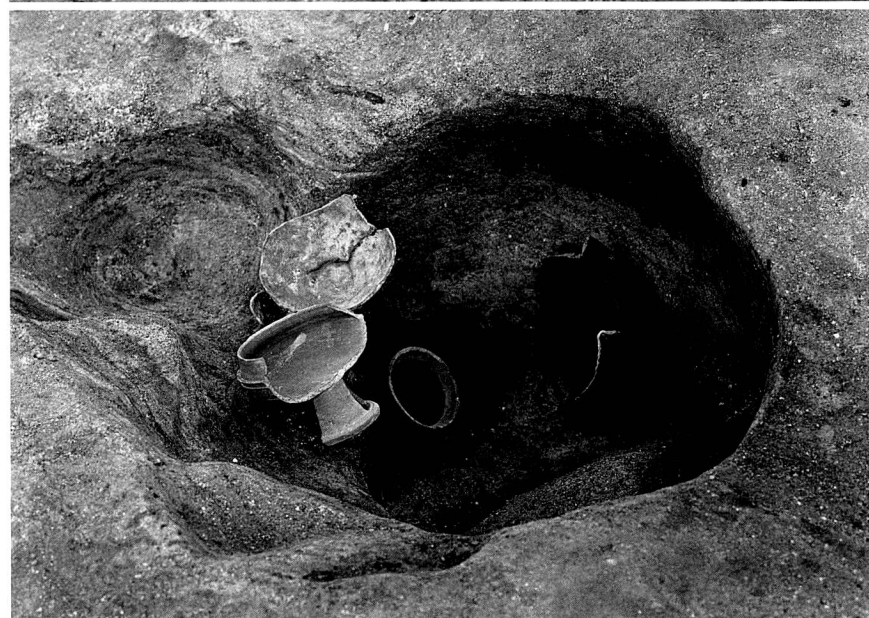
SD56
(西から)



SD56
(東から)



SD56
(西から)





五合谷支谷遠景
(北から)

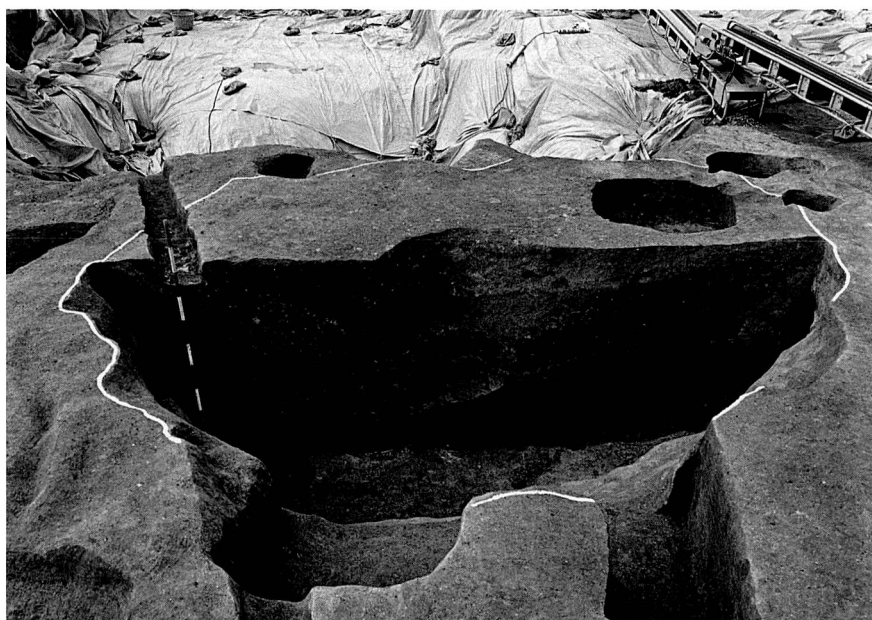


SA54
(北東から)



五合谷支谷地層断面
(北東から)

SE01
(東から)



SK48
(南から)



SK41遺物出土状況
(南東から)





SK35
(北から)



SK35断面
(北から)



SK28など
(南東から)

土取穴など
(西から)

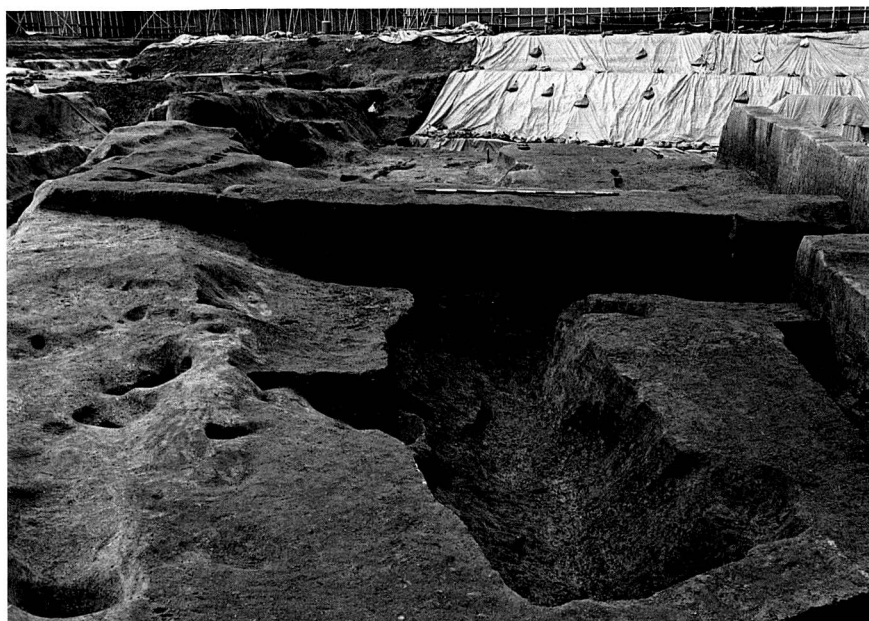


東調査区と細工谷遺跡
(北から)



調査地と細工谷遺跡
(北東から)





谷部南北地層断面
(東から)



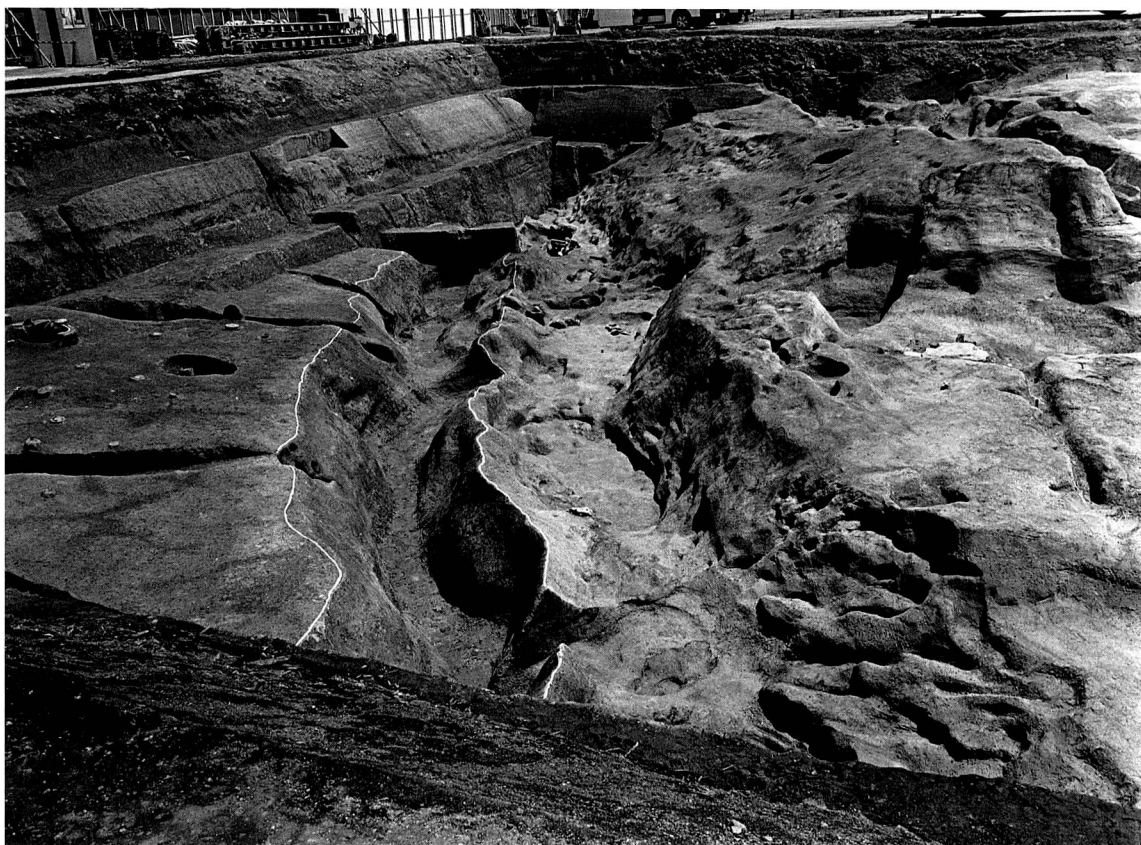
谷部東西地層断面
西部
(南から)



谷部東西地層断面
東部
(南から)



SD73・75完掘状況(北東から)



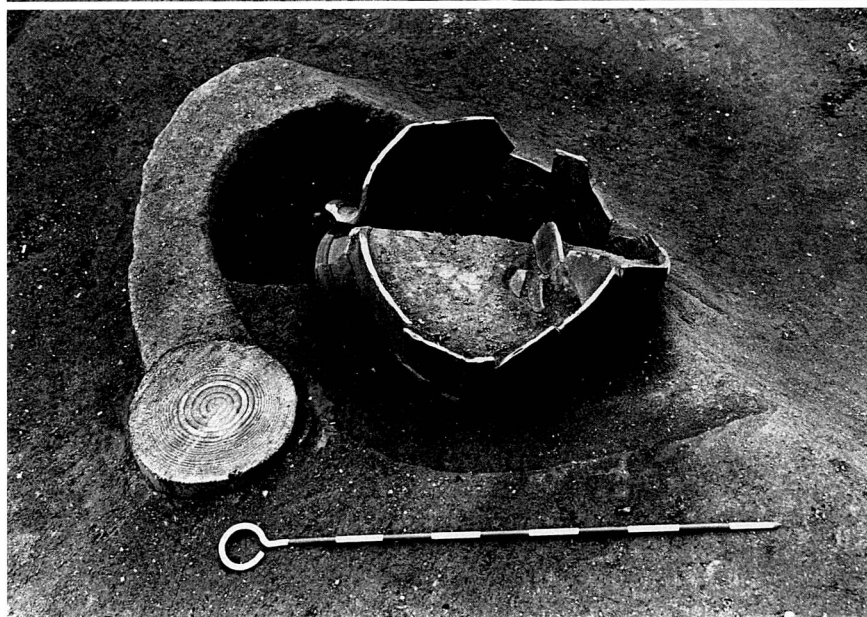
SD73・75完掘状況(西から)



SD71・73断面
(東から)



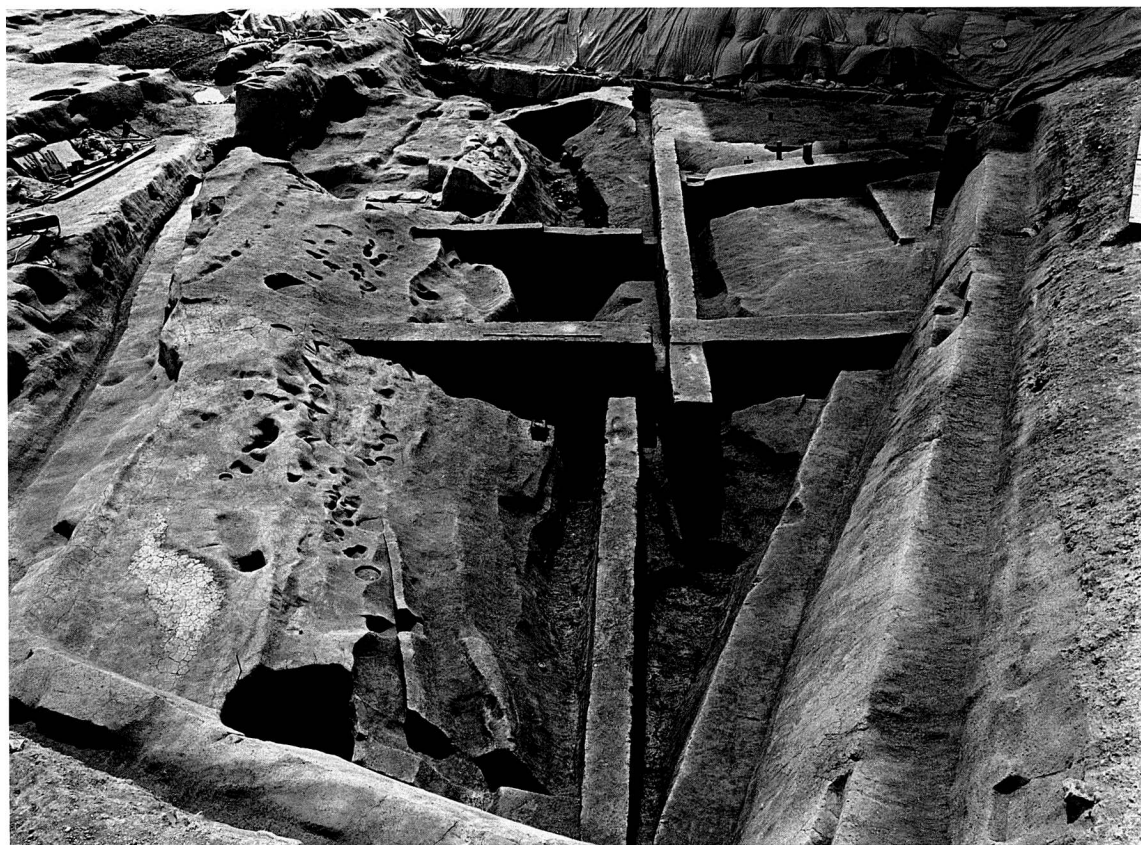
SD73遺物出土状況
(南西から)



SX72
(北東から)



SD75完掘状況（北東から）



SD80完掘状況（北東から）



SD75・80断面①
(東から)

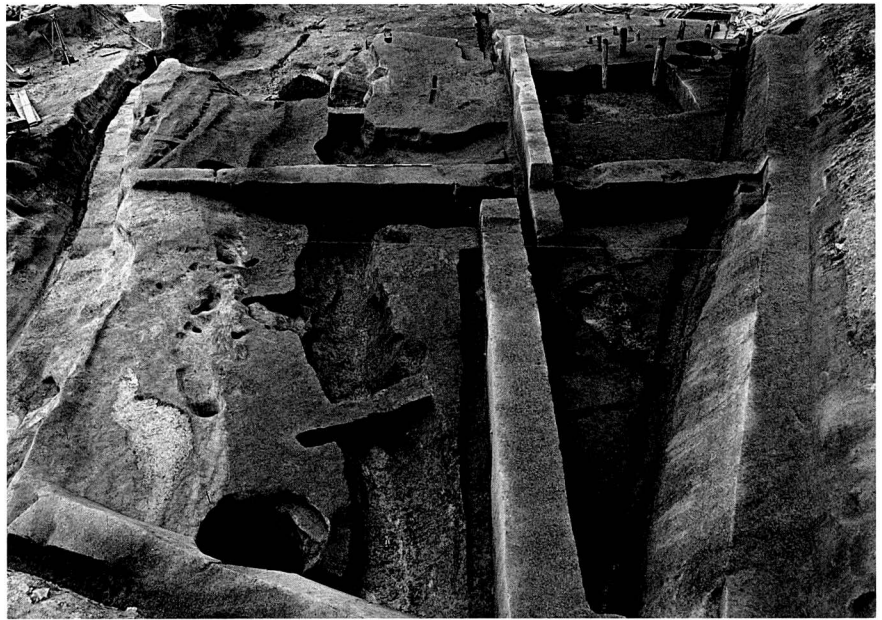


SD75・80断面②
(東から)

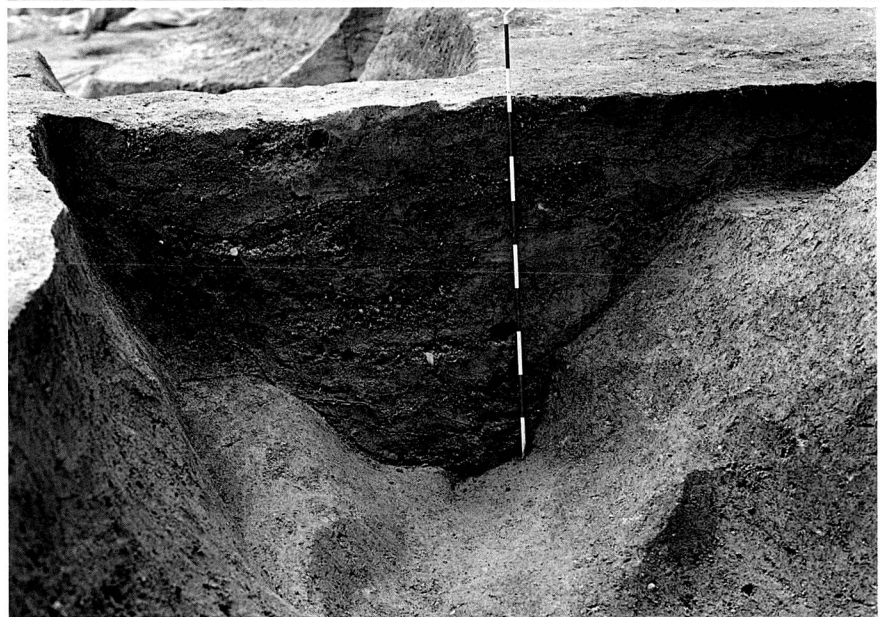


SK77～79
(南西から)

SD83完掘状況
(北東から)



SD83断面
(東から)



SK84・85
(北東から)





SK86・87
(北東から)



第4b-3層下面の遺構
(北東から)



第4b-3層下面の遺構
(東から)

第4b-2層下面の遺構
(北東から)



第4b-2層下面の遺構
(東から)



SK92
(東から)

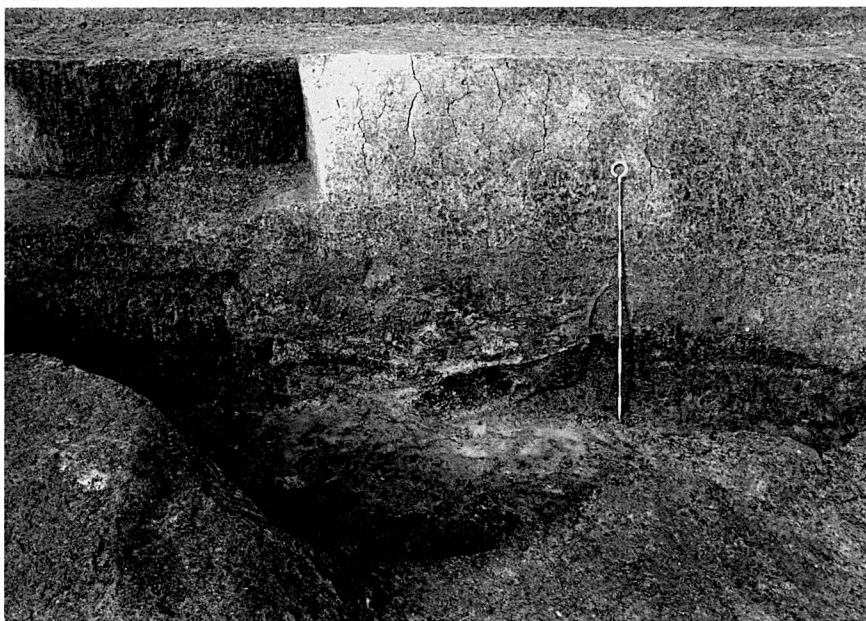




第4a-5層下面の遺構
(北東から)

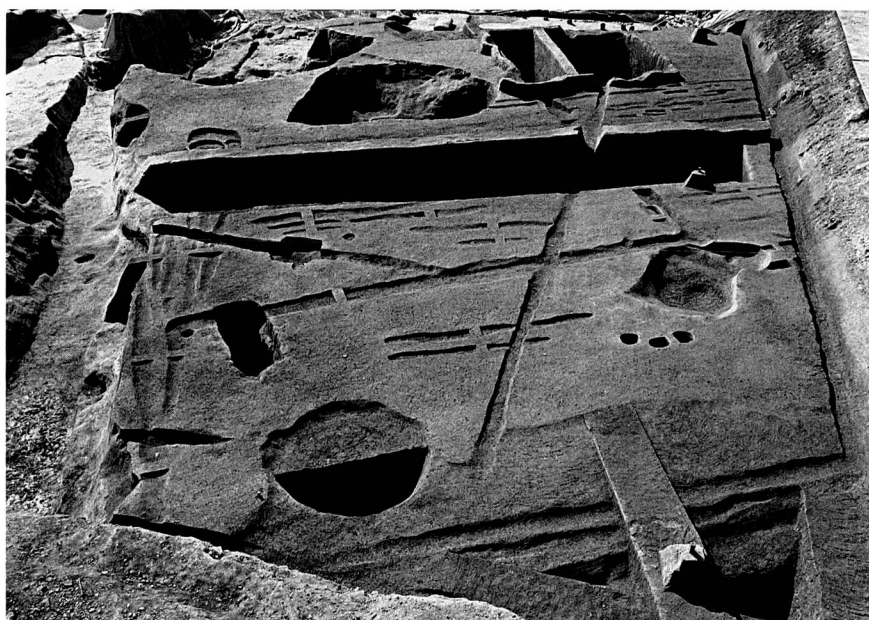


第4a-5層下面の遺構
(東から)



SK97
(南から)

第3層の遺構
(北東から)



SK119
(北から)



SD114周辺
(西から)





調査区全景
(北東から)



調査区東部
(北から)



調査区南辺
(東から)

調査区西部
(東から)



第2層下面溝群
(北東から)



第2層上面の池
(北から)

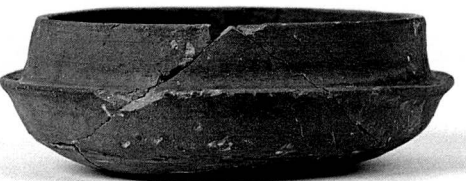




3



5



4



7



29



10



15



18



20



26



25



21



27



24



19



1



73



75



33



76



34



74



35



71



71

第12層上面(1)、SX57(33・34)、SD63(35)、第8層上・下部(71・73~76)



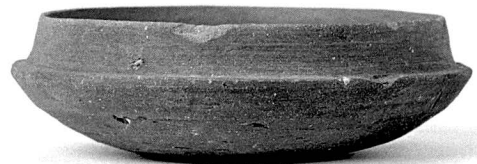
61



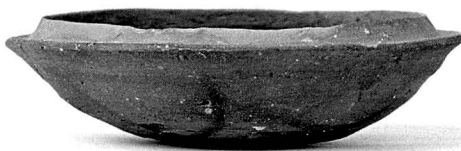
67



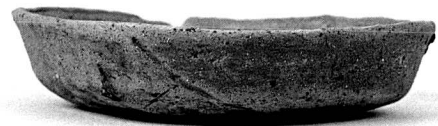
64



69



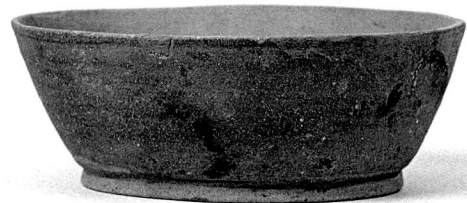
66



92



63



102



70



105



142



140



226



236



143



237



115



108



109



112

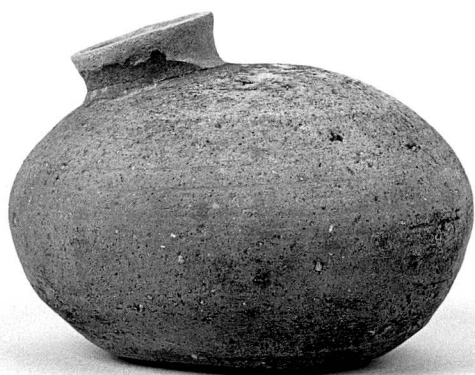


110



119

SD71(108)、SD73(110・112)、土器集中部(109・115・119)



118



116



117



114



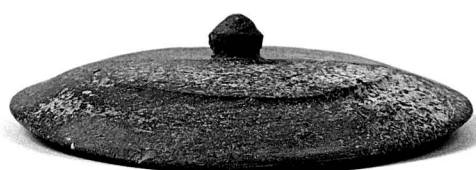
113



120



132



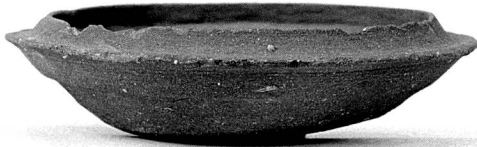
130



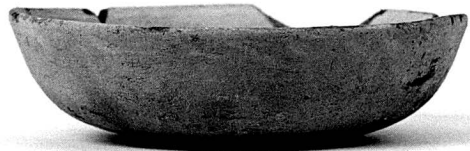
129



136



139



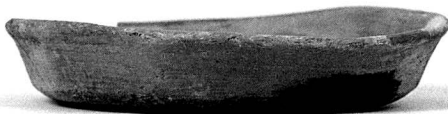
121



146



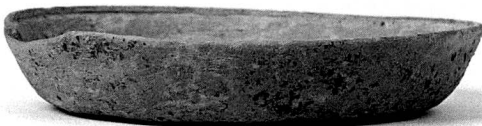
145



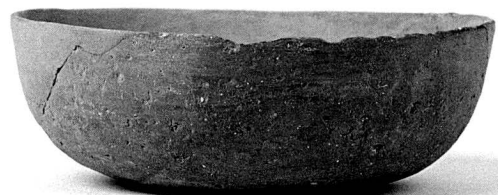
167



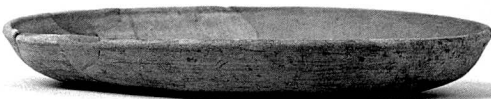
157



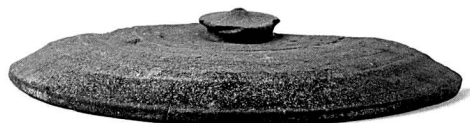
170



164



177

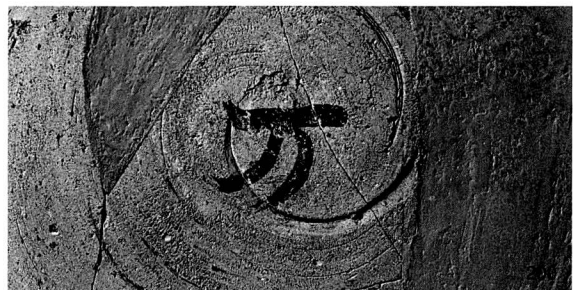


187

SD75(121・129・136・139・145・146)、SD80(157・164・167・170・177・187)



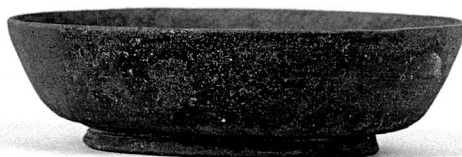
200



253



209



204



210



191



213



220



212



211



214



218



149



222



154



223



223



223



221



153



151



231

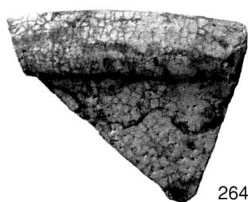


251

SD80(231)、SK91(251)



263



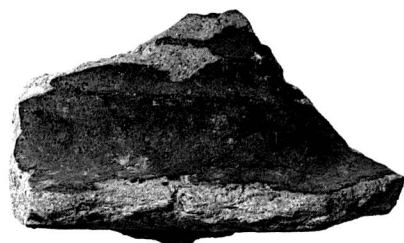
264



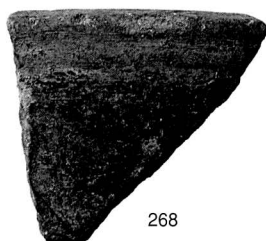
265



266



267



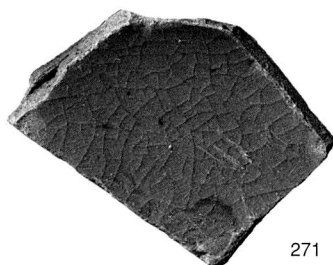
268



269



270



271



272

第3b層(269)、第4a層(264・265・267・270・271・272)、第4b層(263・266・268)



273

SD75出土ウマ下顎骨



274

SD75出土ウマ頭蓋骨

大阪市天王寺区 細工谷遺跡発掘調査報告Ⅱ

ISBN 978-4-86305-002-0

2007年12月27日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法門坂 1-1-35

<http://www.occpa.or.jp/>

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

印刷・製本 アインズ株式会社 大阪営業所

〒541-0041 大阪市中央区北浜 2-1-14

**Archaeological Report
of the
Saikudani Site in Osaka, Japan**

Volume II

A Report of Excavation
Prior to the Development of the Fudegasaki Residential Flats
in 2006 and 2007

December 2007

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Report
of the
Saikudani Site in Osaka, Japan**

Volume II

A Report of Excavation
Prior to the Development of the Fudegasaki Residential Flats
in 2006 and 2007

December 2007

Osaka City Cultural Properties Association